

ことわり—道理
と琴破とにかけ
ていふ

してかくなん、

けふよりはわが慰みに何かせん

物くさ太郎、いまだ起きもあがらず、あさましと思ひて、女房のかたを打見て、

ことわりなれば物もいはれず

と申しければ、あなやさしの男の心やと思しめして、よし／＼是も前世の宿縁なり、筒様に物思ひかけらるゝも、今生ならぬ縁にてこそ、かくも有るらんと思しめして、比翼のたらしをなしたまふ。今宵も既に明けければ、いそぎ歸らんとする時、女房仰せらるゝやうは、力及ばず、かやうに見参に入りぬるうへは、われ人この世ならぬ縁なり、心ざし思召めさば、是にとどまり給へ、われらは宮づかひの身なれども、何か苦しかるべきとありければ、承るとてとどまりぬ。其後は此女房下女二人そへ、よるひるこれをこしらへて、七日湯風呂に入れければ、七日と申すにはうつくしき玉の如くになりけり。其後は日々にしたがつて玉の光あるに似たり。をとこ美男の名をとり、うた連歌人にすぐれたり。女房かしこき人にて、男の禮法を教へける。しかるに直垂の衣紋がかり、袴のけまはし、烏帽子の著ぎは、鬢つきまでも、いかなる公卿殿上人にも勝れたり。かゝる程に豊前の守の殿

もつかう車—帽
額の簾をかけた
る車をいふか

此は由聞しめし、見参のために召さる。ひきつくるひてまるられたり。豊前の守を見
て男美男におはしける、苗字はたれと問ひ給へば、物くさ太郎と答へける。殊の外なる
御名かなとて、はじめてうたの左衛門になし奉る。かやうにとかくする程に、此事内裏
へ聞召して、いそぎ参れとの宣旨なり。辭退申せど叶はず。もつかう車にのりて院参す
る。大極殿にめし、汝はまことに連歌の上手にて侍るなる、歌二首つかまつれと宣旨な
り。折ふし梅花に鶯のとびちりて囀るをきよ、かくなん、

鶯のぬれたる聲のきこゆるは梅の花笠もるや春雨

みかど是を叡覽ありて、汝が方にも梅といふかと宣旨なりければ、うけたまはりもあ
ず、

信濃にはばいかといふも梅の花みやこの事はいかどあるらん

みかど是をきこしめし、御感に入りて、汝が先祖を申せと宣旨なり。先祖もなき者にて
候ふと申しけり。さらば信濃の國の目代へ尋ねよとて、その所の地頭へ宣旨をなし、御尋
ねありければ、こもに巻いたる文書をとり寄せて、見参に入れ奉る。これを開き御覽す
れば、人王五十三代のみかど、仁明天皇の第二の皇子深草の天皇の御子、二位の中將と

おたがー御多賀
しゆくぜんー宿
善か
三熱の苦みー
日に三度づつ受
くる熱の苦み

申す人、信濃へ流されて、年月を送り給ひしが、一人の御子もなし、これを悲み給ひて、善光寺の如來にまゐりて、一人の御子を申しうけ給ひて、御年三歳にて、二人の親におくれ給ひて、其後凡夫の塵にまじはり給ひて、かゝる賤しき身となり給へり。みかど叡覽ましゝて、皇子をはなれて程近き人にておはしけるよとて、信濃の中將になして、甲斐信濃兩國を給はりて、此女房相具して信濃へ下り、あさひの郷につき給ふ。あたらしの郷の地頭左衛門尉をば、忠ふかき人なればとて、甲斐信濃の兩國の總政所そうまんじころに定めたまふ。又三年養ひたる百姓にも、みなく所領をとらせて、我身はつるまの郷に御所を建てて、眷族をおき、貴賤上下にかしづかれ、國の政事おだやかにありしかば、佛神三寶の加護ありて、百廿年の春秋はるりきをおくり、御子あまた出できて、七珍萬寶に飽き充ちて、長生ながいきの神となり給ふ。殿はおたがの大明神、女房はあさひの權現と現れたまふ。是は文徳天皇の御時なりし。かれはしゆくぜんむすぶの神とあらはれ、男女をきはらず、戀せん人はみづからが前に參らば叶へんと、誓深くおはしますなり。およそ凡夫は本地ほんぢを申せば腹をたて、神は本地をあらはせば、三熱の苦みをさまして、直ぢきに喜びたまふなり。人の心もかくの如く、物くさくとも身はすぐなるものなり。毎日一度じ此草子を讀みて、人に聞か

せん人は、財寶にあきみちて、さいはひ心にまかすべしとの御誓なり。めでたき事なかなか申すもおろかなり。

さ

づ

れ

い

し

さ
ぐ
れ
い
し

神武天皇より十二代成務天皇と申し奉るは、限なくめでたき御世なり。此帝に男みこ、
姫宮三十八人の皇子わうじおはしける。卅八人めは姫宮にて渡らせ給ふ。數かずも知らぬほどの皇
子たちの御末なればとて、その御名をさぐれ石の宮とぞ申しける。御容貌おんかたち世に勝れてめ
でたくおはしければ、數多の御中にもこえて、御寵愛斜かたむきならずいつきかしづき給ひける。
さるほどに御年十四にて、攝政殿の北の政所に移しまるらせ給ふ。めでたき御おほえ、
一天四海のうちに上こす人こそなかりけり。
さぐれ石の宮、世間の有爲轉變のことわりを、つくづく思召しよりて、それ佛道を願ふ
に、淨土は十方にありと聞けども、中にもめでたき淨土は、東方淨瑠璃世界じゆんりうりに若くはな
しと思しとりて、つねに怠らず、藥師の御名號、南無藥師瑠璃光如來と唱へ給ふ。ある
夕暮の事なるに、月の出づる山の端打ちながめ給ひ、わが生れん淨土はそなたぞと思し

くわんにん一人

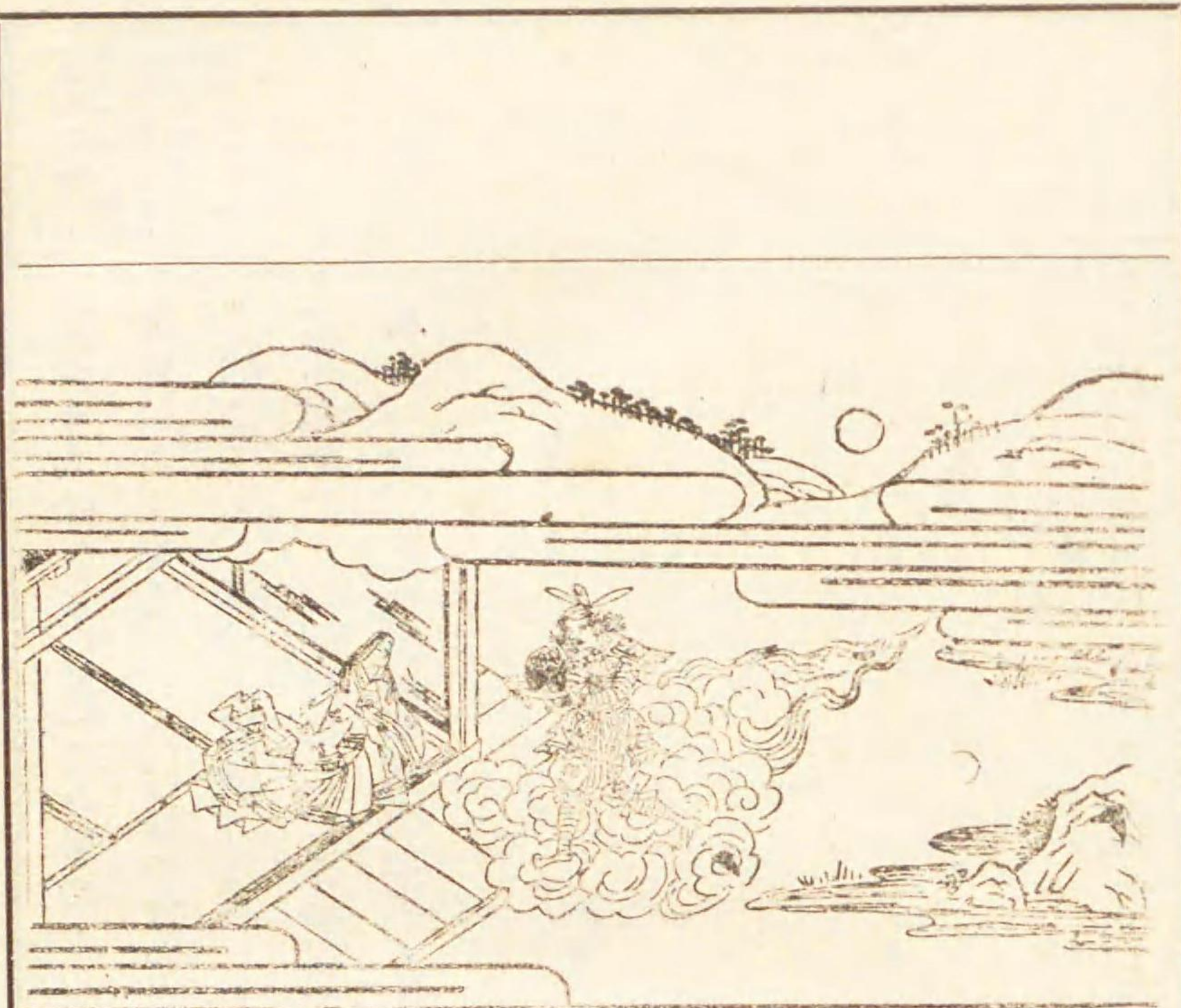
めし、獨りたよすみ給ふに、御前に虚空より黄金こがねの天冠を額にあてたるくわんにん一人
まゐり、さゞれ石の宮に瑠璃の壺を捧げ申しければ、薬師如來の御つかはしめ、金毘羅
大將なりとぞ申しける。

此壺に妙薬あり、これすなはち不老不死の薬なり。これをきこしめされば、御年もより
たまはず、わづらはしき御心ちもなく、いつも變らぬ御姿にて、御命の終もなく、いつ
までもめでたく榮え給はんとて、かき消すやうに失せにけり。さゞれ石の宮、此壺をう
け取らせ給ひ、あらありがたや、年月願ひ奉るしるしかなとて、三度禮し、良薬らうやく嘗め給
ふに、あまた味ひ言ふばかりなし。青き壺に白き文字もじあり、よみて御覽すれば、歌な
り。

あまた一甚だの
意

君が代は千代に八千代にさゞれ石のいはほとなりて昔のむすまで
とあり。これすなはち薬師如來の御詠歌なるべし。それより御名を引きかへて、いはほ
の宮とぞ申しける。

其後年月を送り給ふに、聊か物の悲しき事もなく、いつも常磐とこしほの御姿にて、榮花にほ
こり給ふ。御命長く渡らせ給ふことは、すべて八百餘歳なり。成務天皇、仲哀天皇、神



さゞれいし

功皇后、應神天皇、仁徳天皇、履仲天皇、反正
天皇、允恭天皇、安康天皇、雄略天皇、清寧天
皇、十一代の間、いつもかはらぬ御姿にて、榮
えさせ給ふなり。さゞれ石の宮、あるよもすが
ら燈火ともしびを掲げ、薬師眞言を念じおはしけるに、
かたじけなくも薬師如來、いとも貴き御姿にて、
いはほの宮に對ひのたまふは、汝はいつまで此
世界にあらん、人間の樂はわづかの事なり、それ
淨瑠璃世界の地は、すなはち瑠璃なり、汝を移さ
ん淨土は、七寶の蓮花の上に玉の寶殿を立てて、
黄金こがねの扉をならべ、玉のすだれをかけ、床ゆかには
錦のしとねを敷き、綾羅莊嚴しやうごんを以て身を飾りた
る、數千人の女官にょくわん、時々刻々に守護を加へ、百
味の飲食おんじきをさゞる事ひまもなし、此世界にて

八苦一_レ生苦、老苦、病苦、死苦、愛別離苦、五盛陰苦、求不得苦、怨憎會苦

契深き人は、目の前に竝み居つゝ、何事も心のまよの極樂なれば、さのみはいかで八苦の世界にあらんとて、いはほの宮を東方淨瑠璃世界に導き給ふ。其身をもかへずして成佛し給ふこと、稀代^{きだい}不思議のためしとかや。上代も末代もかよるめでたきためしなし。今は末世のこと、か程にこそはおはせずとも、神や佛を念ずる人は、やはか其しるしの無かるべき。南無藥師瑠璃光如來く、おんころくせんたりまとうきそはかく。

蛤の草紙

融の草紙

蛤の草紙

まどしき一貧しき

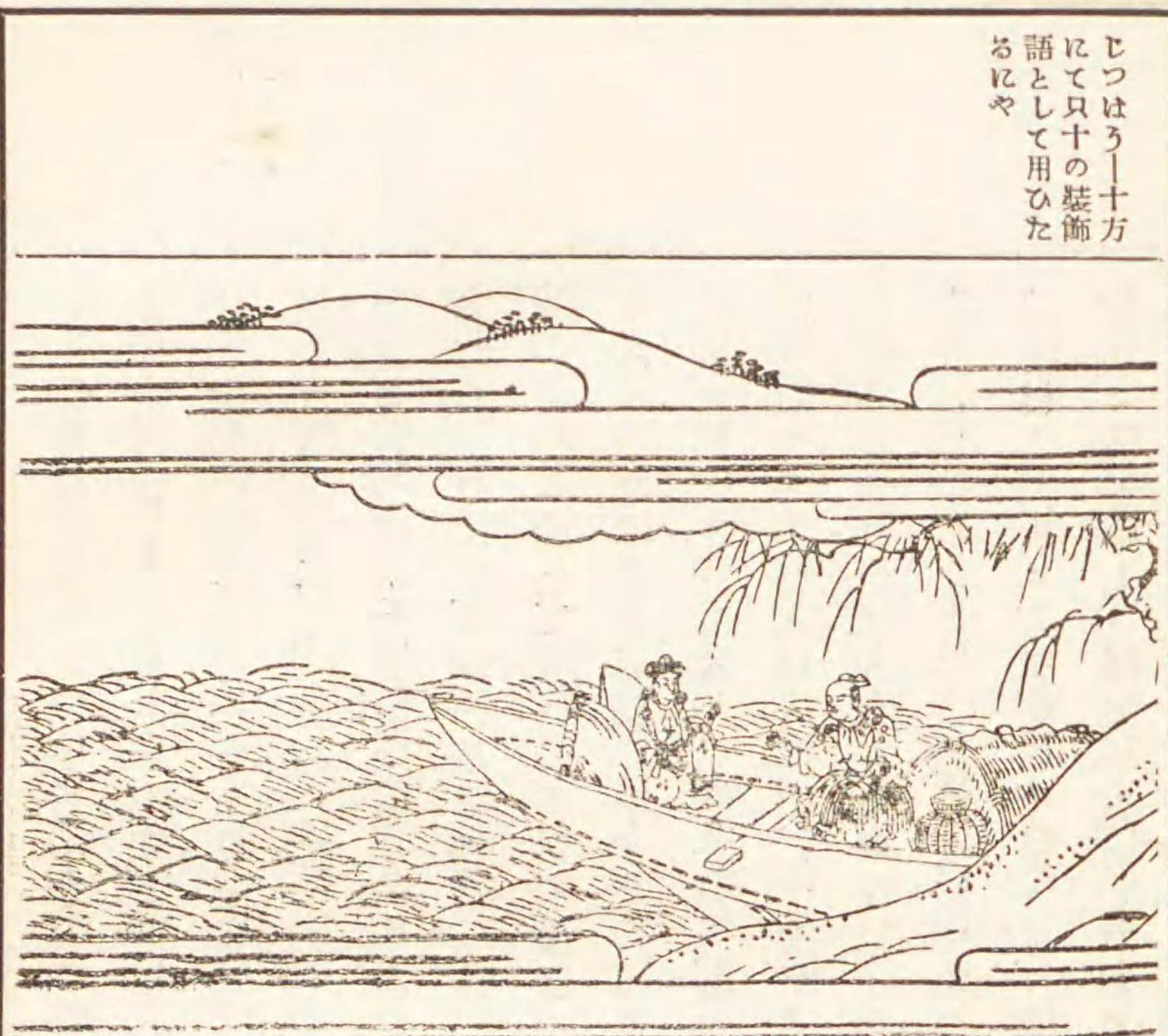
うるくづ魚

天竺摩迦多國の傍に、しどらと申す人あり、世にすぐれてまどしき人にておはしけり。父には早く離れ、母親一人もち給ひけるが、その頃天竺ことのほか飢饉ゆきて、人つかれて死する事かぎりなし。しどら母を養ひかねて、よろづの營みをして母をすごさんために、天に仰ぎ地に俯して營めども、更に其甲斐なかりけり。こゝに思ひいだしたる事ありとて、浦回に出でて釣をして、うるくづを取りて母をすごさんとて、浦へ出でて小舟に乗り、沖中へ漕きいだし釣をたれ給へり。色々の魚をつりて、毎日母を養ひけり。さればしどらは是を嬉しき事に思ひけるが、ある時又浦へ出でて釣を垂れ給ひしが、其日もはや暮方になりけれども、魚一つも釣りえざりき。しどら心に思ふやう、此程いらの殺生をして、母を養ひたる報にや、更に魚つられざりけるとて、しどら心に思ふやう、いかに母の我を待ちかねさせ給ふらん、今まで物をまるらずして、さぞ御心つかれ

釣する心もそば
になりて一釣す
る心もよそにな
りて

給はんとて、釣する心もそばになりて、母の事をのみ案じるたりしが、釣竿も心のありけるにや、すは魚こそかよりたるらめと思ひ、ひそかに釣りあけて見れば、うつくしき蛤一つ釣りあけたり。しどら心に思ひけるは、是はいかなる事やらん、何の役にたつべきとて、海へ投げ入れたたり。さてこゝには魚なきとて、西の海へ舟こぎて行き、つりたれしかば、又以前の南の海にて釣りあけたりし蛤なり。しどら心に思ふやう、あらく不思議の事やとて、又とりはなして海へ投げ入れたたり。それより又、北の海へ漕ぎ行き、つりをたれし所に、又西の海にてつり上げし蛤あがりけり。その時しどら思ふやう、是は希代不思議の事となり、一度ならず二度ならず、三度までつりあけたり、たゞかりそめながらも三世の契を得たる物かなとて、此たびは取りあけて舟のうちへ投げ入れて、又つりを垂れければ、彼の蛤俄に大きになりけり。あら不思議の事やとて、しどら取りて海へ入れんとする所に、この蛤のうちより金色のひかり三筋さしけり。是はいかなる事ぞやとて、目を驚かし、肝を消し、おそれをなして遠ざかりける。此蛤がひ二つに開き、其中より容顔美麗なる女房の、年のよはひ十七八ばかりなるが出でたり。しどらこれを見て、潮をむすび、手水をつかひつゝ申しけるは、是ほどいつくしき女房の

じつはう十方
にて只十の装飾
語として用ひた
るにや



姿を見れば春の花、形を見れば秋の月、じつはう十の指までも、瑠璃をのべたる如くなる女房の、海よりあがらせたまふ事の不思議さよ、若しも龍女などと申す人にておはしまし候ふか、此しづの男の舟に上り給ふ事、冥加もなき事なり、たゞ御すみかへ歸り給へと申す。其時女房仰せけるは、われは來たるかたも知らず、又ゆくすゑも知らずさふらへば、そなたの宿へつれて御ゆき候へ、たがひの營みをして浮世をわたらんとのたまへば、しどら申すやう、あらおそろしや、思ひもよらぬ事なり、われははや四十になり候へども、いまだ女房ももたず候ふ、其いはれは六十に餘りたる母を一人もち候へば、もしわれ女房をもち候はゞ、心もそばになりて、

物のゆくへ―物の
のなりゆき

母を無沙汰にあつかひ申さん事もや候はんと思ひ、母の氣をそむくと存じ候へば、妻をもつ事思ひもよらぬ事やとて、けしからず聞えければ、此女房仰せけるは、なさけなき人かな、物のゆくへをよく聞き給へ、袖のふり合せも他生の縁と聞くぞかし、たとへば鳥類などだにも、縁ある枝に羽をやすむるぞかし、ましてや是までそなたを頼み参らせて、此舟にもとづきし甲斐もなく、歸れと仰せ候ふことの淺ましきよとて、誠に思ひ入りたる氣色にて、涙にむせび給へば、しどらは是を見てつらく思ふやう、さらばせめて陸へおろさんとて、いそぎ舟を漕ぎ、汀につきて舟よりいそぎおろしまるらせて申しけるは、われは是まで届け申すことにて候ふ、さらば御暇申さんとて、歸らんとしければ、此女房袖にすがり歎かせ給ふやう、せめてそなたの宿まで御つれ候へ、一夜を明かさせてたび給へ、明けなばいづかたへも足にまかせて行き候はんとたまひけり。しどら申されけるは、われくが家と申すは、たゞ世の常の家にてもなく、誠にしづの男のねやの有様、目もあてられざる所なれば、おき奉らん所更になく候ふ、常の座敷に置きまらせん事は、冥加もなき事にて候へば、家をつくりまらせて置き奉らん、御まち候へと申せば、女房のたまひけるは、いかなる金銀瑠璃碑礫瑪瑙をもつて作りたる家なりとも、

棚をかき―棚を
懸けの意にて一
段高き座を設く
ること

よそへは更にまゐりたくも無し、そなたのすみかへならば行き候はんとたまへば、すこし御待ち候へ、先づわれく宿にゆきて、母に伺ひ申して御むかひに参り候はんとて、しどらはすみかに歸りて、母に此由申しければ、母なめならず喜び給ひて、いそぎ座敷を清め、こなたへ迎へ申さんとたまひければ、しどら喜びて、いそぎ海のはたへ御むかひにぞまゐりける。此女房待ちかね給ひてわたりける。道のほとりにて行きあひ奉りける。しどら申しけるは、御はだしにては御足いたく候はん程に、此賤しき賤の男がうしろに負はれ給へと申せば、よろこび給ひて負はれさせ給ひけり。さて我宿へ行きつきおろしければ、やがて母出であひ見たてまつりて、あら冥加もなや、是ぞ天人と申す人なりとて、わがる所にはいかゞとて俄に棚をかき、われより高く置き奉りて、あがめさせ給ふ事かぎりなし。其時しどらが母の申す、冥加もなき申し事にて候へども、などしどらが妻にならせ給ふ人にておはしまし候はずや、しどらもはや四十になりまらせ候ふが、いまだ妻ももたず、子の一人も候はぬこそ、明暮わびまらせ候ひつれ、我身ははや六十にあまり、明日をも知らぬ身の、此事をのみ案じさふらふ、あはれく似あはしき妻もがなとて歎きければ、女房仰せけるやうは、われはこれ來りし方も知らず、も

ふり人―天より
降りし人
くましね―洗米

つむ―紡錘

阿耨多羅云々―
無上正徧知と譯
す

とより行くへも知らぬ身なれば、いかやうにもしどらと置かせ給へ、われ人しらぬ營みをもして、諸共に浮世をわたり候はんとのたまひければ、母なのに喜び給ひて、さらばといひて、しどらに此由いひければ、もとより親孝行の人なれば、ともかくも母の御はからひと御返事申されければ、天竺も人の心の甚しきところなれば、みなく人申しけるは、しどらの所にこそ不思議のふり人わたり候ふ、いざやまゐり拜まんとて、道俗男女にいたるまで、くましねを包みなどしてまゐりけり。さるほどに白米三石六斗、日のうちによりたり。其時まゐりたる女房にのたまひけるは、われはさだかなるものなれば、苧をと申す物あらばくれよと仰せければ、その次の日は苧ををもちてまゐりけり。しどら心にめでたき事のありて、まへの日よりまゐらせ候ふ米にて、母をすごし候はん事の嬉しさよとて喜びけり。また此女房は苧ををこしらへてひそかにし給ふほどに、いつうませ給ふとは見えねども、夥しくうませ給ひけり。さる程につむといふ物ほしき山のたまへば、しどらやがて尋ね求めて參らせけり。此苧ををつむぎ給ひし音こそ面白く聞えけれ。よくくきよとて文字もんじに寫して見れば、やるてには南無常住佛なんぶじやうぢうぶつと響き、引きいれよれるてには、南無常住法なんぶじやうぢうほふと響き、巻き給ふときは、阿耨多羅三藐三菩提あのくたらみやくと巻きをさめ給ふ。

具足―器具

本―手本

くわうしゆちは
うべんのせつ―
未詳

又てがいと申す物を取り給ふ時は、南無妙と響き、つむがせ給ひけるほどに、二十五月と申すにつむぎ出だし給ひて、さて機はたの具足ぐそくほしきと仰せければ、さらばとてこしらへ見んとするを、御覽じてのたまひけるは、よの常の機はたの具足ぐそくにてはわろく候ふ、われくが機はたの具足ぐそくは常のにかはり候ふとて、本ほんをいだし給へば、御好みのやうにこしらへて參らせければ、此女房よろこび給ひて、何として巻きたてみると宣ひける所に、示現神通力者じげんじんつうりきしやはやがて心えさせ給ひ、くわうしゆちはうべんのせつなれば、いかでかわろかるべきぞや。一度いちども見ぬ人二人來りて、一夜いちやの宿を借りたまふ。此機はたをとにも巻き給へり。是を始めてしどらの母不思議の事かなとて、いよくあがめさせ給ふこと限なし。しどらは此機はたたちて、母のなぐさまれ候ふ事の嬉しさよ、いつよりも心やすく過ぎゆかれ、又營いごなみのわざをし、此程は心勞しんらうとも覺ず、是ほど天竺の飢饉世にすぐれけれども、我々心やすく候ふ事こそ嬉しけれとて、母の御足をわが額の上におきて、寝させまゐらせり。其時しどらがそばに寝させ給ひたる女房、しどらに尋ね給ふやうは、何とて泣き給ひ候ふぞと仰せければ、若き時御ふとり候ふころは、御足を額ひたいにねさせ申すに、重くおはしまし候ひしが、はや御年もより給へは、次第に身も細らせ給ひて、ことの外に軽く候ふ程に、

越鳥云々文選
胡馬依北風、越
鳥巢南枝
四鳥の別れ一孔
子家語「桓山之
鳥生四子焉、羽
翼既成、將分于
四海、其母悲鳴
而送之」

しゆにん衆人
か

まんく満々

泣くより外の事はなく候ふと語り給へば、女房聞き給ひてのたまふやう、誠に羨ましのしどらの心や、いかなる佛の御恵みもなにか有らざらん、か程に親孝行の人は世にめづらしき事やとて、やがて物語をぞし給ひける。たとへば越鳥南枝に巢をかくる翼も、親のはごくみを思ひ、巢をたてられて諸共にたつとき、四鳥の別れとて、母子のわかれを知らぬ妄執の雲にへだたれども、親孝行の鳥は、生まれたる木の枝に百日が間、日に一度づつ来りて羽をやすむるを、母の鳥、さては是こそ我子よとて喜びけるとて、やがてしどらを慰め給ひける。孝行の鳥の奇特は、何と捕らばやとて網をかけぬれども、とられまじきなり、ことに鷹鷲などにも捕られまじきなり、まして人間と生をうけて、親にしたがはぬ人、この世にては禍をうけ、七難あやまちにあひて、その身おもふ事叶ひ難し、親孝行の人には天より福を與へ、七難則滅七福則生とて、何事も思ふ事の日のうちには叶ひ、しゆにん愛敬ありて、おのづから今生にては、上ぐう菩提の道にゆきて、安穩快樂の氣をうけ、九品蓮臺の座をさして、東方藥師の淨土、西方阿彌陀の淨土にて、諸佛の上の淨土にもとづき、おのづから示現神通力の身となりて、念彼觀音と唱へさせん事疑なしと語り給ひける。息のほひは異香薫じて、まんくと満ちくと、夜晝のさかひも

黒木一皮のつき
たるまゝの木

こばん一葦織か

なし。いざ機を織らんとて、しどらにのたまひけるは、此家ははたばりせばくて織らるまじく候ふ、そばに機屋をつくりてたび給へとのたまへば、しどら俄に黒木をとりて、機屋をつくりてまるらせけり。其時女房仰せけるは、かまへて此機おり見んほど、此方へ人を入れまじきと仰せければ、しどら心得候ふとて、母に此由語りけり。夕ぐれに若き女一人いづくよりとも知らず來りて、宿をかり給ふ。しどらの女房やがて此機屋をかしけり。しどらの母仰せけるは、此機屋へ人を入れまじと仰せ候ふが、何とて宿を御かし候ふやと仰せければ、此人は苦しからぬとて、二人して機を織り給ふ音こそめづらしけれ。妙法蓮華經觀世音菩薩、普門品第二十五の菩薩、玉の御はたを織り給ふ。誠に法華經の、一の卷より八の卷に至るまで、二十八品ことごとく織り入れ給ふ御こゑ、耳に聞えてありがたく、よるひるの境もしらすして、十二月の間に織り出だし給ひて、女房仰せけるは、今おりいだし候ふとて、こばんの如くに厚さ六寸ばかり、廣さ二尺四方にたよみ給ひて、しどらに仰せけるは、あす摩迦多國鹿野園の市にもちて行き、御賣り候へとのたまひければ、しどら代はいか程と申し候はん。金錢三千貫に御賣り候へと仰せければ、あら不思議や、此程賣りかひ

持ちてゆき―持ちてゆく―の行か

候ふ布は、よの常やすく候ふが、是は餘りにおびたしく候ふとて、をかしけに申しければ、女房仰せけるは、只よのつねの布にて候はず、われくが織る布は、定めて鹿野園の市にて見知る人もあるべし、代は限るべからず候ふ、はやく市へ人も立つらん、行き給へと仰せければ、しどら持ちてゆき、鹿野園の市にて、是はいかなる物にて候ふとて笑ひ、又は不審さうに見る人もあり。一日もちてまはれども、たれにても取りて見る人だにもなし。しどら心に思ふやう、さればこそ知らぬ事をして、かゝる物を市へ出だし、人の笑草になる事の無念さよとて、持ちて歸らんとする所に、道にて年のよはひ六十に餘りたる老人の、鬢鬚いかにも白く、其身は人にすぐれ、葦毛の馬にのり、とももの人三十三人あるに、行きあひたり。此馬に乗り給ひたる老人仰せけるは、汝はいづくの者ぞと問はせ給へば、われはしどらと申すものにて候ふが、鹿野園へ布を賣りにまかりて候ふが、買主なくして持ちて歸り候ふと申す。汝は聞き及びたる者なり、其布みんこのたまひ候ふほどに、馬の上へさしあけたり。三十三人の人々、此布をひろげければ、長さ三十三尋なり。近頃めづらしき布かな。われ買はん、代はいかほどと仰せければ、金錢三千貫に賣り候はんと申しければ、あらやすの布やとて、さらばわれくが所へとて、しど

くわうゑん―廣園か

らも誘ひ給うて、それより南の方へさして行く。くわうゑんまんくとして、雲に聳えて門あり。見れば瑪瑙の礎に水晶の珠を柱とし、瑠璃のたるき、碑礫瑪瑙にてうはぶきし、なかく目を驚かすばかりなり。門のうちへ入りて見れば、異香薫じて花降り、音楽のこゑ天に満ちて、心も若くよはひも久しくある心ちして、歸らんことを忘れたり。此馬にのり給ふ老人、椽のきは迄のりつけておりさせ給ひ、うちへ入りて金錢三千貫三人してもちて出でたり。あらかゝる力の強き人もあるやと、しどら恐しく思ひけり。扱今の布賣をこなたへ呼べとて、座敷に呼びあけ給ふ。しどら足ふるひて心も亂れ、身のおき所もなく思ひる。餘りによび給ふほどに、階段をあがり大床にあがる。心はさながら薄氷をふむが如くにて上りけり。さて老人のたまふは、其七徳ほうしゆの酒飲ませよとのたまへば、もとよりしどら上戸にて、一杯飲みて見れば、中々甘露の味ひみちくして、言語をこらへぬ酒なり。いかほど飲むべけれども、老人おほせけるは、七杯より多く飲むべからずとの仰せなれば、七杯飲ませけり。さて金錢三千貫をば、是より送り候はんとて、おそろしけなる人三人呼び出だされけり。名をば聲聞じんとくどしや、毘沙門じんとくどしや、婆羅門じんとくどしやと申す。

大床―椽
ほうしゆ―保壽か

言語―言語道斷の意

きたりければ
送りければの
衍

此三人に仰せつけさせたまひて、三千貫の金錢を、たゞ一度にしどらが宿へきたりければ、其時しどら御いとま申さんと言ひければ、老人仰せけるは、今飲みたる七徳ほうしの酒は、觀音の淨土にある酒なり一杯のめば一千年のよはひを保つなり、ましてや汝は、七杯のむ間、七千年の齡あるべし、此後は物を食はずともほしくもあるまじき、物を著すともさむくあるまじきなり。是ぞ親孝行のしるしよとて、御立ちましくて雲の上ののりて行き給へば、五色の光さして、南の天にさがり給ふと思へば、しどら我宿へ歸るなり。女房にとく語らんとしければ、其時の有様をいはぬさきに、少しもたがはず女房語りたまへば、しどら心に思ふやう、おそろしの事や、是は神通をさとる化身ぞやと思ふ所に、此女房仰せけるは、さらばわれくは御いとま申し候はんとたまへば、母きよてうたてしき御ことかな、此程は思ひのほかなる人を迎へまらせて、しどらともに嬉しく思ひまらせ、何にたとへんかたも候はぬに、かやうに仰せ候ふ事、あら情なやとて、天に仰ぎ地に俯して、なけき給ふ事はかぎりなし。女房仰せけるは、かやうに永々しく居候はんづる事ならば、いかなる事をもかせぎ出だし候うて、後のかたみにも見せまらせ、又過ぎにしかたの事をも、御忘れ候ふやうにと思ひ候へども、われくが業には

此布おり出だし候て、金錢三千貫に賣りまらせ候ておき候ふ事も、ことなる如く思しめすまじく候ふ、是にて一世を御過ぎ候はんなり、是ひとへにしどら親孝行なるしるしなり、南方普陀落世界の觀音の淨土より、御つかひとしてまらり候ふ、今は何をかつよむべき、われは童男童女身といふ、觀音に仕へ奉るものなり、布賣りにおはせし所は、南方普陀落世界の觀音の淨土なり、これよりのちは七千年のよはひなり、これは七徳ほうしの酒七杯のみ給ふゆゑなり、此のちはいよく富貴繁昌にて、佛神三寶の加護あるべし。かの酒まらり候ふとき、三人出でてしやく取り候ひしこそ、我々と肩をならべたる人にて候ふ、名をば聲聞じんとくどしや、一人は毘沙門じんとくどしや、一人は婆羅門じんとくどしやと申すなり、これもひとへに親孝行の徳により、かくの如くあはれみ給ふ事まぎれなし、さらばと言ひてしどらが宿をたち出でて、門にていとまごひさせ給ふ事、四鳥の別れのごとくなり。名残をしやとて、南の空にさがらせ給ふかと思れば、白雲にのり給うてあがらせ給ふなり。虚空に音樂ひどきて、異香四方に薫じ、花ふり、もろくの菩薩たち迎ひにまららせ給ふ。さてもしどらは呆れたとすみけるが、何と思ふともかさねて逢ふべき事ならねば、思ひきりつゝ親子わが宿へ歸りける。それより

現當一現世と當
來(未來)

して富貴繁昌して、親を心やすく養ひ給ふ。さてしどらはおのづから成佛得道の縁をう
け、佛の位となり、七千年と申すに天にあげり給ふ。其時紫雲たなびきて、いきやう四方
にみちくゝて花ふり、不老不死の風ふきて、音樂の聲ひまもなく、廿五の菩薩三十三の童
子、廿八ふしや三千佛みないろめき、十六の天童、四天五大尊、みなくゝ虚空にみちくゝ
給ふ。是ひとへに親孝行のしるしなり。後々とても此草子見給うて親孝行に候はど、か
くの如くに富み榮えて、現當二世のねがひたちどころに叶ふべし。まづ現世にては七難
即滅しさはりもなく、しゆにん愛敬ありて、末繁昌なるべし。後の世にては必ず佛果を得
べき事疑なし。偏に親孝行にして、此草子を人にも御讀み聞かせあるべし。

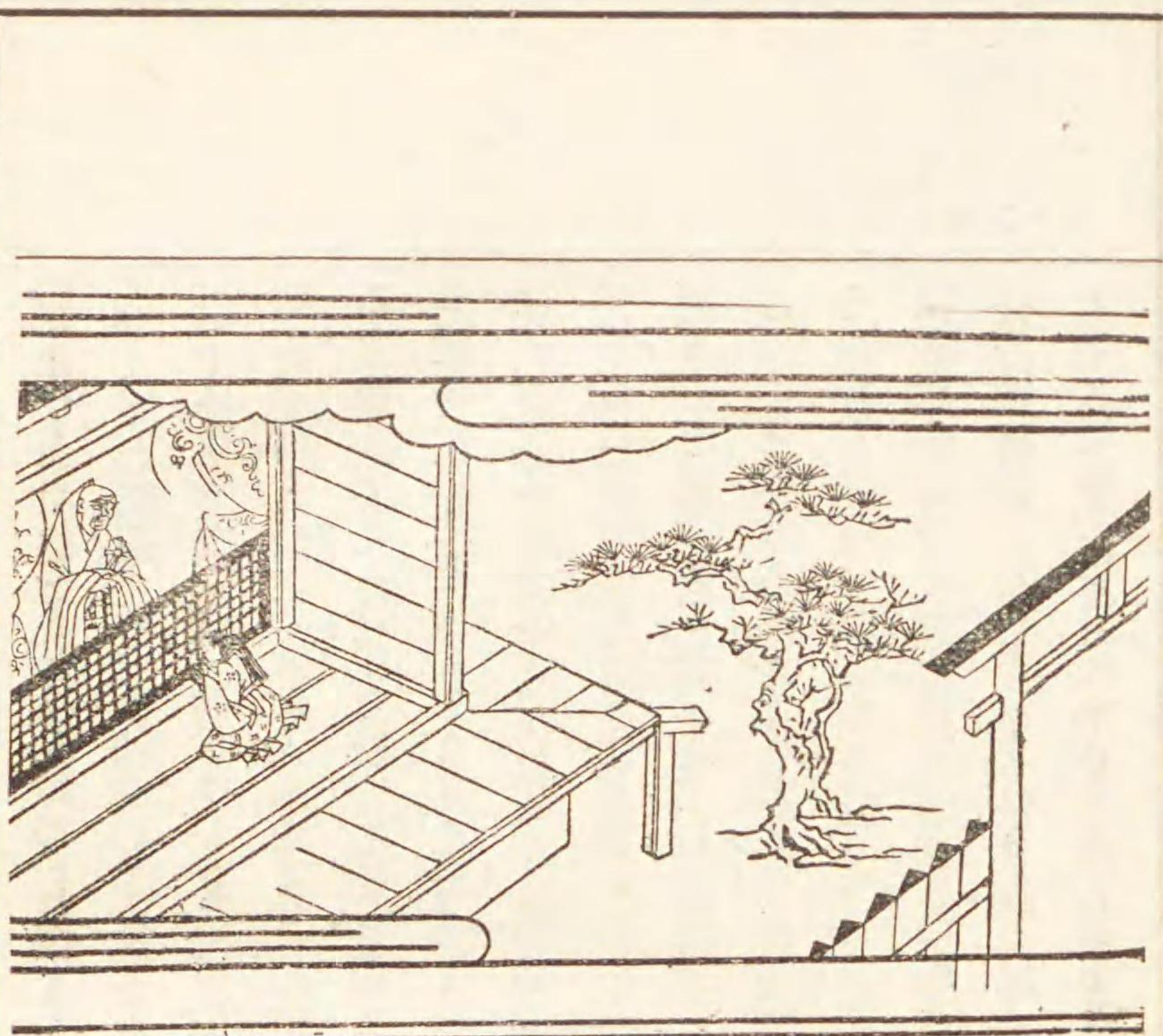
小 敦 盛

小 敦 盛

さても敦盛の北の御方は、都西山にしやまの傍に深く忍び給ひけるが、敦盛の討たれさせ給ひぬると聞しめし、夢かうつゝか、こはいかなる事ぞと伏し沈み泣き給ふ。世の常の事ならねば、叫べど聲も出でざりけり。身に餘り悲しく思しめし、衣きぬ引きかづき臥したまふ。いたはしや敦盛、源氏謀反むほんを企てて、みづからはいかならんあづまをこ東男に見馴れ給ひて、敦盛が事をば忘れこそ候はんずらんとたはぶれ給ひけり。又御身は只ならぬ身なり、男子おんしにてあるならば、これを記念かたみにとらせよとて、金かねづくりの太刀、女子によしにてあるならば、一面観音を取らせよとて、取出だし留め給ふ。かやうに色々あり。又何につけてもあはれさを、これに譬へんかたもなし。さて月日を送りたまふ程に、御産の紐をぞ解き給ふ。見ればいつくしき若君にてましますなり。さる程にいかなる所にも預けおき、記念に見ばやと思しめせども、平家の末をば堅く探し出だし、十歳以後は首を切り、二歳三歳を

えんたんづか
未詳

ば水に入れ、七歳八歳をばさし殺す。人のうへさへ悲しく思ひけるに、みづから此若君をとられ、憂き目を見んことも悲しきやと思しめして、袷にさし巻きて、えんたんづかの刀を添へて、泣くくさがり松にぞ捨てたまふ。折節法然上人、御弟子十餘人を引きつれて、賀茂の大明神へ御参りありけるが、さがり松にて幼き者の泣くこゑを聞きめして、立ちより御覽すれば、いつくしき若君にてましますなり。法然上人御覽じて、不思議や刀を添へ、衣に巻きて捨てけるやうは、直人にてはあるべからず、いか様これは賀茂の大明神の御利生なりと喜びて、拾ひ給ひ、御下向ありて乳母を添へ、いつきかしづき育て給ふ。さる程に成人ましくして學問人に優れ、一字を二字と悟り給ふ兒なり。或時熊谷入道、此小人を見申し、さても人多しとは申せども、一の谷の合戦に討たれさせ給ふ敦盛に、此ちご少しも違ひ給はぬ不思議さよとて、常に涙を流したまふ。さて此ちごのたまふ様、われは父母も無き孤子にて有りけるを、上人とりあけさせ給ひて候ふと申されければ、近づく法師此事を咎めばやと思へども、今更命失ふに及ばずして斟酌しけり。扱若君涙をながし仰せけるは、世の小人には父母をもち給ふが、みづからはいかならん、父母ともに無かりけるぞとて泣き給ふが、上人の御前へまゐられて、偕もみづ



からはいかならん、父母とても無かりけるとて、伏し沈み泣き給ふ。上人ともに涙をながし、むさんや汝は父母といふ人もなし、みなし子にて有りしを、この愚僧が今まで育ておきぬるぞ、かやうに言ふ言の葉を汝が父母とも思ふべしとぞのたまひける。若君聞召し、あら父母戀しやと伏し沈み、湯水をさへ呑み給はず、煩はせ給ふ事、七日にぞ成り給ふ。上人仰せ有りけるは、もし面々の中に、怪しきことを見出だしたる人も有るか、御尋ねありける。さる程に御うち

の熊谷入道申すやう、六歳の年説法の御時年の齡二十ばかりの上藤の、容顔美麗に御わたり候ふが、十二重に出で立ちたる御方の、此小人を召して愛し侍りけるが、人目繁ければさらぬ

やうにもてなして歸らせ給ひけるを、見まらせてこそ候へと申しければ、上人聞しめし、さらば明日より説法をのぶべしとあり。必ずその中に此ちごの母とおほしき人有るべしと思しめして、御説法をぞのべ給ふ。其時上人やがて涙を流し、御衣の袖をぬらし給ふ。やゝありてのたまふやう、此中の聽聞の人々聞しめせ、一とせ賀茂の大明神へまゐり候ふとき、さがり松にて幼き者を拾ひ、乳母を添へ育てて候ふが、七歳にまかり成り候ふが、此程何とやらん父母をこひて、けふ七日が間物をも喰はず、湯水をさへ呑み給はず、はや存命不定にて候ふ、この聽聞の中に行方をしろしめされたる人や御入り候ふ、幼き者に行方を知らせて給はりたる事ならば、何かは苦しかるべき、明日になり六波羅へ聞え、平家の末なればとて殺し給ふとても苦しからず、行方を知らせて心安く殺してたび給へと仰せもあへず、御衣の袖をぬらし給ふ。見る人聞く人、共に涙を流し給ふなり。その時左の方より、十二ひとへに出でたちたる女房の参りたまふが、此人の御姿を見れば青黛のまゆすみ、丹花の唇にほやかに、あやめの姿にて、大液の芙蓉のくれなる、未央の柳の緑、まゆすみ匂ひきて、はくじゆつの肌、蘭麝のにほひ、容顔美麗にして、心も心ならず、いつくしき女房の参り給ひて、此小人を見まらさせ給ひて、そのまゝ膝の

大液の芙蓉云々
 一長恨歌「大液芙蓉未央柳、芙蓉如面柳如眉、

はくじゆつ一白
 尤か

大將の入道しん
 ぜい云々何人
 とも定め難し

上へのせ愛し給ふが、幼き人ははや目も塞がり消え入り給ふやうに見えければ、容顔美麗の女房も、流涕こがれ給ひけり。上人も椅子より轉び落ち、流涕こがれたまひけり。其時女房仰せける様は、みづからをばいかなる者とか思しめず、御恥しながら、大將の入道しんぜいの爲には孫の局の妹、ならのないでんとはみづからが事なり、敦盛は十三、みづから十の年より、便のふみを取りかはし、妹背の中と成りしに、はかなくも元暦元年一の谷の合戦に討たれさせ給ひし時、みづから只ならずありしを、男子にて有るならば、これを記念に取らせよとて、その刀をおかせたまふ、また女子にてあらばとて、十一年の谷の合戦に討たれさせ給ひて留めたまふ、かやうに色々あり、さてやうく産の一面観音を、紅のほろに包み給ひて留めたまふ、かやうに色々あり、さてやうく産の紐を解きしかば、見れば敦盛に少しも違ひ給はぬ男子なれば、いづくにも隠し置き、記念に見ばやと思へども、平家の末をば堅く探しとり出だし、おとなしきをば首を切り、幼きをば水に入れ、二たび物を思はする、歎きの中よろこびなり。さる程に若君、母の名残のこゑを聞しめし、佛神三寶の加護とおほしくて、よみがへりし給ふかと、憂きにも涙、嬉しきにも涙、さきだつものは涙なり。さる程に其後、若君人目を御包みあり、賀茂の大明神へ御まゐりありて、祈誓申しある

かせ杖―撞木杖

やうこそあはれなれ。願はくば父の敦盛に今一度逢はせてたび給へと、肝膽をぞ碎き給ふ。満ずる曉、年の齡八十ばかりの老僧、かせ杖にすがり、彼のちごの枕がみに立ち、仰せ有りけるは、あはれや汝、いまだ見ぬ父をかほどに思ひけるか、これより末津の國昆陽こやの生田いくたと尋ねよとの御夢想ありけり。

さるほどに小人は起きあがり、斜ならず喜び、あくればやがて下向申し、足にまかせて行くほどに、都を出でて十餘日と申すには、津の國一の谷にぞつき給ふ。折ふし雨はふる、かみなり電いなづましひ繁ければ、心ほそさは限なし。磯うつ浪のころゑ、かれを聞きこれを見るに、いとどつらきは限なし。それより行くするを見給へば、小き堂あり、燈火ともひかすかなり。いかなる天魔魔縁の者の火か、または人もあらばと嬉しくて行きて見給へば、薄化粧に眉つくりたる氣色にて、いかにも花やかに出で立ちたる人の椽行道えんぎやうだうしておはしますなり。若君ほとくと叩き、物申さんとありければ、たぞやこの人も住まぬ所に、物申さんといふはいかなる者ぞとありければ、小人泣くくのたまふやう、これは都の者にて候ふが、父の行方ゆくへを尋ねて、此十餘日と申すに足にまかせて來り候ふが、雨はふる暗さはくらし、行くべき方もなし、今宵一夜の御宿を御かし候へとたまふ。さて父はいかなる

椽行道―椽側を
誦經念佛などし
つく歩むこと

者ぞとの給ふ時、小人仰せけるは、父にて候ふ人は、平家の一門修理の大夫經盛の御子、無官の大夫敦盛と申す人なり、一の谷の合戦かせんに討たれさせ給ひ候ふを、みづから戀しく思ひ申し、賀茂の大明神へ參り、百日祈りければあらたに靈夢を蒙り、足に任せて迷ひ申すなりとぞのたまふ。敦盛聞しめして、やがて倒れふし泣き給ふ。やゝありて起きあがりて、泣くく小人の手を執り引きよせて、召したる物の雨に濡れたるを、脱ぎかへさせ給ひて、ほとくと抱き付かせ給ふ。敦盛仰せ有りけるやうは、むざんや汝は、いまだ見ぬ父をかほどに思ひけるこそあはれなれ、汝胎内にして七月と申すに、一の谷の合戦かせんに出で、熊谷が手に掛り、十六の年討れて此八年が間、他生の苦患くげん申すばかりなし、まことに汝心ざしあらば、善根ぜんこんをして敦盛が後生に得さすべしとぞのたまふ。其時若君、さては我が父にてましますかとて、斜ならず喜びてとり付き給ふ。其後敦盛のたまふやう、我が事をかほどに思ひ給ふべからず、汝肝膽を碎き祈り申す心ざしを、賀茂の大明神あはれに思しめして、閻魔王に仰せありて、刹那の暇をこひて、今汝に見ゆるぞ、かまへて今より後、わが事をかほどに思ふべからずとのたまふ。若君仰せけるは、閻魔王に仰せありて、みづから御前に參るべし、父は是より都へ御上りありて、みづからが母に今

一たび見えさせ給へと申されければ、敦盛御涙を流しのたまふやう、あらむざんやな、生れてよりして此道は、さなきだに名残惜しきならひぞとて、髪搔き撫でて涙を流しの給ふやう、若君はさてこれより都へはのほるまじきとて、流涕こがれ給ひけり。敦盛思しめしけるは、心弱くて叶ふまじ、ことに時うつりいかゞせんと思しめしけり。若君はいまだ習はぬ旅の疲勞くたびれに、敦盛の膝を枕としてすこしまどろみ給ふ。さる程に敦盛名残の惜しさは限なしと思へども、よき序ついでと思しめして、心づよくなして、腰より矢立やたてを取り出だし、若君の左の袖に一首の歌を遊ばして、さて行きては歸り、歸りては行き、名残をぞ惜み給ふ。さてあるべきにあらざれば、かき消すやうに失せにけり。やゝありて若君起きあがり給ひ、父にいただき付かんとし給へば、ありつる堂なり。夜もやうく明けければ、やもめ鳥も告げ渡る。こはいかなるぞ、不思議や、父の膝を枕として臥したりと思ひしが、五寸ばかりの膝の骨の、苔蒸したるを見つけて、さてはわが父の骨にて有るよと思しめして、天に仰ぎ地に伏して流涕こがれ、いかなる事ぞとて悲み給ふ。たゞわれをも連れて、死出の山、三途の川の御供申すべしとて、聲も惜まず泣き給ふ。さて有るべきにあらざれば、爲ん方もなく力及ばず、父の膝の骨を首に掛けて、泣くく涙を

しるべに行き給ふ。さて左の袖より一首の歌を遊ばしける。

何なけくこやの生田の草枕露と消えにしわれな思ひそ

此歌を顔にあて、伏し沈み歎き給ふ。暫くありて蘇生よみがへりし給ひけり。かくて有るべきにあらざればとて、御歌と膝の骨とを首に掛け、泣くく都へぞ上りける。さて御歌を母御前にまゐらせられ給へば、敦盛の日頃遊ばしたる御手なり。わかれの時の御面影、今見るやうに思はれて、二たび物を思はする。歎きの中の喜びなり。とにかくにかにも成らばやと思しめすが、待てしばし我心、みづから空しくなるならば、若君何とかなるべきぞ。また憂き人の後世をも、たれか弔ふべきと思召し、思ひ返してとどまり給ふ。さるほどに北の御方はよくく物を案じたまふに、いたづらに月日を送らんよりも、いかなる所にも堂を立て、敦盛の御あとを弔はばやと思しめし、都あたりに柴の庵いほりを結び、わが身は二たび憂き世にかへること難し、まことや此世にて、敦盛に逢ひ奉らん事は及びなしと、流涕こがれ給へば、共に若君も天に仰ぎ地に伏して悲み給ふなり。北の御方思しめしけるは、釋迦佛しやくかほんの御教に、後世を願ひて極樂に參れば、同じ蓮はぢすに生ると説かせ給ふとうけ給はる、是を菩提の種として、御身を引きかへて、花の袂を墨染の袖となし、若君

袖より一袖にの
衍か

をば記念に見たくは思へども、見れば中々ものうきに、法然上人へ返さばやと思しめし、うきことにまた憂きことを思ひつゞけて、泣くくこそ別れたまひけり。かくて今ははや我身一つに成り給ひ、いつまで物を思ふべき、いかなる淵瀬へも身を投げばやと思へども、柴の庵いほりを結び、敦盛の菩提を弔ひ、御骨おんこををさめ、水を手向け花を折り、行ひすまして、終に往生を遂げ給ふ。いよく是を見る人々、よく後生肝要なるべきなり。

二十四 孝

二十四孝

大舜

隊々耕^ま春象 紛々耘^ま草禽 嗣^{ついで}堯登^あ寶位^に 孝感動^す天心^を
 大舜は至つて孝行なる人なり。父の名は瞽叟^{こそう}といへり、一段頑^{かたくな}にして、母は瞽^{かたま}しき人なり。弟はおほいに傲りて、いたづら人なり。然れども大舜はひたすら孝行をいたせり。ある時歴山といふ所に耕作しけるに、かれが孝行を感じて、大象が來つて田をたがへし、又鳥飛び來つて田の草をくさざり、耕作の助けをなしたるなり。扱其時天下の御あるじをば堯王と名づけ奉る。姫君まします。姉をば娥黃と申し、妹は女英と申し侍り。堯王すなはち舜の孝行なることをきこしめし及ばれ、御娘を後にそなへ、終に天下をゆづり給へり。これひとへに孝行の深き心よりおこれり。

娥黃—原本嫁皇とあり

漢文帝

仁孝臨^ひ天下^に 魏々冠^ま百王^に 漢廷事^ふ賢母^に 湯藥必親嘗^む

漢の文帝は漢の高祖の御子なり。いとけなき御名をば恒とぞ申し侍りき。母薄太后に孝行なり。よろづの食事を參らせらるゝ時は、まづみづからきこしめし試み給へり。兄弟も數多まし／＼けれども、此帝ほど仁義を行ひ孝行なるはなかりけり。此故に陳平、周勃などいひける臣下等、王になし參らせたり。それより漢の文帝と申し侍りき。然るに孝行の道は、上一人より下萬民まであるべき事なりと知るといへども、身に行ひ心に思ひ入る事はなり難きを、かたじけなくも四百餘州の天子の御身として、かくの如き御ことわざは、尊かりし御ころざしとぞ。さる程に世もゆたかに民も安く住みけるとなり。

丁 蘭

刻レ木爲ニ父母ニ 形容在日新 寄レ言諸子姪 聞早孝ニ其親ニ

丁蘭は河内の野王といふ所の人なり。十五のとし母におくれ、永くわかれを悲み、母の形を木像につくり、生ける人に事へぬる如くせり。丁蘭が妻ある夜の事なるに、火をもつて木像のおもてを焦したれば、瘡の如くにはれいで、膿血ながれて、二日を過しぬれば、妻の頭の髪が刀にて切りたる様になりて落ちたる程に、驚いて詫言をする間、丁蘭も奇特に思ひ、木像を大道へうつしおき、妻に三年わびことをさせたれば、一夜の内に雨風

奇特—變妙不思議の意

の音して、木像はみづから内へ歸りたるなり。それよりしてかりそめの事をも、木像のけしきを伺ひたるとなり。かやうに不思議なる事のあるほどに、孝行をなしたるはたぐひすくなき事なるべし。

孟 宗 字恭武或子恭

泪滴朔風寒 蕭々竹數竿 須臾春笋出 天意報ニ平安ニ

孟宗はいとけなくして父に後れ、ひとりの母を養へり。母年老いて常に病みいたはり、食の味ひもたびごとに變りければ、よしなき物を望めり。冬の事たるに竹子をほしく思へり。すなはち孟宗竹林に行き求むれども、雪ふかき折なればなどかたやすく得べき。ひとへに天道の御あはれみを頼み奉るとて、祈をかけて大きに悲み、竹によりそひける所に、俄に大地ひらけて、竹の子あまた生ひ出で侍りける。大に喜び、乃ちとりて歸りあつものにつくり、母に與へ侍りければ、母是を食してそのまゝ病もいえて齡をのべけり。是ひとへに孝行の深き心を感じて、天道より與へ給へり。

いたはり—苦痛する意

閔子騫

閔氏有ニ賢郎ニ 何曾怨ニ晚娘ニ 尊前留レ母在 三子免ニ風霜ニ

閔子びんしけん寡ひんいとけなくして母を失へり。父また妻をもとめて、二人の子をもてり。彼の妻、我子を深く愛して繼子まごこを惡み、寒き冬も蘆あしの穂を取りて、著る物に入れて著せ侍るあひだ、身も冷えて堪へかねたるを見て、父、後の妻を去らんとしければ、閔子寡ひんしけんがいふやうには、彼の妻を去りたらば、三たりの子寒かるべし、今われ一人寒きをこらへたらば、弟の二人はあたよかなるべしとて、父を諫めたるゆゑに、これを感じて繼母けいぼも後のちには隔てなく慈いづくしみ、もとの母とおなじくなれり。只人のよしあしはみづからの心にありと、古人の言ひ侍りけるも、ことわりとこそ思ひ侍る。

曾 參

母指纒にじま方嚙は 兒心痛不せ禁げ 負て薪歸來晚し 骨肉至情深

曾參そうしんある時山中へ薪を取りに行き侍り、母留主りゅうしゅにゐたりけるに、したしき友來れり。これをもてなしたく思へども、曾參そうしんはうちにあらず、もとより家まどしければ叶はず。曾參が歸れかして、みづから指をかめり。曾參山に薪を拾ひるたるが、俄に胸さわぎしける程に、急ぎ家に歸りたれば、母ありすがたを具つぶさに語り侍り、かくの如く指を嚙かみたるが、遠きにこたへたるは、一段孝行にして、親子しんしのなさけ深きしるしなり。總そうじて曾參

まどしー貫し

ありすがたーありのまぐの様子

の事は、人にかはりて心と心のうへの事をいへり。奥深きことわりあるべし。

王 祥

繼母人間有にり 王祥天下無にし 至て今河水に上 一片臥す氷摸に

王祥はいとけなくして母を失へり。父また妻をもとむ、其名を朱氏といひ侍り。繼母けいぼの癖なれば、父子の中をあしく言ひなして、惡まし侍れども怨とせずして、繼母にもよく孝行をいたしけり。かやうの人なる程に、本の母冬の極めて寒き折ふし、生魚なまいなをほしく思ひける故に、肇府てうふといふ所の河へもとめに行き侍り。されども冬の事なれば、氷とぢていを見えず。すなはち衣ころもをぬぎて裸はだかになり、氷の上うへにふし、いを無きことを悲み居たれば、かの氷すこしとけて、いを二つをどり出でたり。乃ち取りて歸り、母にあたへ侍り。是ひとへに孝行のゆゑに、その所には毎年人の臥したる形かたち、氷のうへにあるとなり。

老 萊 子

戲舞學ぶ嬌癡を 春風動す綵衣を 雙親開て口笑ふ 喜色滿つ庭闈に

老萊子らうらいしは二人の親に仕へたる人なり。されば老萊子七十にして、身にいつくしき衣ころもを著て、幼きもの形かたちになり、舞まひ戯れ、又親のために給仕をするとて、わざとけつまづきて

いを魚

轉ころび、いとけなき者の泣くやうに泣きけり。この心は七十になりければ、年よりて形かたち麗うるはしからざるほどに、さこそこの形を親の見給はど、わが身の年よりたるを悲しく思ひ給はんことを恐れ、また親の年よりたると思はれざるやうにとの爲に、かやうの舉動ふるまひをなしたるとなり。

姜 詩

舍側に甘泉出 一朝雙鯉魚 子能知り事を母に 婦更孝あり於姑に

姜詩は母に孝行なる人なり。母つねに江の水を飲みたく思ひ、又なまいをの鱠なますをほしく思へり。すなはち姜詩妻をして、六七里の道を隔てたる江の水を汲ましめ、又いをの鱣なますをよくしたよめて與へ、夫婦共に常によく仕へり。或時姜詩が家の傍に、忽ちに江の如くして水湧きいで、朝ごとに水中に鯉あり、すなはち之をとりて母にあたへ侍り。かやうの不思議ふしぎなる事のありけるは、ひとへに姜詩夫婦の孝行を感じて、天道より與へたまふなるべし。

唐夫人

孝敬崔家婦 乳して姑に晨盥す 此恩無して以報ず 願得は子孫如か

唐夫人は、姑しうごめ長孫夫人年たけ、よろづ食事齒に叶はざれば、つねに乳ちをふくめ、あるひは朝ごとに髪をけづり、其外よく仕へて、數年養ひ侍り。ある時長孫夫人わづらひつきて、このたびは死せんと思ひ、一門一家を集めていへる事は、わが唐夫人の數年の恩を報ぜずして、今死せん事残り多し、わが子孫唐夫人の孝義をまねてあるならば、必ず末も繁昌すべしといひ侍り。かやうに姑しうごめに孝行なるは古今稀なるとて、人みな之をほめたりと。さればやがて報いて、末繁昌する事きはまりもなくありたるとなり。

楊 香

深山逢ふ白額に 努力轉ず腥風を 父子俱無し恙を 脱る身饑口の中

楊香はひとりの父をもてり。ある時父と共に山中へ行きしに、忽ちあらき虎にあへり。楊香、父の命を失はんことを恐れて、虎を追ひ去らしめんとし侍りけれども叶はざる程に、天の御あはれみを頼み、こひねがはくは我命を虎にあたへ、父を助けて給へと、心ざし深くして祈りければ、さすがに天も哀とおもひ給ひけるにや、今まで猛たけきかたちに執りくらはんとせしに、虎俄に尾をすべて逃げ退きければ、父子ともに虎口の難をまぬがれ、つよがなく家に歸り侍るとなり。これひとへに孝行の心ざし深きゆゑに、かやう

饑口一原本「饑甲」とあり、一本によりて改む

尾をすべて一尾をすぼめて

方香一本方品とあり

かとり絹こまやかに織りたる絹布の一種、織



の奇特をあらはせるなるべし。

董永

葬に父貸^か方香^を 天姫陌上^に迎^む
織^て絹償^を債生^を 孝感盡知^る名^を

董永はいとけなき時に母に離れ、家まどしくして常に人に雇はれ農作をし、賃をとりて日を送りたり。父さて足も起たざれば小車を作り、父を乗せて、田のあぜにおいて養ひたり。ある時父におくれ、葬禮をととのへたく思ひ侍れども、もとよりまどしければ叶はず。されば料足十貫に身をうり、葬禮を營み侍り。諸かの錢主の許へ行きけるが、道にて一人の美女にあへり。かの董永が妻になるべしとて、ともに行き、一月にかとりの絹三百疋織りて、主のかたへ返し

おひめ一負債

すましめ一涼しくし

法度に行はれ一刊罰を蒙り

たれば、主もこれを感じて、董永が身をゆるしたり。其後婦人董永にいふ様は、我は天上の織女なるが、汝が孝を感じて、我を降しておひめを償はせせりとて、天へぞあがりけり。

黄香

冬月温^に衾^を煖^にす 夏天扇^に枕^を涼^にす 兒童知^る子職^を 千古一黄香

黄香は安陵といふ所の人なり。九歳の時母におくれ、父に能く仕へて力を盡せり。されば夏の極めて暑き折には、枕や座を扇いですどしめて、また冬の至つて寒き時には、衾のつめたきことを悲んで、わが身をもつて暖めて與へたり。かやうに孝行なるとて、太守劉曄といひし人、札をたてて彼が孝行をほめたる程に、それよりして人皆黄香こそ孝行第一の人なりと知りたるとなり。

王哀

慈母怕^る聞^く雷^を 氷魂宿^す夜臺^に 阿香時^に一震 到^て墓^に遶^る千廻

王哀は營陰といふ所の人なり。父の王義、不慮の事によりて、帝王より法度に行はれ死にけるを恨みて、一期の間その方へは向うて坐せざりしなり。父の墓所^{はかどころ}にゐて、ひざま

柏の木一支那にては墓所に柏を植ふる習俗なり

づき禮拜して、柏の木に取り付き泣き悲む程に、涙かよりにて木も枯れたるとなり。母は平生かみなりを恐れたる人なりければ、母むなしくなれる後にも、雷電のしける折には、急ぎ母の墓所へゆき、王哀これにありとて、墓をめぐり、死したる母に力を添へたり。かやうに死して後まで孝行をなしけるを以て、生ける時の孝行まで推しはかられて、有りがたき事どもなり。

郭巨

光彩一原本「光彩」とあり、一本によりて改む

貧乏思_二供給_一 埋_レ兒願_二母存_一 黄金天所賜 光彩照_二寒門_一

夫婦云ひければ夫婦談合したるに

郭巨は河内といふ所の人なり。家貧しうして母を養へり。妻一の子を生みて三歳になれり。郭巨が老母、彼の孫をいつくしみ、わが食事を分け與へけり。或時、郭巨妻に語る様は、貧しければ母の食事さへ心に不足と思ひしに、其内を分けて孫に賜はれば乏しかるべし、是偏に我子の有りし故なり、所詮汝と夫婦たらば子二度有るべし、母は二度有るべからず、とかく此子を埋みて母を能く養ひたく思ふなりと夫婦云ひければ、妻もさすがに悲しく思へども、夫の命に違はず、彼の三歳の兒を引きつれて、埋みに行き侍る。則ち郭巨涙を押へて、すこし掘りたれば、黄金の釜を掘り出だせり。其釜に不思議の文字すわれ

り。其文に曰く、天賜_二孝子郭巨_一 不_レ得_レ奪 民不_レ得_レ取 と云々。此心は天道より郭巨に給ふ程に、餘人取るべからずとなり。則ち其釜をえて喜び、兒をも埋まず、ともに歸り、母にいよく孝行をつくせるとなり。

朱壽昌

七歳生_二離母_一 參商五十年 一朝相_二見面_一 喜氣動_二皇天_一

朱壽昌は七歳の時、父その母を去りけり。されば其母をよく知らざりければ、此事を歎き侍れども、つひに逢はざること五十年に及べり。ある時壽昌官人なりといへども、官祿をもすて、妻子をもすて、秦といふ所へ尋ねに行きけるとて、母に逢はせて給へて、みづから身より血を出だして、經を書きて天道へ祈りをかけて尋ねたれば、心ざしの深きゆゑに、つひに尋ねあへるとなり。

剡子

老親思_二鹿乳_一 身掛_二褐毛衣_一 若不_二高聲語_一 山中帶_二矢飯_一

剡子は親のために命を捨てんとしける程の孝行なる人なり。其故は父母老いて共に兩眼を煩ひし程に、眼の藥なるとて鹿の乳を望めり。剡子もとより孝なる者なれば、親の望

みをかへたく思ひ、すなはち鹿の皮を着て、數多むらがりたる鹿の中へまぎれ入り侍れば、獵人これを見て、實の鹿ぞと心得て、弓にて射んとしけり。其時剡子は實の鹿にはあらず、剡子といふ者なるが、親の望みを叶へたく思ひ、偽りて鹿の形となれりと、聲をあけて言ひければ、獵人驚いて其故を問へば、ありすがたを語る。されば孝行の志深き故に、矢をのがれて返りたり。そもく人として鹿の乳を求むればとていかでか得さすべき。されども思ひ入りたる孝行の思ひやられてあはれなり。

蔡順

黒椹奉^ず親^に闈^に啼^て飢^に涙^に滿^つ衣^に赤^に眉^に知^て孝^を順^を牛^を米^を贈^て君^に歸^し

蔡順は汝南といふ所の人なり。王莽といへる人の時分の末に天下大に亂れ、又飢饉して食事に乏しければ、母のために桑の實を拾ひけるが、熟したると熟せざるとを分けたり。このとき世の亂により、人を殺し剥ぎ取りなどする者ども來つて、蔡順に問ふ様は、何とて二色に拾ひ分けたるぞと言ひければ、蔡順ひとりの母をもてるが、此熟したるは母にあたへ、いまだ熟せざるは我がためなりと語りければ、心づよき不道の者なれども、かれが孝を感じて、米二斗と牛の足一つ與へて去りけり。その米と牛の腿とを母にあ

たへ、又みづからも常に食すれども、一期の間盡きずして有りたるとなり。これ孝行のしるしなり。

庾黔婁

到^て縣^に未^だ旬^日椿^庭逢^ふ疾^深願^は將^て身^を代^り死^に北^に望^み啓^く憂^を心^に

庾黔婁は南齊の時の人なり。孱陵といふ所の官人になりて、すなはち孱陵縣へ至りけるが、いまだ十日にもならざるに、忽ちに胸さわぎしけるほどに、父の病み給ふかと思ひ、官を捨てて歸りければ、案の如く大に病めり。黔婁、醫師によしあしを問ひければ、醫師病者の糞を嘗めてみるに、甘く苦からばよかるべしと語りければ、黔婁やすき事なりとて、嘗めて見ければ、味よからざりける程に、死せんことを悲み、北斗の星に祈をかけて、身がはりにたよん事を祈りたるとなり。

吳猛

夏^に夜^に無^し帷^帳蚊^多不^敢揮^て恣^に染^る膏^血飽^く免^れ使^し入^る親^に闈^に

吳猛は八歳にして孝ある人なり。家まどしくしてよろづ心に足らざりけり。されば夏になりけれども帷帳もなし。吳猛みづから思へり、わが衣をぬぎて親に著せ、わが身はあ

南齊一原本南
亭とあり、一
本によりて改む

らはにして蚊に喰はせたらば、蚊もわが身を喰ひ親を助けんと思ひ、すなはちいつも夜もすがら裸體になり、わが身を蚊にくはせて、親の方へ蚊の行かぬやうにして仕へたるとなり。いとけなき者のかやうの孝行は、不思議なりし事共なり。

張孝 張禮

偶値^ひ緑林^の兒^に代^{つて}烹^る云^ふ瘦肥^に人皆有^り兄弟^一張氏古今稀^{なり}

張孝張禮は兄弟なり。世間饑饉の時に、八十餘の母を養へり。木實を拾ひに行きたれば、一人の民疲れたる者來りて、張禮を殺して喰はんと云へり。張禮云ふ様は、われ老いたる母をもてり、けふはいまだ食事を參らせざりつる程に、すこしの暇を賜はれ、母に食物を參らせて、やがて參らん、もし此約束をたがへば、家に來りて一族までを殺し給へと云うて歸る。母に食事を進めて、約束の如くに彼の者の所へ至りけり。兄の張孝是を聞きて、又跡より行きて盜人にいふ様は、我は張禮より肥えたる程に、食するによかるべし、我を殺して張禮を助けよと云へり。又張禮は我はじめよりの約束なりとて、死を争ひければ、彼の無道なる者も兄弟の孝義を感じて、共に死を免し、かやうの兄弟古今稀なりとて、米二石鹽一駄とあたへたる。是を取りて歸り、いよく孝道をなせるとなり。

り。

田眞 田廣 田慶

海底の紫珊瑚 群芳總不如 春風花滿樹 兄弟復同居

此三人は兄弟なり。親におくれてのち、親の財寶を三つに分けて取れるが、庭前に紫荆樹とて、枝葉榮え花も咲き亂れたる木一本あり。これをも三つにわけて取るべしとて、終夜三人詮議しけるが、夜の既に明けければ、木を切らんとて、木のもとへ至りければ、昨日まで榮えたる木が俄に枯れたり。田眞之を見て、草木心ありて切りわかたんといへるを聞いて枯れたり、まことに人として、これを辨へざるべしやとて、分たずしておきたれば、又ふたよびもとの如く榮えたるとなり。

山谷

貴顯聞^ゆ天下^に平生^{にして}孝事^親 汲^で泉^を涓^ぐ溺器^を 婢妾^を豈^ん無^レ人

山谷は宋の代の詩人なり、今にいたりて詩人の祖師といはるゝ人なり。あまたつかひ人もあり、又妻も有りといへども、みづから母の大小便の器物をとり扱ひて、汚れたる時は手づからこれを洗ひて母にあたへ、朝夕よく仕へて怠る事なし。さらば一を以て萬を知

群芳總不如一原
本群芳總不知
とあり、一本に
よりに改む

一を以て萬を知
る一荀子非相篇

「以^一知萬、以微
知明」

るなれば、其外の孝行推し量られたるとて、此人の孝義天下にあらはれたるとなり。この山谷のことは餘^よの人にかはりて、名の高き人なり。

陸 績 字公紀

孝悌皆天性 人間六歳^の兒 袖中懷^に緑橘^を 遺^て母報^に含飴^を

陸績六歳の時、袁術といふ人の所へ行き侍り。袁術陸績がために菓子に橘を出だせり。陸績これを三つ取りて、袖に入れて歸るとて、袁術に禮をいたすとて、袂より落せり。袁術これを見て、陸績どのは幼き人に似合はぬことと言ひ侍りければ、あまりに見事なるほどに、家にかへり母にあたへんためなりと申し侍り。袁術これを聞きて、幼き心にてかやうの心づけ古今希なりとほめたとなり。さてこそ天下の人、かれが孝行なることを知りたりとなり。

梵 天 國

梵 天 國

淳和天皇の御代に五條の右大臣たかふちとておはしけるが、容顔美麗に才覺いみじきのみならず、四方に四萬の藏をたて、乏しき事ましまさず、年月を送り給へども、一人の孝子を持ち給はであけくれ歎き給ふ。或時つくづくと案じ思しめしけるは、われ前の世にいかなる罪を作りてか、一人の子をもたず、七十八のよはひを保つとも、つひに止まるべきにあらず、亡からん跡を誰かとふべき、昔より今に至るまで神佛に申すこと叶へばこそ、萬の人も申すらめとて、夫婦諸共に清水に参り、五體を地に投げ、三千三百卅三度の禮拜を参らせて、願はくば一人の孝子を與へ給へと、種々の願を立て給ひける。

此願成就せば、八花形の御帳臺を、黄金白銀にて三十三枚づつ、月ごとに掛けて参らすべし、又毎日萬燈を三年ともして、百人の僧にて法花三昧の不斷經を、三年讀ませて参ら

しやうめうー淨名居士即ち維摩

具足ー同伴すること
童殿上ー攝關大臣等の子弟の幼少にて昇殿を許さるる者をいふ

すべし、金泥の観音經三千三百三番書かせて參らすべしと、祈られける程に、七日と申す曉、いと氣高き御聲にて、こなたへと召されけるが、寶殿なる所に香の衣かろもに同じ袈裟かけて、いとかうばしき高僧おはします。彼のしやうめう、うしろの方丈ほうぢやうの間に、三萬六千の床ゆかを並べけるも思ひ知られて、いとたつとくて、いづくに立ち寄るべきとも覺えず。高僧重ねてそれへくと召されければ、御前に畏まり給へば、いかに汝が申す所のけうしなるべしとて、磨みがける玉を取り出だし、すなはち大臣の左の袖に移させ給ふと御覽じて、夢さめぬ。其後下向ありて、程なく北の御方懷妊あり、若君一人生み給ひ、やがて玉若殿とて喜び給ふ。日に増して成人し給ふにつけて、光るやうにぞおはしける。父の大臣だいじん、一時も御身を離さずかしづき給ふ。二歳と申す時、内裏へ參内ありけるにも具足し給ふ。天皇聞しめして、いまだ例も無きことかな、七歳の童殿上わらへんじやうと申す事はあれども、二歳の殿上は珍しき事なり、たかふちが子の事なればとて、四位の待従になし給ひて、公卿くわんぎやうの座へぞ召されける。昇殿の始めにしるしなくてはいかどとて、丹後但馬兩國を給はりける。大臣斜ならず御喜びありて、いよくいつきかしづき給ひける程に、やうく七歳にもなり給へば、殊にすぐれて笛をぞ吹き給ひける。

とうかうたいー未詳

さる程に北の御方は無常の風にさそはれて、あしたの露と消え給ふ。大臣殿は此若君にのみ慰みて、明し暮し給ひけるに、十三と申す春の頃、大臣殿も空しくなり給ふ。待従の御歎き申すばかりもなかりけり。父の御孝養おんけうやうには笛を吹き、梵天帝釋までもおもしろく、とうかうたいの上うへに手向け給ひける。七日と申す午の時ばかりに、紫の雲一村あまくだりけるを見れば、天女と童子十六人、玉のかぶり、黄金の輿こしをかたぶけて、ゆゑしき官人くわんにん一人天くだり、待従に向ひ御涙を流して、汝七日の間吹き給ふ笛、則ち梵天國へ通じ、孝行の心ざし二つともなきを、上品上生、下界の龍神りゆうじんまでも納受したまふなり。我一人の姫をもてり、來る十八日に床を清め、鳴なりをしづめて待ち給へ、姫を御身に參らせんわれこそ梵天王にて侍れとて、紫の雲たち上りぬ。待従は夢とも現ともわきまへず、床ゆかよりおり給ひて、經を讀誦し給ひて、父母の御菩提おんぼだいの爲と回向したまふ。さるほどに約束の日にもなりしかば、まことしからぬ事なれども、床を清め香を焚き、鳴なりをしづめて笛を吹き給ふ。十八日の月漸う澄み昇り、千里萬里にあきらかなり。いと芳しき風吹きて、花ふり異香いさやう薫するうちよりも、十六人の童子玉のかぶりを戴きて、黄金こがねの輿こしをさしよせ、十四五ばかりの姫君、額には天冠をあて、身には玉の瓔珞やうらくを垂れ、黄金こがねのひつ

ひつかうー未詳

かうを穿き、くれなるの袴ふみくよみ、すべてあだなる言の葉までは、ありぬべしとも
覺えず。待従こなたへのたまへば、經の前に錦の褥しなねの上に居給へり。互に見えつ見え
られつ、鴛鴦比翼のかたらひも、淺からずとぞ聞えける。かゝるめでたき折ふしに、み
かど此由きこしめし、我十善の位を受け、一天四海をたなごころにまかすといへども、
梵天王の婿にはならぬと御歎きあり。或時待従は中將になり給ふ。中將急ぎまるれとて
召されけるが、天皇よりの宣旨には、汝が夫妻ふさい七日内裏へまるらせよ、それが叶はずば
伽陵頻かりょうびんと孔雀の鳥を召しよせて、七日内裏にて舞はせて見せよ、まるが心をなぐさめん、
それにも叶はずば、日本國には叶ふまじきとの宣旨なり。うけたまはると申し、急ぎ館やかたへ
歸られける。姫君を近づけ、此由かくと語らせ給へば、それこそみづからが父の内裏に
いか程も候ふぞ、呼びよせて舞はせ候はんとて、南面みなみおもてに出でて、迦陵頻かりょうびんの御聲にて、梵
天國の鳥をぞ召されける。刹那あしたが間に参りける。姫君斜に思召し、中將殿に奉れば、みか
どへつれて参内あり。みかど叡覽みかどましくて、ことの譬へにこそ迦陵頻かりょうびんの聲とは申しつ
たへたれ、おもしろく囀りて、二つの鳥が入り亂れて舞ふ程に、物によく／＼譬ふれ
ば、かの極樂の七寶淨土の御池かと、煩惱のねぶりをさまし、おの／＼感涙を流して御覽

じける。

かくて七日も過ぎければ、かき消すやうに失せにける。漸う廿日も過ぎざるに、中將殿を
召されて、鬼が娘の十郎姫を呼び寄せて、七日内裏へ参らせよ、それが叶はぬ物ならば汝
が夫妻を召さるべしとの宣旨なり。うけ給はつて歸られける。面目無きことにて候へど
も、かゝる次第と申されける。姫君うち笑ひ、それこそ易き事なれ、わらはが父の召し仕
ふはしたの物にて候へば、みづから召し候はんに、参らぬ事はあらじとて、南面みなみおもてへ立ち出
で、十郎姫とて召されける。刹那あしたが程に参りたり。葦原國の御門あまりに御心敏みこうにて、
十郎姫が姿が見たきよし宣旨なり、急ぎ内裏へ参り、七日あそび参らせよ、七日も過ぎ
ば御暇申せとのたまひて、中將殿に奉れば、連れて参内ましくける。みかど叡覽みかどまし
まして、公家大臣集まりて、十郎姫を見給へば、いづくにて著かへたるとは見えねども、
七日の間七度衣裳ぎさを著かへ、色々の御遊ども心言葉も及ばれず、一つも洩したることな
かりけり。七日も過ぎければ、かき消すやうに失せにけり。天皇御心に思しめしけるは、
たとへにこそ聞きつるに、十郎姫を始めて見る、彼をはしたのものに仕ふなる梵天王
の姫君は、さこそそこそ思しめし、いよく戀しく思はるれ、叶はぬ事を言ひかけて

うなし—未詳
 なんだ—難陀、
 歡喜と譯す
 はつなんだ—跋
 難陀、善歡喜と
 譯す
 しかつら—沙喝
 羅、鹹海と譯す
 しゆきつ—和修
 吉の術、多頭と
 譯す
 とくしやか—德
 又迦、多舌と譯
 す
 あなはたつ—阿
 那波達多、無熱
 と譯す
 まなし—摩那
 斯、大力と譯す
 うはつら—優鉢
 羅、黛色蓮華池
 と譯す

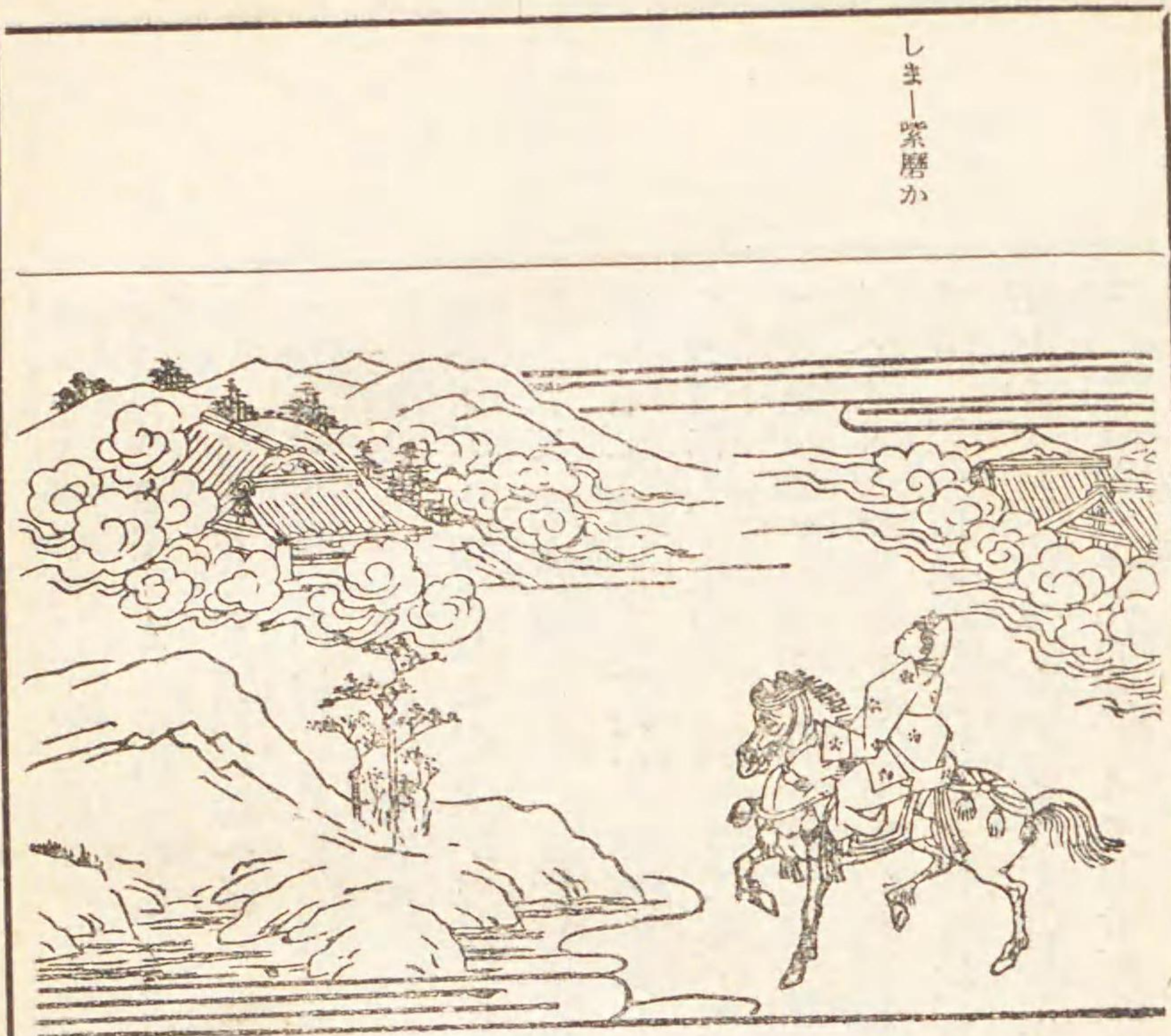
震旦鬼界へも中將を流罪して、姫君をとらんとこそ思召しける。さて中將を召して、鬼が娘の十郎姫を見れば、猶々戀しく覺ゆるなり、思ふが中をさくるなる天の鳴る神をよびくだして、七日内裏へ參らせて、鳴らせて見せよ、まるが戀の心を慰さまんとの宣旨なり。中將殿畏まつて候ふとて、わが御所へ歸り給ひ、叶ひがたき事なれば、左右なく姫君にもものたまはず。姫君立ち寄りて、又何事か宣旨ぞ、みづからに仰せられ候へとのたまへば、ありのまよに仰せける。それこそいと易く候はん、天の鳴る神と葦原國には申せども、梵天國のうなしの下づかひにて候ふなり、やすき程の事とて椽に立ち出でて、扇ほとくと打ち鳴らし、なんだ龍王、はつなんだ龍王、しかつら龍王、しゆきつ龍王、とくしやか龍王、あなはたつ龍王、まなし龍王、うはつら龍王、八龍王達とぞ召されける。いづくよりとは見えねども、傘ほどの黒雲愛宕の嶽に飛び來り、姫君の御前に舞ひさがる。いかに龍王たち聞き給へ、葦原國のみかど、あまりに御心さうにて、鳴神内裏へ參らせて、七日鳴らせよとの宣旨なり、急ぎ内裏へ參り、七日鳴りて御目にかけて、實にうらめしげにぞのたまひける。八龍王、各御暇申し、すなはち雨風となりて、内裏の御殿に飛び移りけり。中將殿も參り給ひぬ。姫君かぶり取りいだし、これを召さ

耳のこ—鼓膜の
 事か

しんざーしんき
 ん宸襟の誤脱
 か

れよ、中將どの、さして神鳴らば、耳のこもぬけ、稲光まなこを取るべしとて奉り給ひける。さる程に初めはかみなり一つ二つ鳴りまはる。それだに膽を消しつるに、四つ五つともなりしかば、傘ほどの光りもの一つ二つこそ飛びちがひ、のちは一二千こそ光りけり。
 雷 稻妻のみならず、國土の岸を穿ちける事にかくしく、女童部、若き公卿、殿上人は黄水を吐き倒れ伏し、半死半生の人数をしらす。天皇ばかりこそ院宣汗の如く七日をば待つべしと、御心に思しめせども、耳のこもぬけ、御心もまどひて、すべてしんさなやましく、御命も危く御衣をかづきて臥し給ひける。中將殿の耳には更に聞えずして大事もなし。さのみ皇子をなやまし奉るべきならねば、龍王たち鎮まり給へと、中將どののたまへば、すなはち雷鎮まりけり。さる程に黒雲消え、緑の雲になりけり。中將殿もわが御所へ歸り給ひて、其後中納言に成り給ふ。かくて五十日ばかりありて、内裏へ中納言を召して、迦陵頻、孔雀、鬼が娘の十郎姫、雷電にいたるまで、只事とも覺えず、ありがたきまるが宣旨にしたがふ事神妙なり、然りといへども梵天王の直の御判を取りてたべとぞ宣旨なる。かしこまつて候ふとて御所へ歸り、姫君にぞ申させ給ひける。姫君聞き給

ひて涙を流して、誠に是はたやすからぬ事なり、みづから葦原國に契あるによつて、しばし人間にて候ふ間、又梵天へ上らん事たやすからず、又中納言殿はるくの道なれば梵天國へおはしまさん程の別れいかど有るべきとて、伏し沈み泣き給ふ。中納言聞召し御身内裏へ参り給はずば、震旦百濟しんたんはくさいに流されて、一たびは失せぬべし、たゞ内裏へまゐらせ給へと、泣くくのたまへば、姫君、それ日本葦原をばぬす人國びじくにと申して、人の心が人間にあらず、梵天國のならひにて、人に契を結び、又と契叶はず、情なくもかゝる仰せを承るこそおろかなれ、虎ふす野邊、火の中、水の底までも、おくれ奉るまじきなり、さりながらみづからが申さんやうにおはしませ、今日けふより七日精進に身を清め、七度の垢離こりをかき給へ、其後愛宕山の嶽たけにあがりて御覽ぜよ、乾いぬるの方かたへ細道あり、七里ばかり行きて、大木一本あるべし、その木の本に馬三疋あるべし、中にも瘦せたる馬を牽きておはしませと仰せければ、中納言教への如く行きて見給へば、實まことにも六つの道あり、乾いぬるの道を七里歩みゆきて大木あり、葦毛の馬、月毛の馬、鹿毛の馬三疋あり、葦毛馬の瘦せたるを牽きて歸り、姫君に此由仰せければ、秣まきなくてはいかどすべきとのたまへば、中納言、いかなる草の入り候ふぞと宣へば、黄金三千兩入るべしと申させ給へば、



しま—紫磨か

やすき程の事とて、北の倉なる色よき金三千兩とり出だし、大豆三石三斗にさせて、此馬に飼はせ給ひける。喰ひはてて水のみて、三度身ぶるひして立ちければ、しまの如くになりけり。此馬明日の卯の刻ひがしむきに東向に引立ててめさるべし、しばし有りて此馬身ぶるひして足搔あしかきせば、兩眼を強く塞ぎ給へ、あなかしこ、道にて御目をばし開き給ふな、此馬取りつきて身震ひせん時御目を開きて御覽ぜよと、こまぐくと仰せければ、教への如く兩眼をつよく塞ぎて、鞭をしっかりとあてられれるとき、馬は虚空へあがりける。やとありて陸地とおほしき所にて、身ぶるひを三度したりける時、兩眼を開きて御覽ずれば、

きりの柱のり
の柱の行か

漫々たる砂の地にぞ著き給ふ。此馬三度いばえて、人ならば暇を乞ふと思しくて、虚空に行きぬ。さて何となく細道をしるべに辿りくとあゆみ給ふ程に、人に逢ひて此國をばいづくと申すぞと問ひ給へば、梵天國とぞ傳へける。さて梵天國の内裏はいづくにて候ふぞと問ひ給へば、是なる道を南へ行きて御覽ぜよ、即ち内裏なるべしと答へける。嬉しく思しめして、行き給ふ程に、野にてもなく、山にてもなく、満々平々として、又里もなく、限りほとりもなし。次第々々に砂の色を見れば、皆黄金の如くなり。白銀の門をたて、黄金の門をたて、見れば金の砂一町ばかり敷きみたり。その内にきりの柱、瑠璃の石、七寶莊嚴のすべて、極樂世界を音に聞きしに違はず。歩み入りて御覽すれば、玉のきざはし、玉の床、玉のうてな、玉のすだれあり。やうくありて三十ばかりなる天女瓔珞を垂れて來り、南へ指をさし給ひける程に、扱は參れと御をしへありと思召して、南へめぐり御覽すれば、日本の内裏紫宸殿とおほしくて、きりの柱二三本立てたる御殿あり、玉の床敷を知らずありけるが、其向ひなる座敷の中に中納言居給ひけり。又廿四五ばかりなる天女、金の折敷に瑠璃の盃をすゑて來り、又三十ばかりの天女、金の瓶子白銀の銚子を持ちて出で、うちおきて何とも物をもいはで歸りけり。

ごき御器

中納言心に思はれけるは、梵天のならひにかよるくひ物、酒更に呑めども酔はざるなり、欲しき程は呑むと聞く物を、呑まばやと思ひのむなり。折敷に入れたる物を嘗めて御覽するに、芳しく甘き物なり。扱又後に二十四五ばかりの天女瑠璃のごきに、長さ一尺有る米の白く美しき飯を備へて來りたり、御前におきぬ。中納言まるらんとする所に、傍なる間を御覽すれば、骸骨のやうなる物あり、人にもあらず、また鬼にもあらず。金の鎖にて八方へつながれて居たり。彼の飯を見て、あら羨まし、あれ一口給はり候へかし、わが食物に餓ゑて、既に存命極まりぬ、しばしが程の命を助かり候はんと歎きけり。中納言もとより大慈悲ふかき人なれば、すなはち日本にて咎ある者を牢に入れたるがごとし、さこそ食にかつて、悲しかるらんと憐みて、汝舌をさし出だせとの給へば、斜ならず喜びて、鎖をゆすり舌を出だしたるを御覽すれば、長さ一尺ばかりなり。あな恐しや、この者のありさま、せいにも似ずして舌の大ききよ、いかさま只者ならじと、身の毛もよだちて、此飯をすくひ投げ給へば、立所にて忽ち八方の鎖を皆々引き切り、くろがねの格子を踏み破り、残りの飯をも攫んで打ち喰ひ、さしも玉の如くなる内裏を踏みやぶり、大風大雨をふらせて、虚空をさして飛び出でにけり。ありつる天女あわてて來り、あな淺

笑止一氣の毒なる事

ましや、さても果報少き御事と、恨しげに云ひすてて歸りけり。
 中納言むね打ちさわぎ居たまへる所に、梵天王玉のかぶりを召され、威光たどしくて出
 で給ふ。玉の御座にぞおはします。汝これまで來ること、姫と一所いっしょに有るうへは、返す
 返すも嬉しけれ、爰に一つの笑止あり、唯今の權者ごんしゃこそ羅利國らせつこくのはくもん王といふ者な
 り、姫が七歳の年よりも奪ひ取りて、一の後ごにそなへんと窺ふよしを聞きて、四天王を
 かたらひ、天地を逃ぐるを追ひつめ戒め置く、此國のならひにて、千日をすごして八裂やっさき
 にして捨つるなり、さても只今供へつる飯はんは、たゞ世のつねの飯はんにてはなし、是より南
 七寶淨土の池のほとりに作りたる米よねなり、是を一粒服ひとつぶがくすれば千人の力ちからつき、千年の齡を
 たもつなり、大事の客人きやくじんとおもひて、參らせてあるに、うたてさよ、姫ははくもん王が
 奪ひとり、羅利國へ行きつらん、此米このこめを服がくしたるによつて神力しんりきを得て、鎖をも踏み切り
 たるなりとて、かたじけなくも大王御涙を流し給ふなり。中納言肝たましひも身に添は
 ず、とりあへず涙をおさへ、姫君の御事を聞く。それはさる御事にて候へども、御自筆
 の御判を賜はりて、天下に名をとどめ、其のちともかくも罷りなるべしと申させ給ひけ
 れば、金札きんさつに御判を遊ばし、中納言にたびたり。其後たれかある、葦原國へ送り奉れと

秋はいかなる色
 なれば一新古
 今、西行「覺東
 な秋はいかなる
 故のあればすま
 るに物の悲しか
 らん」
 所せくまで一所
 せきまでの訛

のたまへば、中納言しらぬ國とはおもへども、姫君の父の御許とおもへば名残惜しさは
 限なし。遙々日本へ歸りても、姫君のおはしまさばこそ頼みもあれと、涙に咽び給ひけ
 り。梵天王もいとあはれに思召して、さりとて姫もその音信いんしんなかるべきと、慰め仰せら
 れける。官人くわんにんあまた門前まで送り奉り、はじめの駒今まではありとも覺えざりけるが、
 まるりて嘶いひける。猶ゆくすゑは頼もしくてうち乗りたまふ。やゝありて陸地りくぢに駒は
 飛びつきぬ。御目をひらき御覽すれば、花の都五條の館やかたにつき給ふ。すぐに内裏へ參内
 あり、梵天王の自筆の判をまるらせければ、不思議さよとて、内匠寮ないしやうれうの倉くらに納められけ
 り。さて中納言わが御所へ歸り御覽すれば、たゞ其まよにて、もしや中納言ふり來り給
 ふとて、女房たち走りまはる。はくもん王が入りたる跡もさながらなり。女房たち、御乳
 母、中納言を見つけて、彌悲しくして伏し沈みてぞ泣き給ふ。姫君のおはしましたる御
 座に、いまだ御枕も、ふるき衾ふすまもさながらあり。夢かうつよか、夢ならばさめてのけと、
 伏ししづみ給ひけり。頃は八月なかばの頃なれば、いつしか庭の落葉もそよめきて、松
 ふく風も閨寒けいさむく聞えつよ、さらぬだに秋はいかなる色なればと申したへたる悲しさに、
 わが身ひとりのたぐひぞと、涙の露も所せくまで浮くばかりなり。夜なくもまどろみ

よもめ鳥一やも
め鳥の託

給ふ事なければ、夢にだにも見たまはず。さる程に篠の小笹の一ふしも、あくるかと思しくて、よもめ鳥のうかれ聲、森をはなるよけしきにて、ほのくくと見えければ、御もとのひ切り給ひて清水へぞ参られける。さもいとけなき時よりも、月ごとに七日のあゆみを運び奉りつる御利生に、今一度今生にて姫に逢はせてたび給へ、とても對面叶はずば、命をめして後生の縁となしてたべと、涙と共に祈られけり。曉がたの事なるに、八十ばかりの老僧の中納言の枕に立ち給ひて、汝姫君の行くへ聞きたく思はど、是より修行をして、筑紫の博多へ行き、便船こうて千日と申すには、必ず聞え候ふべしとあり。夢ともうつよとも覺えず、則ち觀音の御告ぞと思ひ、すぐに筑紫へ行く唐船ぶねに便船して、蒼海萬里の波路を経て、いづくをはかりともなく思ひ給ふ御心の中こそ哀れなれ。此土を離れて十三日と申すに、大かぜ吹きて波荒く、光りもの飛びわたり、二十四艘の舟の帆あひの綱も吹き切りて、散りふゝになりけれども、中納言の召されたる船をば吹きも切らずして、羅刹國へぞ吹きつけたり。ある湊に上り、心ほそく笛をぞ吹き給ふ。折ふし此世の人とも覺えず、頭は空へ生ひのほり、色黒くせい高き者あまた集りて、吹きける物はおもしろやと、感に堪へてぞ聞きにける。いか様これは葦原國の人にて有るら

んなんどといふ。此土はいづくと問ひ給へば、是こそ羅刹國、此國の御主はくもん王とぞ申しける。

べちに一別に

一年梵天王の姫君をとらんとて、梵天へおはせしが、四天王の搦め捕り給ひておかれしに、大王のうちの米を喰ひ、神力を得て牢をやぶり、姫を奪ひとり、一の后にあがめかしづき給ふなり、此頃は姫君の御母孝養の爲とて、べちに内裏をたて、千日經を讀み給ふなり、葦原國の者どもをば敵と宣へば、此國へは入れぬなり、相構へて葦原國の者とばし仰せ有るな、修行者と申しける。誠にまめやかに語りける。いかに修行者、わが身はもと日本丹後の國のものなるが、西風におとされて今此國にあるなり、日本はいづくの人にてましますぞ、御なつかしやと申しけり。さん候ふ、われくは筑紫の者にて候ふが、遁世修行の者にてあり、いづくを住所と定めねば、宿なきまよの宿としていくたび夢やさますらん、されば今生は夢まほろしの如くなり、さる程にわれらも御身のごとく、悪風に吹きおとされ、今この國に來りたり、さてはくもん王の内裏はいづくにて候ふぞ、拜み奉りたくとのたまへば、やすき程の事、みづからが娘をば、しやこん女と申して、姫君の御方にさぶらふなり、其外はさら女、じんつう女、あくとう女、

しゆんしや女とて、數多の女房を后につけ申され候ふ、其うへ修行者をばはくもん王も御寵愛候ふぞ、參らせ給へとぞ申しける。さる程にはくもん王より御使あり、今宵不思議の鳴る物あり、吹きつる者を急ぎ内裏へまるらせよとの仰せなり、すなはち内裏へ参りけり。はくもん王御覽じて、今宵吹きつる物を吹けとのたまへば、則ち吹き給ふ。おもしろしとの仰せなり。后の宮のあさは葦原國を戀ひ給ふ御慰にとて、しんけん殿へぞ召されける。さる程にこよをせんとぞ吹き給ふ。姫君は聞召し、中納言の笛の音と聞き知り給へば、扱もいかやうにして、此所まではおはしましけん、思召してまろび出で、とりもつかんと千度百度思しめしけれども、あしかるべき事なれば、心ながく聞き給ふ。じんつう女が申しけるは、此修行者が参りてより、后の例ならずとぞ腹だちける。中にもしやこん女が申しけるは、さる事もおはしますらん、葦原國には笛を吹き、いやしき賤までも管絃の道をたしなむなり、又梵天王の池の汀にあそぶ鴛鴦や、迦陵頻、孔雀、鸚鵡といふ鳥は、皆管絃の聲をまなぶなり、今この笛を聞き給ひて、さこそ故郷の父大王も戀しくおほしめし候ふらん、御けしきの變りたるも道理ぞかすと申せば、けにもとぞ申しける。壺のうちの白洲にて、夜とともに笛を吹きてぞおはしける。さるほど

夜とともに一
夜中

けいしん國一け
いひん(廟堂の
誤か、然らば印
度の西北境の地
なり)

にならびの國のけいしん國のみかどは、りうき王とぞ申しける。はくもん王へ勅使を奉る。うけたまはるとて一千人の勢にて三千里かける車に乗り、后には修行者に笛をふかせ御なぐさみ候へとて、五十日と申さんには、必ず歸り参らせんとて、女房たち、后の御伽申すべし、もしさもなき物ならば、八つざきにすべしとのたまひて、吹く風のごとくにて、羅刹國をうち出でて、けいしん國へぞ御つきある。さる程に姫君の仰せには、眞砂のうへの修行者はさこそ冷えぬらめ、又みづからが母の孝養のために七日笛を吹きて供養せんと思ふなり、皆々女房たちも心を一つにして聽聞し給へと仰せければ、うけたまはるとぞ申しける。七日の間酒をすよめ給ひける。女房たちも酔ひふしぬ。さるほどにわれこそ中納言よと名のりたくは思しけれども、いかにして見え奉るべきやうも無かりしところに、折ふし風一とほり吹き、簾を吹き上げける。姫君と目と目と見あはせ給へけり。姫君さ夜更けぬれば、間の障子をあげ、いかにみづからをば連れて落ちさせ給へとのたまへば、我もさこそと思へども、心にまかせぬ事なれば、落ちすまし候はん事、なか／＼叶はぬもの故、とりかへされて憂き目を見せ申さんこと、あしかるべし、わが身はともかくも成りぬべし、たどかくていつまでも笛を吹きて、聞かせまらせんと、

ぬれども眠れども
もし月もしろければ
此句の下に脱文あるべし

申し給へば、只つれて落ちさせ候へ、三千里かける車には、はくもん王が乗りて行きぬ、二千里かける車あり、これに召させよとて、車寄くるまよせに立ちいで御袖をぞ引き給ふ。中納言は夢うつとも覺えず車に乗り給ふ。飛行自在ひきやうじざいの車とは申せども、はくもん王の車なれば、ぬしの心をや憚りけん、更に飛ぶ事なかりけり。二千里を飛びすみてこそ、徒歩かちはだしにもなるべけれ、いまだ二千里をさへ過ぎざれば、かよる所にはさら女とて色黒くして夜叉の如くなる女あり、人はぬれどもまどろまず、笛のねも聞えず、姫君も御心もとなく思ひて、かつばと起きて走りまはりて見るに、后も修行者も見えざりけり。いかにせん、じんつう女、あくとく女、二三人起きあがりて、もし月もしろければ、南二千里かける車もし。

偕はくちをしき事なり、はくもん王のいかばかり怒り給はんずらん、われく憂きめを見んずる悲しさよと叫びける。中にも夜叉女が申すやうは、自然の事もあらばとて、合あひ圖の太鼓を一里に一つづつ置かせたりけるを、打たせばやと申して、打ちつゞけるほどに、けいしん國への道のほど五百里の所なり。四五百打ちつゞけければ、けいしん國へぞ聞えける。はくもん王きこしめし、羅刹國らせつこくには何事のいできたるらん、合圖の太鼓鳴る

からかみかかし
ちがみ(頭髪)の
行か

とて、三千里かける車に乗りて飛ばせければ、刹那が程に飛びつきぬ。夜叉女走りいでて、ありのまよに申しける。やすからぬものかな、爰にありつる修行者は葦原國の中納言にてありけるぞや、さりながら二千里かける車なり、追ひつかんこと易きほどの事とて、われを思はん者どもは供せよと怒りける。人の腹立つをばはくもん王のやうなると申すに、まことにからかみ天にすくみあがり、眼は舍利まなこしやかりのごとくなり、齒がみをして躍りあがり立ちける。さる程にほどなく姫君の車に飛びつきぬ。中納言御覽じて、さばかり申しつる物を、わが身の事はともかくも、命はさらに惜しからず、御身に憂きめを見せ申さんこそ悲しけれとのたまへば、姫君は今はいふとも叶ふまじ、二世とかけたる契なり、浪の底へ入りて一つ道にと思ふなりと仰せける。かよりける所に、内裏にて舞はせたりし迦陵頻からうびんと孔雀の鳥二つ飛び來り、迦陵頻がつと寄り、はくもん王が車をはたと蹴のけたり。孔雀の鳥がつと寄り、姫君の御車をさきへはたと蹴やり、後には御車をさきへくと蹴やりけり。

此鳥また一つになり、はくもん王の車をあなたこなたへ蹴る程に、奈落の底まで蹴入れたり。其後此鳥は歸りぬ。姫君の御車は葦原國に聞えたる花の都、五條の橋につきにけ

しんせき親戚
か
きうたい一舊昔
か
みすちか一前に
出てざれど中納
言の名なるべし
くせと一久世戸

り。さても二人の人々は鰐わにの口をのがれ、鬼神きしんの門もんを去つて、夢の道行くこゝちして、五
條の御所へぞおはしける。いつしか御所は荒れはてて門はあれど扉なし、庭にはしんせ
き道たえて、軒にはあさがほ、しのぶまじりの忘草、たれまつ風の音も心細さぞまさるら
ん。岩間をくぐる忘れ水、絶えくゞ傳ひて流れ行く。嵐は簾すだれをまきあけて、青苔せいたいきうたい
かけ見えていとどあはれぞまさりける。やゝありて奥の方よりも人一人出でて、あやし
けに咎めける。中納言やゝみすちかにてあるぞ、物いはんとのたまへば、御聲におどろ
き御まへに参りけり。御涙にむせびて、とかく仰せ出ださるゝこともなし。藏人申し
けるは、そもく君の御出家ありしより後、今日まで六十六ヶ國を尋ねまるらせぬ所な
く候ひつるが、いづくにおはしましけんぞ申しける。いそぎ内裏へまるらんと仰せけ
れば、御車なんと奉り、御参内あり。もとの御身をかへずして、梵天王の故に羅刹國らせつこくまで
御覽じけること、ありがたき事とおほしめすなり。本領なれば丹後但馬の兩國を下さる
るとの宣旨なり。中納言かゝる物憂き都にあとをとどめじとて、いそぎ丹後へ下り給ひ
て、御年八十と申すに、姫君は成相なりあひの觀音とあらはれ給ふ。中納言はくせのとの文珠もんじゆと
なり給ひて、衆生を濟度したまふなり。かたじけなしとも中々申すばかりはなかりけり。

羅刹國にて御宿かしまるらせし、翁媪おうじゆはは成相なりあひ寺のかきとりの御前ごぜんこれなり。當代までも
はやらせ給ふ。成相の觀音、くせのとの文珠の御本地、すなはち此御事なり。

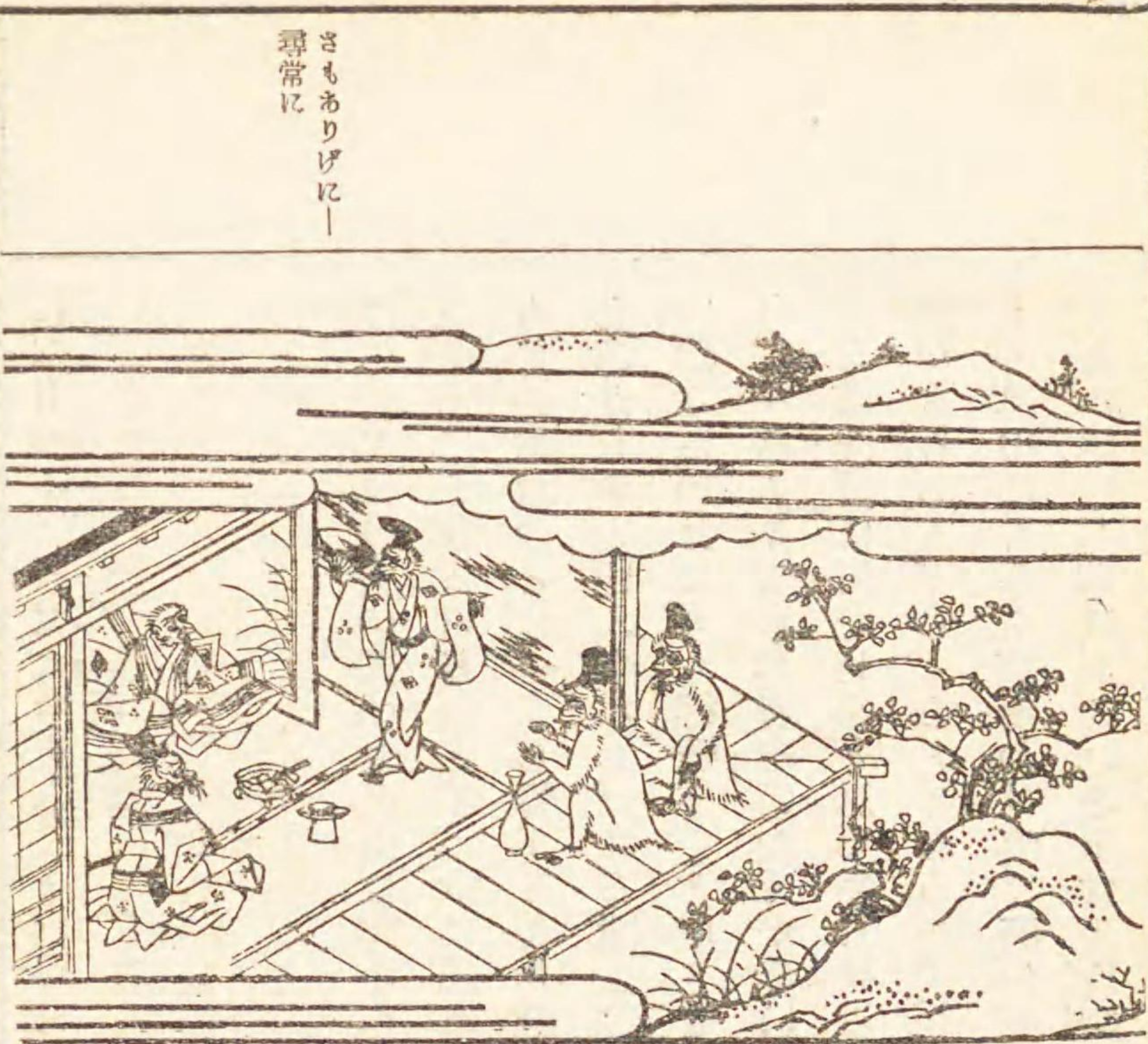
の
せ
ざ
る
草
紙

御
伽
草
紙

二
三
二

のせざる草紙

さるほどに丹波の國のせの山に年をへし猿あり。名をばましをのごんのかみと申しける。その子にこけまるどのとて、世に超えて智慧才覺ちえさいかく、藝能すぐれけるかたあり。此こけまるどの扇おつとり一さし舞うて入り給ふを、いかなる者も見より心そらになし、おもしろがらすといふ事なし。さる間こけまるどのやうく二十ばかりに成らせ給ふ。父母いかなるかたよりも御嫁ごよめをと申させ給へども、耳にも聞き入れ給はず、われ思ふ子細あり、なみくならん者をいかでか妻に迎へん、いかなる公卿殿上人の娘ならでは、久しからぬ浮世に何かせんと思しめしける。世の中の人たち、身の程しらぬ望と思ひ給はんやからもあるべし、こともおろかや、われらが先祖猿丸太夫は皆しれる歌人かじんなり、奥山にもみぢ踏みわけ鳴く鹿の聲こゑきく時ぞ秋はかなしきとよみ給ひし歌は、これを小倉の色紙しきしの和歌に定家ていかも入れられしなり、其外世々の歌人



さもありげに尋常に

の説にも、われを稻負鳥、ましらの聲などとしてよみおく和歌を人しらすや、おそらくば系圖におきては誰人にか劣るべき、なまじひなるやからに身をそめ、何かせんと思しめし、春は岩のはさまにて花を見、秋は木々の梢にては月をながめ、萬の木のみを愛し、いとやさしき色好みておはしける。さる間立願の子細ありて、日吉の御神にまゐらせ給ふが、をりしも都は柳櫻をこきませたる春にてありければ、こよかしこ東山のあたりを眺めありかせたまふ。こよに北白河の邊に、さもありげに造りたる草木の御所あり。是はいかなる人のすみかやらんと、立ちより霞のたえまより眺め給へば、うつくしき姫君、琴ひきてる給へり。いかなる方やらんと、心そら

になりつと、まだたきもなくまほらせ給ふ。かやうに心をうつし給ふも道理かな、兎のいきのかみ殿の、ひとり姫にてぞおはしける。そのかたち尋常に、耳のあたりぬれくと色白く、世には並びなき御姿にてぞありける。こけまるどのはつくくと見給ひて、世の中の人にはかやうの姿あらじ、いかにしてつてもがなと、それより踏む足もしどろにて、夢に道を辿るやうにして、日吉の御社にまゐりて、鰐口打鳴らし、歸命頂禮山王二十一社、白河邊にて見し君のおもかけ忘れやらで、今は露の命も消え失せなと思ふ此身をたすけ、かの姫に逢はせてたび給へと、肝膽を碎き涙ながら口説き給ひて、御まへをたよせ給ふが、目もまひ心きえくとなれば、故里へ歸らん事もなりがたく、木の葉かきよせ枕として、苔路のむしろに倒れふし、ほれくとして明かさ給ふ。しかる所に狐のゐなかどのまゐりあはせ給ひ、かのこけまる殿をつくくと見て、御目元、手足の尋常さよ、いかなる御方なればかくてこよに渡らせたまふぞ、定めて此みやしろへまうで給ふが、旅やつれにくたびれさせ給ふかと、打ちとけて問ひしかば、苔丸殿、いやこれ行くへもなき下藤の子にてさふらふと答へさせ給ふに、ゐなかどの、いやこれ空言と思ひまゐらす、いかさま此御神へまうでさせ給ふ人のなかに、たれぞの姫など

物や思ふ云々
上句「忍ぶれど
色に出にけり吾
戀は」
色をも香をも云
云「信明集」君
ならで誰に見
せん梅の花

を御覽じて、しづ心なき戀に沈ませ給ふと見參らせ候ふ、心のうちを殘さず語り給へと、
たのもしけにしみぐと申しければ、苔丸殿、涙をはらくと流し、物や思ふと人の問
ふまでと、いふことさふらふとて、御恥しけに顔を赤らめさせ給ひ、うちふし給へば、そ
の時ゐなかどの、色をも香をも知る人ぞしる、みづからもわか候らひし時は、さやうの
事も候ひしなり、おもひも戀も、若きときのならひなり、つゝます申させ給へ、命ととも
に頼まれ申さんと言ひければ、たのもしの人の詞やな、かくて消えなば罪ふかし、今は
何をか隠し參らせん、過ぎにしころ白河の花木のまを辿りしに、思ひもよらぬ君を見て、
今は命の玉の緒の、絶えなん後にたれ人か、つゆもあはれと思ふまじき、もしも此事叶は
ずば、猿澤の池へも身をなけて、死なん命はをしからじと、たゞさめぐとばかりなり。
ゐなかどの聞き給ひて、さてはいきの守どののひとり姫にてさふらふべし、心を碎き思し
めすもことわりや、此君と申すは、いきのかみ御ふたり四十ぢにならせ給ふまで、子の
無きことを悲みて、八月十五夜の月に向ひて祈らせたまへば、北の方の右の袂へ月の宿
らせ給ふと、御示現あらたに蒙らせ給ひ、出できさせおはします姫にてましますば、う
つくしきことは理ことわりなり、御名をばたまよの姫と申しさふらふ、いかなる方かたさまよりも

けしやうのまひ
まひはまへの
亂なるべし

文かみたまづさの通ふ事、ふる雨よりしけくしくさふらへども、女御にようご后、もしは公卿殿上
人ならでは、御婿にとらじとて、祕藏し給ふ姫にてさふらふが、御ことはたゞならぬ御
方かたと見參らせ候ふまよ、叶へてまるらすべし、御心やすく思しめせ、幸わらはが娘を、そ
の姫君へ御宮仕に參らせ、けしやうのまひと召されさふらふ、みづからもさいくかの
姫の御方へ參り候ふ、御文おんぶんあそばせ、届けてまるらせんといへば、苔丸殿いとうれしく
て、

君のゑにかき集めたる木の葉どもの散りなんのちをたれか問はまし

かやうにあそばし渡し給へば、ゐなかどの袂に入れ、やがて彼方かなたへまるらせんとて、白
河の御所へまるりければ、姫君つくぐと見させ給ひ、何とて此程は、うちたえ給ひし
と、雪をあざむく御顔をもたけさせ給ひ、いとなつかしけに仰せさふらへば、ゐなかど
の、御まへに人の無きをりを得て、しかぐの御文おんぶんとてそばに置く。姫は耳をそばめ、
恥しけにうつぶき給へども、ゐなかどの、人たらしの上手にて、昔よりつれなき人は、
淺ましくなりはて候ふ。いたづらになりし小野の小町が事まで言ひきかせければ、さす
が心づよきも罪ふかし、岩木にあらぬ身なればとて、かくぞかし、

岩木にあらぬ身
白氏文集「人
非木石皆有情」

をちこちの云々
此歌をちこ
ちのたづきも知
らぬ山中に覺束
なくも呼子鳥か
な」の古歌を取
れり
こん／＼狐の
鳴聲を來んにか

をちこちのたづきも知らぬ山猿のおほつかなくもわれを問ふかや
筆もしどろに書きながし、さしおき給ふを、取る手もうれしくて、やがてこん／＼と言ひ
ちらし、狐のるなかは歸りけり。いそぎ苔丸どのに持ちてゆき見せければ、うれしくて
ふと起きあがり、三度いたゞき見て、うつくしの御手やと、胸にあて顔にあて、それよ
りなほいやましに思ひつと、たび／＼の御文をやり給へば、ふたかはの行末はやがて逢
瀬となり給ふ。けにや小笹の一節も、なれての後はしのび／＼に通ひつと、今は淺から
ぬ中とならせ給ふ。父いきのかみ、北の方きと給ひ、けにも丹波ののせのましをのぞん
の守の苔丸殿は、聞き及びし色好み、いかなる公卿殿上人の中にも無き姿なり、今は御
見參とて、いろ／＼深山の菓子とり集めてもてはやさせ給ふ。此事丹波のぞんのかみ聞
召し、此頃いづかたへも渡らせ給ふぞと思ひしに、さてはかやうの事にてありしを、知
らざる事よとて、御むかひに馬乗物、木葉猿共を、おびた／＼しくつかはし給ふ。こけまる
どの、たまよの姫君を引具し丹波へ越え給ふ。父母吉日をえらび、御見參ありて見給ふ
に、世にはかゝるうつくしき姫君もあるかや、こけ丸の心をつくしつるもことわりやと
て、とりはやさせ給ふ。その後御子あまたいできさせ給ひ、末繁昌に榮えさせ給ふ。昔も

今もかゝる御幸あらじと、めでたき事かすかぎりなし。

猫
の
草
紙

御
伽
草
紙

遊山の草紙

猫の草紙

慶長一傍訓原本のまゝ
ひとしく一同時に

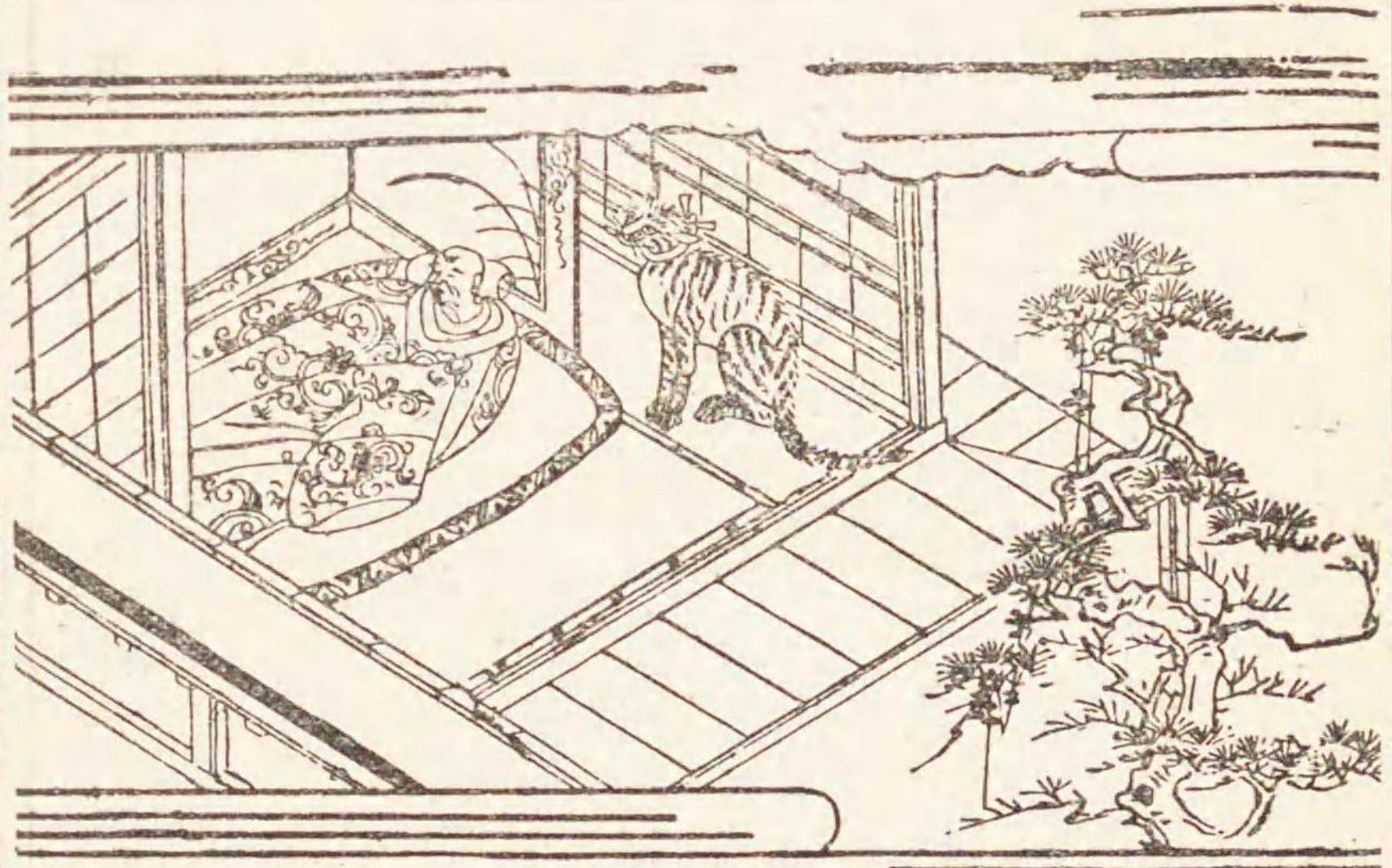
遊山といひ一自由に遊行も出来
さなりもなく一
小鳴の意にて音
せぬことか
きのうまき事
きは機なるべし

天下太平國土安穩 かよるめでたき御代にあふこと、人間は申すに及ばず、鳥類畜類に至るまで、ありがたき御政道なり。まことに堯舜の御代にも勝れたることなり。まづ慶長七年八月中旬に、洛中に猫の綱を解きて放ち給ふべき御沙汰あり。ひとしく御奉行より、一條の辻に高札を御立てあり。そのおもてに曰く、一、洛中猫の綱をとぎ、放ちがひにすべき事。一、同じく猫うりかひ停止の事。此旨相背くにおいては、堅く罪科に處せらるべきものなり、よつて件の如し。右かくのごとく御政道ある上は、面々祕藏せし猫どもに札をつけて、はなち申せば、猫斜ならず喜びて、こよかしこに飛びまはること、遊山といひ、鼠を捕るにたよりあり。程なく鼠おぢ恐れて逃げかくれ、桁梁をもちしらず、ありくといへども、さなりもなく、忍びありきの體なり。かよるきのうまき事なし、願はくば此御法度、つゝがなく懈怠する事なかれと、萬民かくの如し。爰に上京邊の人

けろくわんのふ
たつ一教觀の二
つにて教相觀心
の二門をいふ

れんくー連々
か

さんぎーさんぎ
(慚愧)か



なりしに、よにたつとき御發心者あり。惡を捨てて善にすよみ、あしたには天長地久、夕には現世安穩、後生善所のいたり、法界平等利益と願ひしけうくわんのふたつ明かなり。道俗男女、殊勝感涙をながす、誠に大日如來ともいふべし。かゝる殊勝の道理をば、鳥類までも知りはんべるか、ある夜不思議の夢をみる。鼠の和尚とおほしきが、進み出でて申すやう、御僧様へむかひ詞をかはすこと、憚りに存じ候へども、御教趣のほど、れんくー椽のしたにて、日夜朝暮御談義を聽聞仕り候ふに、懺悔に罪を滅すと仰せられ候ふについて、まかり出でて候ふなり、さんぎ懺悔をも仕り候はど、一句の御道理をも、御授けあつて下され候へかすと申しければ、

僧答へていはく、汝らがふせいとして、かゝるやさしきことを申すものかなと、なのめならず思ひ、草木國土悉皆成佛となれば、非情草木も成佛すと見えたり、況や生ある物として、一念彌陀佛則滅無量罪、唯心の彌陀、己身の淨土なり、爰を去ること遠らずと説き給へば、たとひ鳥類畜類たりといふとも、一念の道理によつて成佛せずといふ事やあるとのたまへば、さらば懺悔の物語を申し候はんとて、鼠鳴きのなんだを押拭ひ申すやうは、今度洛中の猫の綱をはなされ申すゆゑ、我々一門悉く影をかくし、或は逃げ、或は亡び、今すこし残り申すものどもも、けふあすの命と思ひ、心細くいしずゑのかげ、椽の下にかどむといへども、寸の油斷も候はず、又穴の住居を仕りて見るといへども、一日二日の事にもあらず、中にばかりも息ごもりてゐられ申さず、たま〜憂き世間へまかり出でんとすれども、しや取つておさへ、あたまより噛みひしがれ、しむらを引きさかれ、かゝるいぶせき事に逢ひまつる事、前世の因果悲しうこそ候へと申せば、僧答へていはく、汝らがしほたれて言ふ所いたはしく思ふなり、殊に一句をも授けたれば、弟子同前に思ふなり、まづ〜くせごに人に憎まるゝ事を、語つて聞かすべし、わらは如きのひとり法師、たま〜傘をはりたてて置けば、やがてしまもとをくひ破り、又旦那をも

しまもとー未詳

六條一六條の袈裟
御たとへ例を引きていはれし話

あちひぼうしやう
ちやこ一茶子にて茶汲女か
あかはだかつけ
紐の時一毛の生えぬ幼少の時かぶきたるなり
一ふさげたる姿

てなさんとて、いり豆座禪豆をたしなみ置けば、一夜のうちにみなになし、袈裟衣ともいはず、扇物の本、張付屏風、かき餅、六條などをたまらせず、いかなる柔和忍辱の阿闍梨なりとも、命を絶ちたき事勿論なり、いはんや大俗の身にては道理至極せり。其時鼠答へていはく、我らも御たとへの如く存じて、わかき鼠どもに意見をなすといへども、忠言耳にさかひ、良薬口にながしと申せば、中々聞きも入れず、なほく悪逆つかまつらんと申す、そのなかにも、まづ第一、人に憎まるゝこと勿れ、お東どの、お北どのの、あらひぼうしやうつきおひ、ちやこ、おはしたの前垂、かたびら、足袋、また袴、肩衣のはし、唐櫃のすみ、つよみ、葛籠の中へとりこもりて家を作り、餌食にもならず、手柄にもならざる物をくふこと勿れ、壺のはたなどまはるなと、あかはだか、つけ紐の時よりも申し聞かせ候へども、かぶきたるなりばかりを好み、人の枕もと、こも天井ふる屋根などをすみかとして、悪逆ばかりを仕り候ふ事、是非なき體と、語り申すうちに夢さめて、既にその夜は明けにけり。又つぎの夜の夢に、虎毛の猫來り、けにくしく語り申すやう、御僧様たつときにより、鼠根性とて、人の憎むやつにて候ふ、かよる奴原まゐりて、いろくの事を申すよし、やがて告げ知らするかたあり、總じてかの鼠と申

外道の上盛一惡魔の骨張

その子細一その理由
柏木のもと一源氏物語の柏木右衛門督の事をいふ

たいりやく一大略にて概しての意
にふがく一未詳

なんせんさんみ

すは、外道の上盛なるべし、御僧の御慈悲を垂れ給ひても、やがて物をひかん事必定なり、又我らの系圖をあらく語り申すべし、聞召し候へ、箇様に申し候へば、鼠とたけくらべのやうに候へども、いはれをしろし召されずば、いやしめ給はんまよ、猫背中におしつくばひ、大の眼に角をたて申すやう、われは是天竺唐土におそれをなす虎の子孫なり、日本は小國なり、國に相應してこれを渡さるゝ、その子細によつて、日本に虎これなし、延喜の帝の御代より、御寵愛あつて、柏木のもと、下簾のうちにおき給ふ、又後白河の法皇の御時より、綱を付けて腰もとに置き給ふ、綱のつきたるゆゑに、一寸さきを鼠徘徊するといへども、心ばかりにて取りつくことならず、湯水のたべたき時も、咽を鳴らし聲を出だしてたべたけれども、あたまをはりいたためらるれば是非なし、詞を通ずといへども、天竺の梵語なれば、大和人の聞き知ることなし、たいりやく繋ぎ殺さるゝばかりなり、にふがくの御慈悲廣大にて、賤が伏屋に月の宿り給ふがごとく、猫風情までに御心をつけさせ給ひ、綱をととき、苦をゆるさるゝこと、ありがたき御事なり、此君の御代、五百八十年の御齡をたち給へと、朝日にむかつて餘念なう、のんどを鳴らし拜み申すなり。僧答へていはく、猫のいはれやう、近頃神妙なり、なんせんさんみ

やうー南泉三明
あつかひー仲裁
か
さんりんー三輪
か

くごにかつろを
ーくごは供御よ
り轉じて食物の
義、かつろをは
監
たつくりーごま
め

堪忍のことー鼠
を食ふをやる
こと

やうの心を思へば、きるよともいかでかへん、さりながらこゝに詫びたき事あり、出家の役にて、かやうの事を見てはおかぬ法なり、あつかひに入りたきとのことわりなり、殺生ばかりをするものは、因果車輪の如く、死しては生じ、生じては死し、流轉にさんりんしては、其因果のがれ難し、一切のこくうをしらんによつて、生死もろくの諸悪をはなれ、三界六趣輪廻生滅して、すなはち解脱を得ると見えたり、殺生をやめられ候へ、其方の食物には、くごにかつろをませて與へ、またをりくはたつくり鮮乾鮭などを、朝夕の餌食には、いかごと問ひ給へば、御誂の如くにては候へども、まづく案じても御覽ぜられ候へ、人間は米をもつてこそ、五臟六腑をとよのへ、足手達者に利口をものたまへ、山海の珍物は、飯をすよめんがためなりとうけ給り候へば、われくもその如く、天道より食物にあたへ下され候ふ故に、鼠をたべ候へば、無病にして飛びありくと、鳥にも劣るまじと存じ候ふなり、またゆるくと晝寝つかまつるも、鼠をたべんと存するためなり、しかるを今より堪忍のこと、同心申しがたし、御分別候へと申せば、さしも廣大無量の御僧なれども、返答しかね、感涙肝を消すばかりなり。夢さめて、曉がたにまどろめば、例の鼠きたつて申すやう、とかく此體にては、京中の堪

命の中たがひー
生命をすつるこ
と

かざーにはひ

めんあひー未詳

木のもとー伊香
郡木之本

忍なりがたしとて、上京下京の鼠どもよりあひ、ふれをまはし、にしぢん組は舟岡山のすそ、小川組は御靈の藪、立賣組は相國寺の藪、聚樂組は北野の森、下京組は六角堂のうちへ、よりあひく談合す。其中に分別顔する鼠、すよみ出でて申すやう、所詮此體ならば、命と中たがひの外はあるべからず、いかどしてか此度の命のびなんと、いろく評定したりけり。はや都の御ふれ、五十日になるといへども、魚の骨を一つ齒にあてず、油あけ、やき鳥のかざをだにもかどす、猫どのに参りあはねば、自然に干死にまかりなるなり。きつと案じいだしたる事あり、此程聞き及びしは、近江の國御檢地ありしかば、めんあひについて、百姓稻を刈らぬよし、慥に聞きとどくるなり。まづく冬中はまかりこし、稻の下に妻子共をかどませ、年をこえ暖にならば、きたの郡、木のもとの地藏をたのみ、ゆんでめての山々、伊香郷山、おくだに山、おそろしけれど膽吹山に關が原、醒が井、摺針、佐和山、たかのはた所の山、はくさんじ山、かみかまうのこなりのはた、ふせ山、布引山、觀音寺、八幡山、鏡山、朝日山、ここの郡わしの尾の山、村々里々、三上山、信樂山、石山、粟津、まつもと、打出の濱、長柄山、園城寺、延曆寺、坂本、堅田、比良、こま

か きんへんー近邊

つ、白鬚の明神きんへん、うちおろし、今津、海津、しなづ、志賀の浦、便船あらば竹生島、ちやうめんじ、おきの島などへもおし渡り、野老蕨などを掘りくひ、一旦身命をつながんと存じ候ふ、何より心の残り候ふは、やがて正月に、かどみ、はなびら、煎餅、あられ、かき餅、おこし米など、春雨の中徒然なぐさみにかぶりくひて、じよめいて遊ばんとたくみしに、大敵の猫どのに、おつ立てられ、のき退くこそ無念なれ、さりながら猫どのも犬といふこはものに、あそここを追ひまはされ、辻川、にたふれふし雨露にしほたれたるを見れば、報いはありと勇みつよ、方々へのき退く。その中に公家門跡などに久しくすみける鼠、三首の腰折をつらねたり。

鼠とる猫のうしろに犬のゐてねらふものこそねらはれにけり
あらざらん此世の中の思ひでに今一たびは猫なくもがな
じよといへば聞耳たつる猫どののまなこのうちの光おそろし

僧心に思ふやう、かよることわざ人に語るならば、狂氣とや風聞せん、深くつよしむべしと思へども、まれなる夢のたはぶれは、近き友に語り傳へ、笑草かなといへば、仰せのごとく、鼠うすくなり物をもひかず、枕本をもありかず、かやうの御政道は昔が今にい

たるまで、ありがたき御事なり、君もゆたかに民さかえ、久しくめでたき事ばかりにて、心ゆるがせなるのみなり。

濱
出
草
紙

御
伽
草
紙

濱出草紙

たいふー大分か
給はりしー給は
りての衍か
はつかいー須彌
山説に九山八海
ありそれにかに
どりて云へるに
や

そも鎌倉と申すは、むかしは一足ふめば三丈ゆるぐたいふの沼にて候ひしを、和田、畠山、總奉行を給はりし、石切、鶴の嘴をもつて、高き所を切りたひらけ、たいふの沼をうめ給ふ。上はつかい、中はつかい、下はつかいとて三つにわる。上はつかいは山、中はつかいは在家、下はつかいは海なりけり。上はつかいの一段高きところには、源氏の氏神、正八幡大菩薩をあがめ祝ひ奉る。中はつかいの在家を、鎌倉やつ七郷にぞわられける。あらおもしろのやつくや。春はまづさく梅が谷、つどきの里に匂ふらん。夏は涼しき扇が谷、秋はつゆくささよめがやつ、冬はけにも雪の下、龜がえやつこそ久しけれ。
はるか沖を見渡せば、船に帆かくる稻村が崎とかや、いひ島、江の島、つどいたり。蓬萊宮と申すとも、いかでこれには優るべき。かるがゆるに名づけて、あゆみを運ぶと

ちはや一巫女の
きる小忌衣の類

左近の右大將一
文官なる語な
り、右大將は右
近の大將なれば
左近なるべきに
非ず
くわんど一官途
か

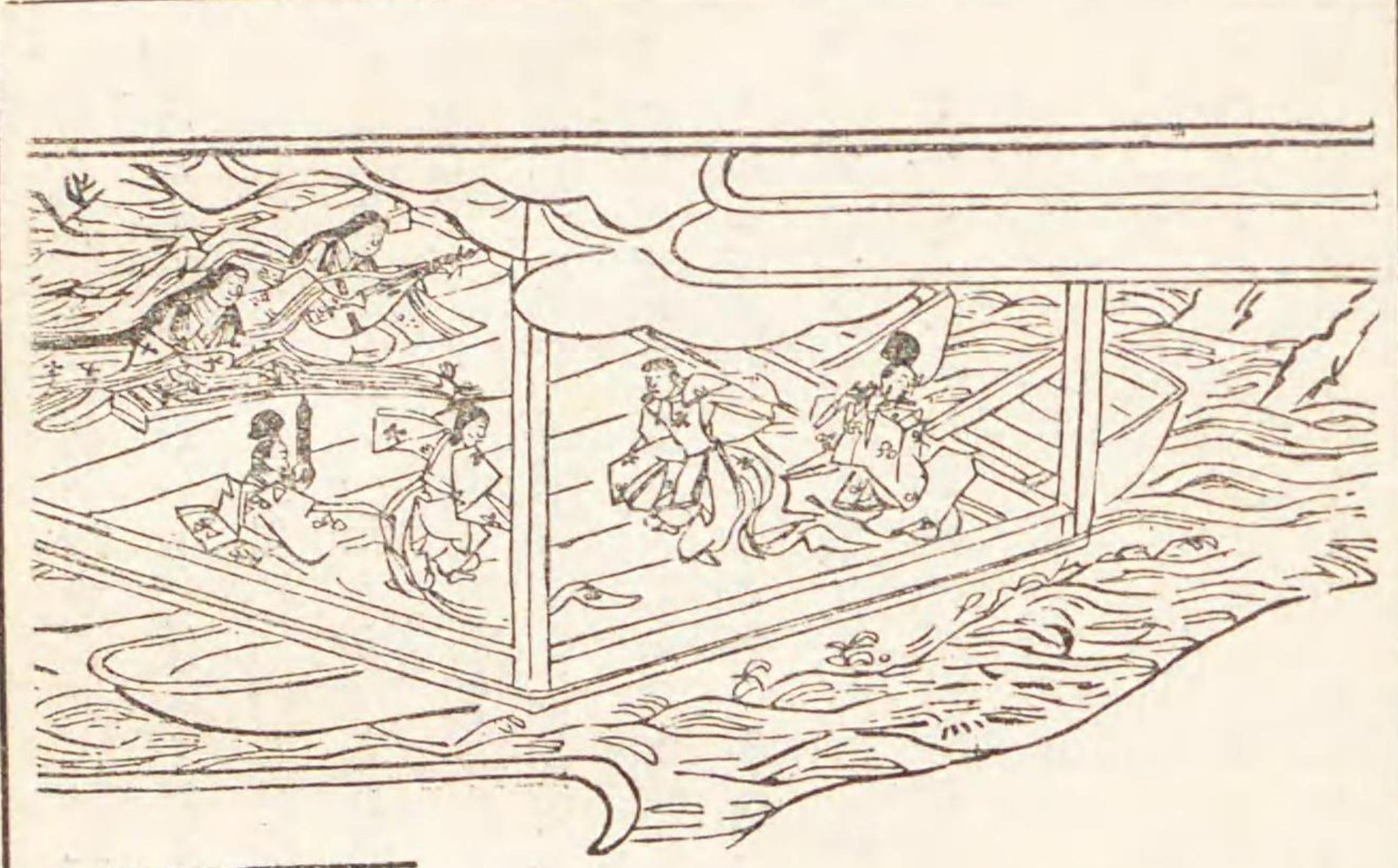
てうしやう一未
詳
餉ざつしやう一雜

りふじん一蜜柑
の一種に李夫人
と稱するものあ
り
さうふのしる云
云一未詳
しゆみをなす一
未詳
ちんのほた一沈
の樽にて沈香の
根株なるべし
じやかうのへそ
一麝香の脚

もがらは、諸願必ず満足せり。ていとうの鼓の音、さつ／＼の鈴のこゑ／＼に、ちはやの袖をふりかざす、神慮すゞしめの、御神樂の音はひまもなし。

かゝるめでたきをりふし、頼朝上洛ましく／＼て、大佛供養をのべさせ給ひ、御身は左近の右大將に經あがらせ給ひ、兵衛づかさ十人、左衛門づかさ十人、廿人のくわんどを申し給ひて、そのころちうの人々に、當て行はせ給ふ。中にも左衛門づかさをば、梶原の平三景時に下されけるを、嫡子の源太にゆづる。源太つかさをたまはり、いそぎ國にくだり、此事披露申さであるべきかと、大名小名、てうしやう申し、いつきかしづき奉る。まづ初番のざつしやうには、蓬萊の山をからくみ、中に甘露の酒をいれ、不死の藥と名づけ、しろがねの竿に、こがねの釣瓶をむすび、はねつるべにてこれを汲む。酒にあまたの威徳あり。うとき人さへ近づき、親しき中はなほしたしむ。をちこちのたづきも知らぬ旅人に、馴るゝも酒の威徳なり。蓬萊の山のうへには、りふじんが橘、けんほの梨、さうふのしるかゝくるゆとう、なんせいのかや。皆いろ／＼になりつれて、その味ひはしゆみをなす。まことに不死の藥ぞと、酔をすゝめてまるらす。二日の日の雜餉には、肴のかずを集め、ちんのほた、じやかうのへそ、鰓、腹巻、太刀、刀、名馬の

したんくわりほ
く一紫檀、花梨
木
みづひき一水引
の幕
けんくわん一紋
管か



かずをそろへ、思ひ／＼に引かれけり。三日の日の雜餉には、江の島まうでに事よせて、御はまいでとぞ聞えける。かたじけなくも御寮の北の御方いでさせ給ふ。そのうへ人々の北の方も皆御供とこそ聞えけれ。船のうへに舞臺を高く飾りたて、したんくわりほくやり渡し、高欄ぎほし磨きたて、舞臺のうへに綾をしき、みづひきに錦をさけぬれば、浦吹く風に飄飄して、極樂浄土は海のおもてに浮き出でぬるかと思はる。おん賀の舞あるべしとて、けんくわんの役をぞさゝれける。秩父の六郎どのは笛の役とぞ聞えける、なかぬまの五郎はとびやうしの役なり、梶原の源太景季は太鼓の役とぞ聞えける。御簾中には、琵琶三面、琴二ちやう、きんの琴

しくわうそだち
未詳
めいとう一名童
か
一たう不明

りんたいは輪
臺の行か、輪臺
は唐樂なり
ことりしよ古
鳥蘇か、これも
唐樂

船きやうたう
船行道なるべし
けもんかくち
玄文學地にて幽
玄なる佛道を學
修せんとする輩
の意なるべし

の役をば、北の御方ひきたまふ。一面の琵琶をば、北條殿の御内様、上總の介の御内様
和琴をしらべ給ひけり。けんくわんいづれも名にし負うたる上手なり。舞臺のうへの舞
ちごに、秩父殿の二男ふぢいしどのと申して、十三にならせ給ふ、しくわうそだちのめ
いとうなり。左の一たううけとりの、高坂殿の鶴若どの、總じてちごは十八人、九人づつ
に分ちて、左右の舞をまひ給ふ、いづれも舞は上手なり。

龍王に一をどり還城樂のさしあし、拔頭の舞のはちかへし、りんたいにはさすかひな、
青海波にはひらく手、ことりしよに羽がへし、いづれも曲をもらさず。夜日三日ぞ舞う
たりける。打つも吹くも奏づるも、菩薩の行これなり。天人は天降り、龍神は浮きあが
り、船きやうたうにめぐららん。けもんかくちのともがら、浮かれてことりに立ち給ふ。
御まへの人々御所領給はり、所知入りとこそ聞えけれ。

和泉式部

和泉式部

中ごろ花の都にて、一條の院の御時、和泉式部と申して、やさしき遊女あり。内裏に橘の保昌やすまさとて男あり。保昌は十九、和泉式部は十三と申すより、不思議の契をこめ、なさけ深くして、十四と申す春の頃、若一人まうけ給ひ、あひの枕まくらの睦言むつごみに、はづかしとや思ひけん、五條の橋に捨てにけり。産衣うぶぎぬあやめの小袖こそでのつまに、一首の歌を書き、鞆たもとなき守刀まもりがたなをそへて捨てけるを、町人まちじんひろひ養育して、比叡ひゑの山へのほせけり。さる程に學問心ざし深く、ならびなく、みな心をかけぬ法師もなく、其名總山そうざんにかくれなく、なさけの色もわりなきさまなり。總山のもてあそびのみならず、佛道の道をたのもしく、其名天下に廣まり、道命阿闍梨たうめいあせりとて、世にかくれなくして、道明たうめい十八のとし、内裏の八講はつかうをつとめ給ひし時、風ふきてつほねの簾すだすを二三度吹きあけて、年の程二十ばかりなる女房の、眉はこほれてよしありて、論議聽聞して、おもひ入りたる風情にておは

八講一法華八卷
を講説する式

しけるを、道命たうめい只一目みしよりも、浅からぬ身にあこがれて、我宿に歸り、山にあがり
 給ひても、見し人のおもかけ身にそひて、忘れぬは前世の宿業なり。
 又都へのほりて、あこがれ見し人のおもかけを、今一目見ばやと思ひ、柑子かんしあき人にな
 りて、内裏にこし入りて柑子を賣りけるに、彼の見し人の局つぼねより、下女一人出でて、お
 あし二十ばかりにて柑子をぞ買ひにける。それは二十かぞへて賣りけるが、詞にてはか
 ぞへず、戀の歌に數へつゝかくなん、

一つとや、ひとりまろねの草枕袂しほらぬあかつきもなし
 二つとや、ふたへ屏風のうちに寝てこひしき人をいつか見るべき
 三つとや、みても心のなぐさまでなとうき人の戀しかるらん
 四つとや、よぶかに君を思ふらん枕かたしく袖ぞ露けき
 五つとや、今やくとまつ程に身をかけろふになすぞ悲しき
 六つとや、むかひの野べにすむ鹿もつまゆゑにこそ鳴きあかしけれ
 七つとや、なき名の立つもつらからじ君ゆゑ流すわが名なりけり
 八つとや、やよひの月の光をばおもはぬ君が宿にとどめよ

九つとや、こよであはずば極樂の彌陀の淨土であふ世あるべし
 十とかや、とやをはなれし荒鷹をいつかわが手にひきすゑて見ん
 十一や、一度まことのあるならば人の言の葉うれしからまし
 十二とや、にくしと人の思ふらん叶はぬことに心つくせば
 十三や、さのみなさをふり棄てそなさは人のためにあらねば
 十四とや、しなん命もをしからず君ゆゑながすわが身なりせば
 十五とや、後世のさはりとなりやせん身のはかなくも逢はではてなば
 十六や、陸地りくぢの程をすぐるにも君に心をつれてこそ行け
 十七や、七度まうでのたびくも君にあふよと祈りこそすれ
 十八や、はづかしながら言ふことを心つよくもあはぬ君かな
 十九とや、くるし夜ごとに待ちかねて袖いたづらに朽ちやはてまし
 二十とや、にくしと人の思ふらんわれならぬ身を人のこふれば
 といひければ、かの下女かんし是を聞きて、柑子よくほるべきにはあらねども、あまりに歌の
 心の面白さに、柑子一つそへよといへば、一つ添へてかくなん、

よくほる—よく
 ぼる

二十一と、一度のなさけこめんとて多くのことば語りつくしつと詠みてんければ、彼下女道命をつくくを見て、かほどやさしき業をして、かんし賣り給ふぞといひければ、ふりくしてと答へける。

下女は心えず思ひける。さる間禁中此事をきこしめされ、只今の商人の歸るさき見よとて、人をそへて見せ給ふに、道命内裏を出でて、心に思はれけるは、今日は日もくれぬ、あすこそと思ひ宿をとりけり。さる間下女宿をよく見おきて歸り、此由かくと申しあぐれば、禁中より仰せけるやうは、彼の商人のいひつることばをよも知らじ、伊勢が源氏をこひてよみし歌なり。

君こふる涙の雨に袖ぬれてほさんとすれば又はふりく

といふ歌の心ばへなりと、仰せごとありければ、彼の局の女房、さては淺からぬ心あこがれけるよと、つくくと思ひつどけて、小野の小町は若盛の姿よきによりて人に戀ひられて、其怨念解げざれば、無量のとがによりて、その因果のがれず、遂に小町四位の少將おもひはなれず、いひすつる言の葉までもなさけあるなり、只いたづらに朽ちはつる身をとといふ歌の心を忘れずして、常に人にわりなきなさけを、こめたき事にてと案

じつけて、下女一人つれて内裏をいで、道命が宿へ行きて、戸をほとくと叩きてかくなん、

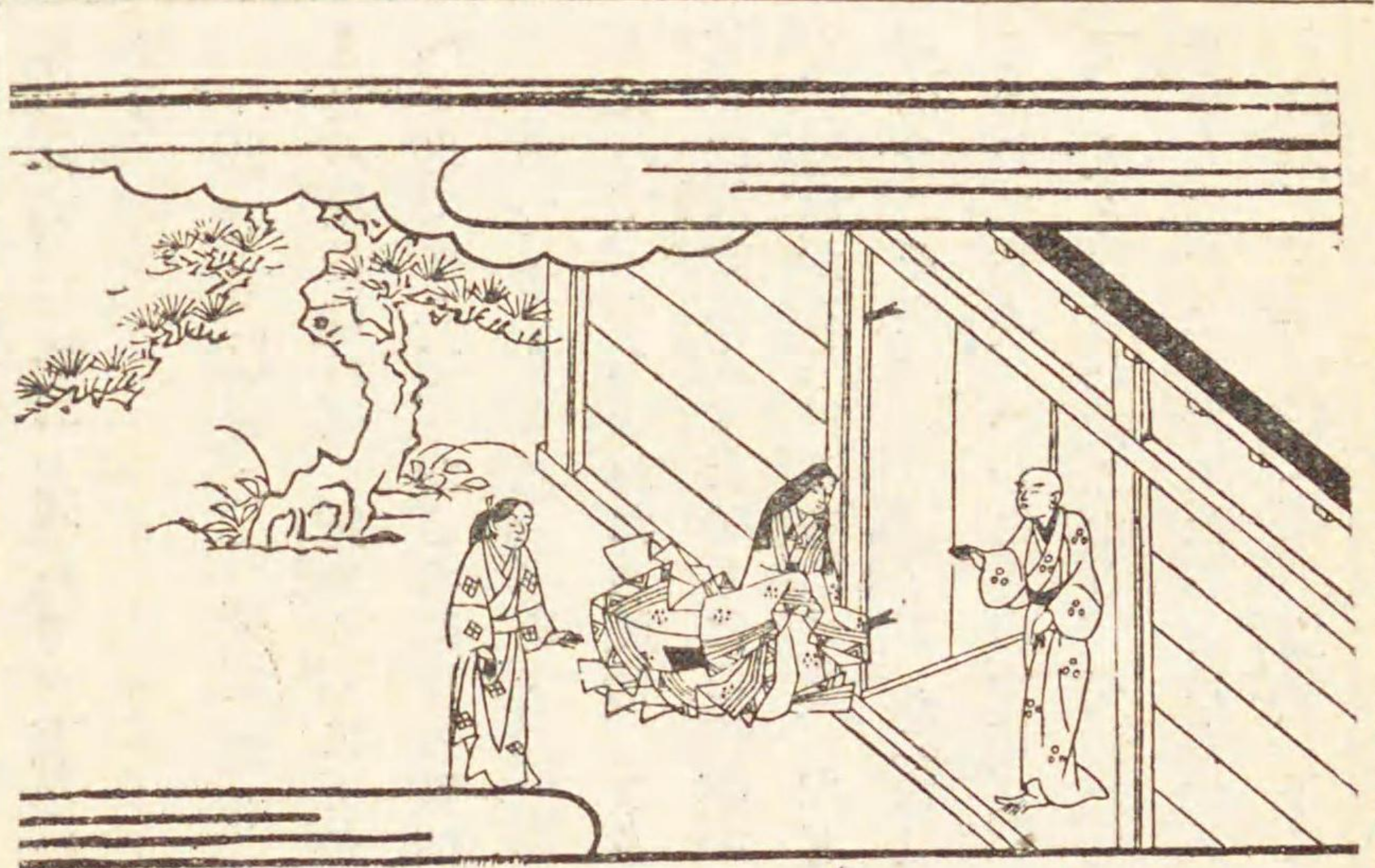
出でてほせこよひばかりの月影にふりくぬらす戀の袂を

とよみ給ひければ、道命うちにて是をきよ、夢のこちして表の戸をあけて、さらば外へも出でずして、かこち顔なる風情してかくばかり、

出でずとも心のあらば影さして闇をぼてらせ有明の月

とよみて、うちほれたる風情、もとより彼の女房なさけ深きにより、うちにさし入りて、其夜は鴛鴦のふすまのしたに比翼の契をこめ、夜もやうく更け、きぬぐなりし折しも、道命がもちける守刀を、などやらん心にかけ給ふけしきにて、仰せけるやうは、女房の身こそあれ、男の守刀をかけたるためしはいかにと仰せければ、道命、これは由ある刀にて候ふ、いかにと申すに、われは是五條の橋の捨子にて候ふを、養子の父のそだてて、人となされ候ふなり、又われに此刀をそへて捨てられし刀なれば、これを母と思ひ、身をもはなたず持ちたると申しければ、女房なほ怪しく思ひ、さては御身はいくつになり給ふぞと問ひ給へば、道命、子にて捨てられ候ふようけ給はり候ふ、今ははや大に

養子の父―養父
といふに同じ



なり候ふと語りければ、産衣うぶぎぬは何にて候ふと問ひ給へば、あやめの小袖のつまに、一首の歌を書きたり。いかにと仰せければ、やがて道命、かくとあり、

もよとせに又もよとせは重ぬとも七つくの名をばたえじな

とよみ候ふ歌なりといへば、和泉式部は捨てし時、鞆をばとめ給ひて、是をばわがみのかたみと思ひし故に、身をはなたす持ちたりし程に、鞆をとり出だしてあはすれば、疑ひもなき元の鞆なり。こは何事ぞ親子を知らであふ事も、かかる浮世にすむゆゑなり。是を菩提のたねとして、都をいまだ夜深よぶかに出でて、をのへの鐘のうらづたひ、ひゞきは何としかまがた、霞をしの

暗きより一此歌正しくは「暗きより暗き道にぞ入りぬべき遙に照らせ山の端の月」なり

ぎ雲をわけ、播磨の國書寫へ上り、性空しやうくうしやうじん上人の御弟子となり、六十一の年得心し給ひけるとき、書寫の鎮守の柱に、御歌を書きつけ給ひ、かくばかり、

暗きより暗きやみぢにうまれきてさやかに照らせ山のはの月

とよみて、書きつけ給ひけるによりて、歌の柱といふことは、播磨の國書寫よりこそは始まりたると申すなり。

一
寸
法
師

御
伽
草
紙

二
六
二

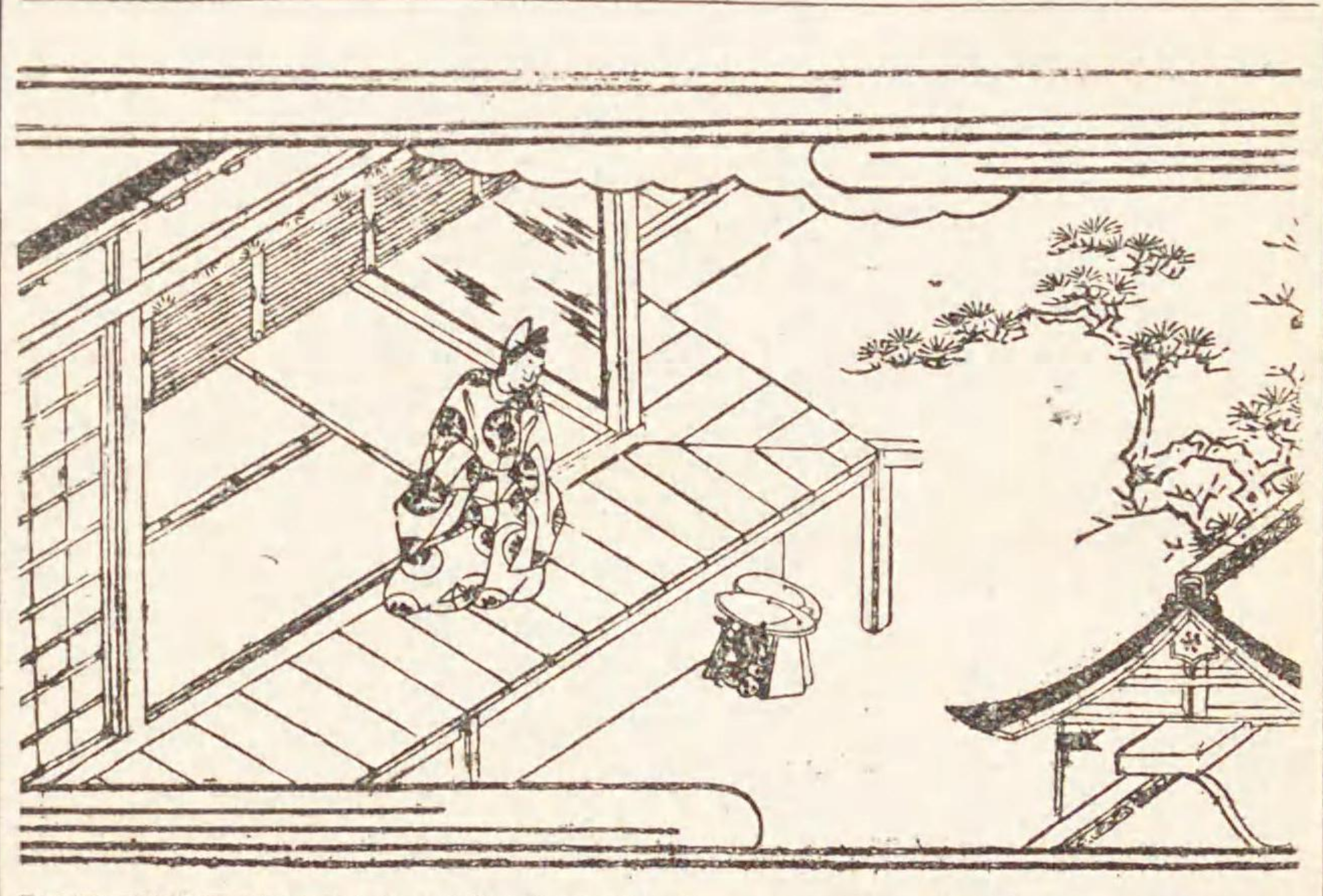
一寸法師

中頃の事なるに、津の國難波の里に、おうぢとうばと侍り。うば四十に及ぶまで、子のなきことを悲み、住吉にまゐり、なき子を祈り申すに、大明神あはれとおほしめして、四十一と申すに、たゞならずなりぬれば、おうぢ喜びかぎりなし。やがて十月と申すに、いつくしき男子をのこをまうけけり。

さりながら生れおちてより後、せい一寸ありぬれば、やがて其名を一寸ほうしと名づけられたり。年月をふるほどに、はや十二三になるまで育そだてぬれども、せいも人ならず。つくづくと思ひけるは、たゞ者にてはあらざれ、たゞ化物風情はげものふせいにてこそ候へ、われらいかなる罪の報むくいにて、かやうの者をば住吉より給はりたるぞや、淺ましきよと、見るめも不便ふびんなり。夫婦思ひけるやうは、あの一寸法師めをいづ方かたへもやらばやと思ひけると申せば、やがて一寸法師、此山うけ給はり、親にもかやうに思はるよも、くちをしき次第かな、

せいも人ならず
―身長ものびず

御器一椀



いづ方へも行かばやと思ひ、刀かたななくてはいかどと思ひ、針を一つうばに乞ひ給へば、取りいだしたびにける。すなはち麥稈むぎわらにて柄鞘つかさやをこしらへ、都へ上らばやと思ひしが、自然しぜん舟なくてはいかどあるべきとて、又うばに御器ごきと箸とたべと申しうけ、名残なごりをしくとむれども、たち出でにけり。住吉の浦より御器ごきを舟としてうち乗りて、都へぞ上りける。

すみなれし難波の浦をたちいでて都へいそぐわが心かな

かくて鳥羽の津にもつきしかば、そこもとに乗り捨てて都に上り、こよやかしこと見るほどに、四條五條の有様、心も詞にも及ばれず。さて三條の宰相殿と申す人のもとに立寄りて、物申さん

いつきやう一興か

みつもの一未詳
うちまき一散米

わらは一寸法師
みづからをいふ

といひければ、宰相殿はきこしめし、面白き聲と聞き、椽のはなへたち出でて御覽すれども人もなし。一寸法師かくて人にも踏み殺されんとて、ありつる足駄あしだの下にて、物申さんと申せば、宰相殿不思議ふしぎのことかな、人は見えすして、おもしろき聲にてよばはる、出でて見ばやと思しめし、そこなる足駄あしだはかんと召されければ、足駄あしだの下より、人な踏ませ給ひそと申す。不思議に思ひてみれば、いつきやうなるものにて有りけり。宰相殿御覽じて、けにも面白き者なりとて、御笑ひなされけり。

かくて年月をおくる程に、一寸法師十六になり、せいは元のまゝなり。さる程に宰相殿に十三にならせ給ふ姫君おはします。御かたちすぐれ候へば、一寸法師姫君を見たてまつりしより思ひとなり、いかにもして案をめぐらし、わが女房にせばやと思ひ、ある時みつものうちまき取り茶袋に入れ、姫君のふしておはしけるに、謀事はかりごとをめぐらし、姫君の御口にぬり、さて茶袋ばかりもちて泣きさるたり。宰相殿御覽じて、御尋ねありければ、姫君の、わらはが此程とり集めておき候ふうちまきを、取らせ給ひ御まるり候ふと申せば、宰相殿大きに怒らせ給ひければ、案のごとく姫君の御口につきてあり、まことに偽ならず、かよる者を都におきて何かせん、いかにも失ふべしとて、一寸法師に仰せつけらるる。

給ひかし給へ
かしの訛

きようがる島一
風かはりたる
島

一寸法師申しけるは、わらはが物を取らせ給ひて候ふ程に、とにかくにもはからひ候へとありけるとて、心のうちに嬉しく思ふ事かぎりなし。姫君はたゞ夢の心地して、呆れはててぞおはしける。一寸法師とくくくとすゝめ申せば、闇へ遠く行くふぜいにて、都を出でて足にまかせて歩み給ふ、御心のうちおしはかられてこそ候へ。あらいたはしや、一寸法師は姫君をさきに立ててぞ出でにけり。宰相殿はあはれ此事をとどめ給ひかしの思しけれども、繼母のことなれば、さしてとどめ給はず、女房たちもつき添ひ給はず。姫君あさましき事に思しめして、かくていつかたへも行くべきならねど、難波の浦へ行かばやとて、鳥羽の津より舟にのり給ふ。折ふし風あらくして、きようがる島へぞつけにける。舟よりあがり見れば、人住むとも見えざりけり。かやうに風わろく吹きて、かの島へぞ吹きあける。とやせんかくやせんと思ひ煩ひけれども、かひもなく舟よりあがり、一寸法師はこゝかしこと見めぐれば、いづくともなく鬼二人來りて、一人は打出の小槌を持ち、いま一人が申すやうは、呑みてあの女房とり候はんと申す。くちより呑み候へば、目のうちより出でにけり。鬼申すやうは、是は曲者かな、口をふさげば目より出づる。一寸法師は鬼に呑まれては、目よりいでて飛びありきければ、鬼もおちをの

しもつー撞木
(しもく)又はし
もとの衝か
らんぼうしー濫
妨にて横領する
意か

おうぢーこゝに
ては老父といふ
程の意
うばー老母

のきて、是はたゞ者ならず、たゞ地獄に亂こそいできたれ、たゞ逃げよと言ふまよに、打出の小槌、杖しもつ、何に至るまで打捨てて、極樂淨土のいぬるの、いかにも暗き所へ、やうく逃げにけり。さて一寸法師は是を見て、まづ打出の小槌をらんぼうし、われわれがせいを大きになれとぞ、どうと打ち候へば、程なくせいおほきになり、さて此程つかれにのぞみたることなれば、まづく飯を打ちいだし、いかにもうまさうなる飯、いづくともなく出でにけり。不思議なる仕合となりけり。其後金銀うちいだし、姫君ともに都へのほり、五條あたりに宿をとり、十日ばかりありけるが、此事かくれなれば、内裏にきこしめされて、急ぎ一寸法師をぞ召されけり。すなはち参内つかまつり、大王御覽じて、まことにいつくしきわらはにて侍る、いかさまこれは賤しからず。先祖を尋ね給ふ。おうぢは堀河の中納言と申す人の子なり、人の讒言により、流され人となりたまふ、田舎にてまうけし子なり、うばは伏見の少將と申す人の子なり、幼き時より父母に後れ給ひ、かやうに心もいやしからざれば、殿上へ召され、堀河の少將になし給ふこそめでたけれ。父母をも呼びまらせ、もてなしかしづき給ふ事、世の常にてはなかりけり。

さる程に少將殿中納言になり給ふ。心かたちは初めよりよろづ人にすぐれ給へば、御一門のおほえいみじく思しける。宰相殿きこしめし喜び給ひける。その後若君三人いできり。めでたく榮え給ひけり。
住吉の御誓に末繁昌に榮えたまふ。よのめでたきためし、これに過ぎたる事はあらじとぞ申し侍りける。

あ

い

え

さいきー原本
「さかき」とあれ
ど誤なること明
なれば改む

沙汰一訴訟
みちゆかざーは
かどらず

ほうたんー牡丹
か

さ

い

き

豊前の國うだの佐伯と申す人、一族に所領をとられ、京都へ上り沙汰するといへども、
更にもちゆかすして、年月をおくれども甲斐なし。かくては叶はじと思ひ、清水にまる
りて、一七日こもりて、御夢想にまかせ、ともかくにもならんと思ひたち、竹松と申
す童を一人具してまゐり、祈念を深く申せども、さしたる御夢想もなかりけり。あたり
をきつと見てあれば、年のほど二十ばかりの女房の、みめかたち世にすぐれて、翡翠の
かんざしは青黛が立板に唐墨をかけたるに異ならず。かつらのまゆすみ青うして、丹花
の唇うつくしくして、ほうたんのかさねをに異ならず。三十二相のかたちは、月をねた
み花をそねむばかりなる女房の、みな水晶の珠數をつまぐり、念誦半と見えけるに、佐
伯心におもふやう、おなじ人間にすむならば、かやうの人と一夜の枕を並ぶるよしもが
など、あまり心の堪へかねて、詞をかけんと思ひ立ちより、御こもり候ふかと申せども、

さい
い
き

聞かぬ顔にて候ひし程に、もし主ぬしばしあたりに在るやらんと、しづ心もなかりけり。扱夜もやうく明けければ、けうがる下女に包を持たせ、舞臺をさして出でられける程に、あまりの名残なごりをしさに、立寄り袂をひかへて、一首かくなん、

別るればわれこそうけれあか月の鳥はなにしに音をば鳴くらん
きて見てぞ宿のつらさも知られける君ゆゑぬる袖とおもへば

かやうによみければ、女房も打案じ、歌の返事せぬものは、舌なきものに生まるるときけば、ふりかへりてなん、

われも只おなじ心に旅衣きてこそ宿のつらさをも知れ

斯かやう様によみ捨てて歸りければ、あまりの名残なごりをしさに、竹松をよびて、今の女房のあとに行きて、宿を見て歸れよと言ひければ、此童わらわみえがくれに行きければ、四條高倉にて、さもいなる所へ入りけるほどに、つゞきて入りみれば、廣椽ひろえんにうちあがり、妻戸へ入らせ給ひけるが、うしろを見給へばわらはの來りしを、つくぐと見給ひて、うち笑みて立たせ給ひける程に、此童わらわさしよりければ、この女房の給ひけるやうは、汝しうが主にはもすのくさぐきと言へとばかりにて、内へ入らせたまひけり。

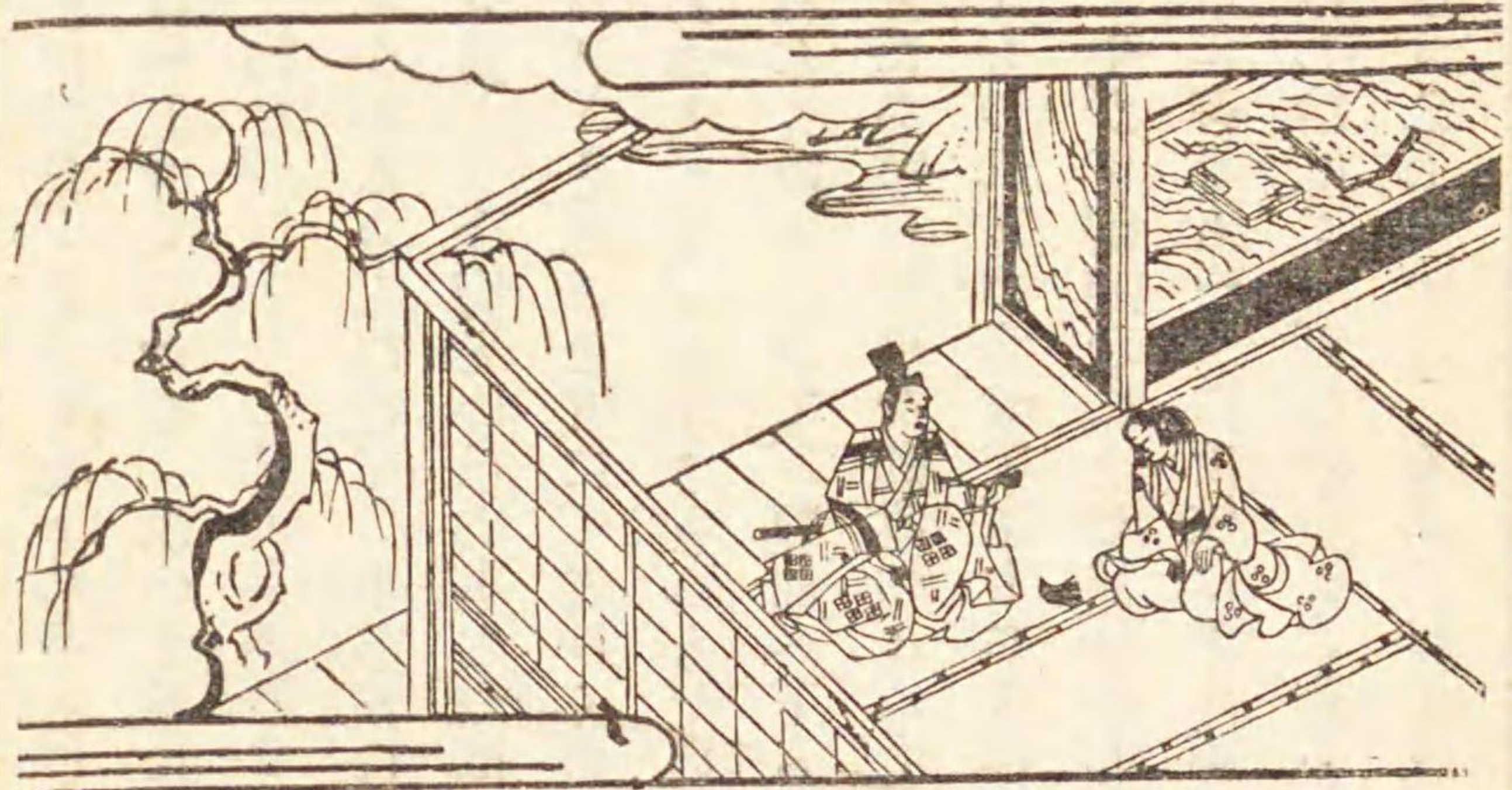
いそぎ歸り、ありのまゝに申しければ、佐伯聞き給ひて、うち案じつゝ暫くありて、さては嬉しきものかな、歌の本歌ほんかにさる事あり、

物かけにありと見えなばおきなせそこよひすぐすな鴟うすの草莖くさぐき

此歌の心なりと思ひて、事尋常ことじんじやうに出で立ちて、彼の宿所へぞいそがれける。もとより彼の女房も、今宵といひし事なれば、今やいつやと待ちたるなり。さる程に佐伯、このうちへつかくと入るほどに、とかくの事もなく、偕老同穴のかたらひ淺からず。此女房は世にある人にて、禁中さまへもだいくさんらうかんを參らせ給ひける程に、佐伯の本領も程なくみちゆきて、豊前へ下らんとぞ給ひて、こしらへられけり。此女房、すこしの間あひだもたち離れん事を悲みつゝ、下りかねてぞありしが、あるとき此女房に申されけるは、只今もつれまるらせて下りたくは侍れども、竹松一人候へば、とかくの事にも及び候はず、やがて御迎ひに上せ候ふべし、それまで離れがたく思ひまるらせ候へとの給ひ、たがひに御心も一つにて候はど、道すがらの事もおしはからせ給ひて、御忘れもせずおほしめし給はど、御むかひをまるらせんまで、是をかたみに御覽じて御待ち候へと、鬢の髪をすこし切りて、女房に參らせけり。女房も離れがたく思はれけれどもとばかりの給

未詳
さんちうかん

本望候ふまじ
返事を取りかへ
ることを期待す
る勿れ



ひけり。
かくて筑紫につきければ、安堵の喜びかぎりなし。日々夜々の亂舞、酒盛美々しき事かぎりなし。かくて日數をおくりしかば、三とせになりけれども迎ひものほせず。京の女房は今やいつやと待ちけれども音もせず。そよと風の吹くも此おとれづかと待ちかねて、餘りの苦しさに清水にまわりて、此いのりをぞ申されける。あるとき鎌倉へ下りける僧のありけるに、文一つかきてことづて、下さんとかたらひければ、此僧やすきほどの御事なりとありければ、うれしく思ひて、ふみをかきて此御僧に奉る。御僧は文うけとりて、行脚の事にて候ふほどに、届け參らせ候はんすれども、御返事までは本望候ふま

鷹野一鷹狩

じと申し給へば、此文只とどきて候はゞ、よろこび入りまゐらせ候ふべしとて、さめぐと泣き給へば、僧もあはれに思ひ給ひて、いかなる御事の御文にて候ふやらん、いたはしやと思ひて、いそぎゆく程に、程なく豊前の國佐伯の館にたづね入り、此文都より御ことづて候ふとありければ、折ふし佐伯は鷹野に出で、二三日もかへられず。たしかにとどけて、僧はすなはち歸られけり。

内の女房此文をとりて見てあれば、便宜よろこび申しまゐらせ候ふ、さてもく御下りのその後は、よもの萩原霜枯れて、たよりの風の音もなし、下葉の露も秋すぎて、おき所なき葛の葉を、うらみんとすれども枯れくの、かつらばかりの身にそひて、しがらむ今の我心、せめて思ひも慰むと、傾く月を見おくれども、ながむる人のあらざれば、空しき夜半のあか月は、したしき寢屋にたちかへり、あくるも遅き戀衣、君が姿を夢にても、せめて見ばやと思へども、ねられぬ夜はの癖として、夢さへうすくなりにつけり、かたしく袖のひとりねは、雲居の雁のひとりつらも、つがはぬ鴛鴦のこゝちして、霜さむしろの鶴が音は、あふと見る夜の夢もなし、思ふ心のおもかけは、身にそふばかりますかゞみ、見てと申す人もあらばこそ、さながら夢の心地して、空飛ぶ鳥の一つがひ、うはの

空なる事までも、契りと聞けばうらやまし、行きがた知らぬあま小舟、獨り物をやこがるらん、野寺の鐘の入相も、心つきぬるうき身かなと書きて、あまのみるめはづかしや、いそぎ煙となし給へとて、おくに歌あり、

うさぎ憂き、宇佐

見るたびに心つくしのかみなればうさにぞかへすもとの社へ

とかよれたり。佐伯くだりの時、かたみとて一ふさ切りて置きつる鬢の髪を、巻きそへてあり。うちの女房是を見て、あらうつくしや、おもしろや、かよる優なる女房を呼ばではいかどあるべきぞ、かほど福人なる男に、かくと物いはいかどあるべき、たばかりごとを言ひて見んと思ひて、佐伯鷹野より歸りけるに、女房いふやうは、みづからが妹都に人にたのめられて此程候ひしが、夫の心のうたてさは、とあるちやうに思ひつきいとまを出だして候ふ程に、萬事たのみて下り候はん、と、文をことづて下し候へば、むかひを上せてたび候へと言ひければ、やすき程の事なりとて、いそぎ迎ひを上すべきといひて、やがて言ひつけて、人を上せんとありしかば、その時此女房はそらやみをして、文を書きえず候ふ、殿に一筆あそばして御やり候へと言ひければ、ともかくもとて書かれけり。久しく御おとづれも申し候はで、心より外に候ふ處に、御文給はりうち置きがた

たのめられて一たのもしくせられて
ちやう一傾城屋の主人を長といふ事あり、そこにおち女をいふにや
そらやみ一假病

く、御嬉しくながめ入り候ふ、すなはち御むかひまるらせ候ふまよ、急ぎ御下り候べく候、くはしくはとても御みづからにてと書かせたり。さるほどに程なくむかひは京へ上りつきけり。その間にうつくしく御所をたて待たれけり。京には嬉しく思ひて、やがて下られける間、程なく豊前の國につき給へり。御下りとおのくひしめき、やがて新造へ入れ奉りて、女房いであひて、あらいつくしの女房や、李夫人、楊貴妃、衣通姫、小野の小町と聞きつたへしも、是にはいかで勝るべき、われさへ見れば餘りのうつくしさに、たちども更に覺えず、かほど美しき人をさへ言ひ出だす事もなし、ましてわらはが事とては、年月長々の在京に一度も思ひ出だすまじ、かほど無得心なる男を頼みしわれこそ淺ましけれとて、髪剃り落し出家せんと、たど一すぢに思ひ定めし女房の、心のうちこそやさしけれ。かくて夫にいふやうば、是迄京のまれ人を呼びくだして候ふうへは、いそぎ御見參候へかと言ひければ、すなはち新造へぞうつりける。其あとに女房は髪を切り文にそへおき、やがて家をぞ出でにける。京の女房此由を聞き、やさしやな、高きも賤しきも妬むならひの候ふに、かやうにやさしき人をいかでか一人おくべきぞ、佐伯に二たび見參して、過ぎにし戀をはれつるも、偏に彼の本妻のなさけ

素懐一本意

の深きゆるなれば、共に出家せんとて、やがて髪切り捨てて、同じ庵室かんじつにとち籠り、行ひすましてるたりけり。

佐伯は二人の女房に捨てられて、あるに甲斐なき身のほどとて、鬘もみぢりきりて西へ投げ、高野山へぞ登りける。是も清水の観音の御方便にて、三人ともに救ひとらせ給ひて、いづれも行ひ澄まして、往生の素懐をとけ、彌陀、観音、誓至とあらはれ、三尊是なりといへり。誠にありがたかつとかりける恵みなり。

浦島太郎

浦島太郎

うろくづー魚類

昔丹後の國に浦島といふもの侍りしに、其子に浦島太郎と申して、年のよはひ二十四五の男ありけり。あけくれ海のうろくづを取りて、父母ちちははを養ひけるが、ある日のつれづれに釣をせんとて出でにけり。浦々島々入江々々、至らぬ所もなく釣をし、貝をひろひ、みるめを刈りなどしける所に、ゑじまが磯といふ所にて、龜を一つ釣り上げける。浦島太郎此龜にいふやう、汝生しやうあるものの中にも、鶴は千年龜は萬年とて、いのち久しきものなり、忽ちこゝにて命をたゝん事、いたはしければ助くるなり、常には此恩を思ひいだすべしとて、此龜をもとの海にかへしける。

つぐの日ー次日

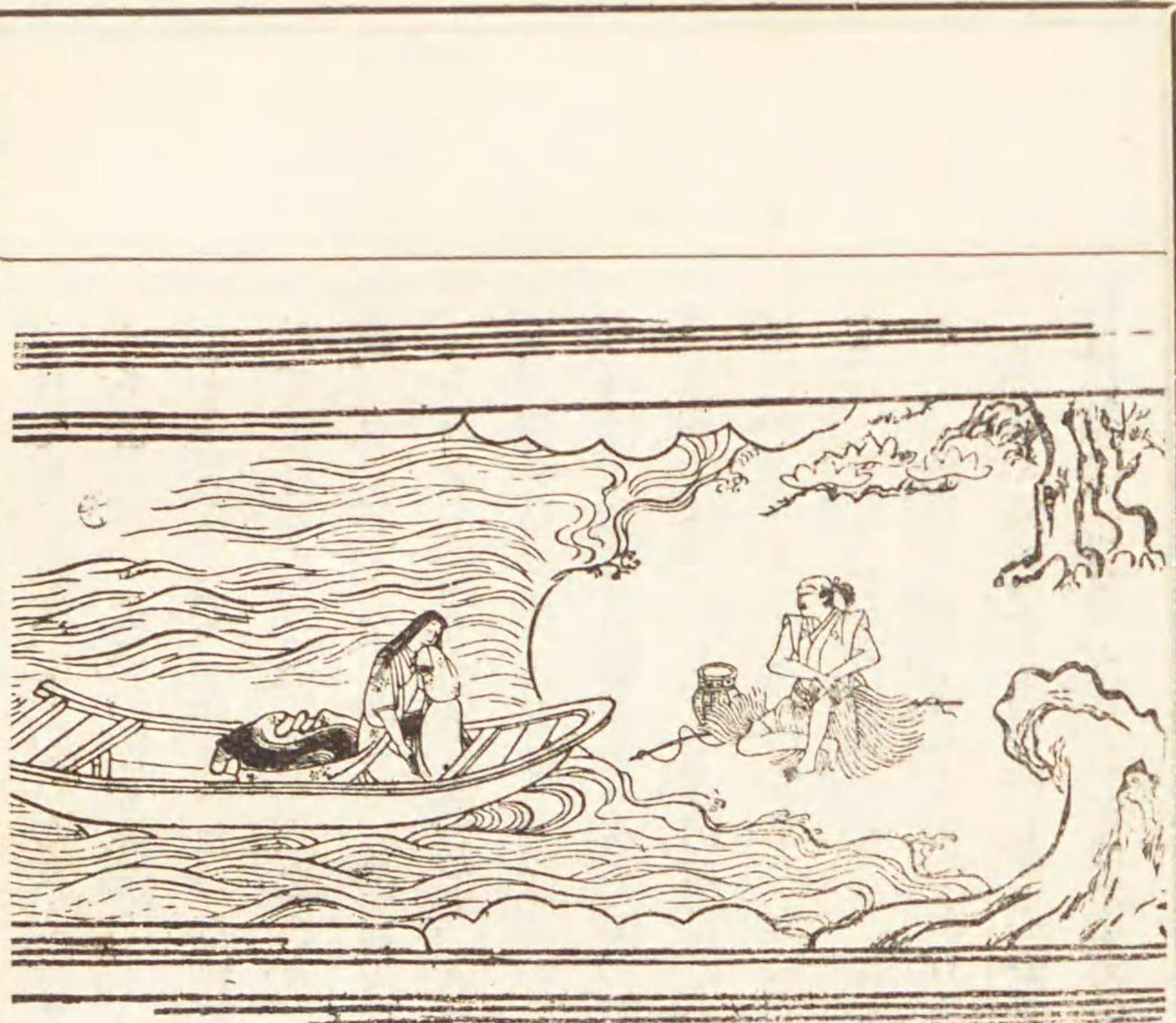
かくて浦島太郎、其日は暮れて歸りぬ。又つぐの日、浦のかたへ出でて釣をせんと思ひ見ければ、はるか海上に小船せうせん一艘浮べり。怪みやすらひ見れば、うつくしき女房只ひとり波にゆられて、次第に太郎が立ちたる所へ著きにけり。浦島太郎が申しけるは、御

はし舟一小舟

此世ならぬ縁一
前世よりの宿縁

身いかなる人にてましませば、かよる恐しき海上に、只一人乗りて御入り候ふやらんと申しければ、女房いひけるは、さればさる方へ便船申して候へば、をりふし浪風荒くして、人あまた海の中へはね入れられしを、心ある人ありてみづからをば、此はし舟に載せて放されけり、悲しく思ひ鬼の島へや行かんと、行きかた知らぬをりふし、只今人に逢ひまらせ候ふ、此世ならぬ御縁にてこそ候へ、されば虎狼も人をえんとこそし候へとて、さめぐと泣きにけり。浦島太郎もさすが岩木にあらざれば、あはれと思ひ綱をとりて引きよせにけり。

さて女房申しけるは、あはれわれらを本國へ送らせ給ひてたび候へかし、これにて棄てられまらせば、わらはは何處へ何となり候ふべき、すて給ひ候はど、海上にての物思ひも同じ事にてこそ候はめと、かきくどきさめぐと泣きければ、浦島太郎もあはれと思ひ、おなじ船に乗り沖の方へ漕ぎ出だす。かの女房のをしへに従ひて、はるか十日あまりの船路を送り、故里へぞ著きにける。さて船よりあがり、いかなる所やらんと思へば、白銀の築地をつきて、黄金の葺をならべ、門をたて、いかなる天上の住居も、これにはいかで勝るべき、此女房のすみ所詞にも及ばれず、中々申すもおろかなり。さて女



房の申しけるは、一樹の影に宿り、一河の流を汲むことも、皆これ他生の縁ぞかし、ましてやはるか波路を、遙々とおくらせ給ふ事、偏に他生の縁なれば、何かは苦しかるべき、わらはと夫婦の契をもなし給ひて、おなじ所にあかし暮らし候はんやと、こまぐと語りける。
浦島太郎申しけるは、ともかくも仰せに従ふべしとぞ申しける。さて偕老同穴のかたらひも浅からず、天にあらば比翼の鳥、地にあらば連理の枝とならんと、互に鴛鴦のちぎり浅からずして、明かし暮らさせ給ふ。さて女房申しけるは、これは龍宮城と申す所なり、此所に四方に四季の草木をあらはせり、入らせ給へ、見せ申さんとて、引具して出でにけり。まづ東の戸を

あけて見ければ、春のけしきと覺えて、梅や櫻の咲き亂れ、柳の糸も春風はるかぜに、なびく霞の
 うちよりも、黄鳥うぐいすの音も軒近く、いづれの木末こずえも花なれや。南面みなおもてをみてあれば、夏の景
 色とうちみえて、春をへだつる垣かき穂には、卯の花やまづ咲きぬらん、池のはちすは露か
 けて、汀涼みぎはしき漣さざなみに、水鳥みづどりあまた遊びけり。木々の梢も茂りつゝ、空に鳴きぬる蟬の
 聲、夕立過ぐる雲間より、聲たて通るほととぎす、鳴きて夏とは知らせけり。西は秋と
 うちみえて、四方よもの梢紅葉もみぢして、ませのうちなる白菊や、霧たちこもる野べのすゑ、まさ
 きが露をわけくゝて、聲ものすゞき鹿のねに、秋とのみこそ知られけれ。さて又北をなが
 むれば、冬の景色とうちみえて、四方よもの木末こずえも冬がれて、枯葉こずえにおける初霜や、山々や
 只白妙の雪にむもると谷の戸に、心ほそくも炭竈の煙にしるき賤しづがわざ、冬としらする
 景色かな。かくて面白き事どもに心を慰め、榮華に誇り、あかしくらし、年月をふるほ
 どに、三年みせになるは程もなし。浦島太郎申しけるは、我に三十日のいとまをたび候へ
 かし、故里ふるさとの父母ちちやまをみすて、かりそめに出でて、三年を送り候へば、父母の御事を心
 もとなく候へば、あひ奉りて心安くまゐり候はんと申しければ、女房仰せけるは、三と
 せが程は、鴛鴦うんわうの衾ふすまのしたに比翼の契をなし、片時かたときみえさせ給はぬさへ、とやあらんか

たち別れつゝ
 衣を載つと立ち
 別るとにかく
 きて見ん著と
 來とにかく

くやあらんと、心をつくし申せしに、今別れなば又いつの世にか逢ひまゐらせ候はんや、
 二世の縁と申せば、たとひ此世にてこそ夢ゆめ幻まぼろしの契にてさふらふとも、必ず來世にては
 一つはちすの縁と生まれさせおはしませとて、さめくゝと泣き給ひけり。又女房申しけ
 るは、今は何をか包みさふらふべき、みづからはこの龍宮城の龜にて候ふが、ゑじまが
 磯にて御身に命を助けられまゐらせ候ふ、其御恩報じ申さんとて、かく夫婦とはなり
 まゐらせて候ふ、又是はみづからがかたみに御覽じ候へとて、ひだりの脇よりいつくし
 きほこ篋はこを一つ取りいだし、相構へてこの篋を明けさせ給ふなとて渡しけり。
 會者あひやうり定離ぢやうりのならひとて、逢ふものは必ず別るゝとは知りながら、とどめ難くてかくなん、
 日かずへてかさねし夜半よひの旅衣たち別れつゝいつかきて見ん
 浦島返歌、
 別れゆくうはの空なるから衣ちぎり深くば又もきてみん
 さて浦島太郎は互に名残なごりをしみつゝ、かくてあるべき事ならねば、かたみの篋を取りも
 ちて、故郷ふるさとへこそかへりけれ。忘れもやらぬこしかた行末ゆくすゑの事ども思ひつゞけて、はる
 かの波路をかへるとて、浦島太郎かくなん、

浦島のゆくへ
ゆくへはゆかり
の意

かりそめに契りし人のおもかけを忘れもやらぬ身をいかゞせん
さて浦島は故郷へ歸りみてあれば、人跡絶えはてて、虎ふす野邊となりけり。浦島こ
れを見て、こはいかなる事やらんと思ひける。かたはらを見れば、柴の庵のありけるにた
ち、物いはんと言ひければ、内より八十ばかりの翁いであひ、誰にてわたり候ふぞと申せ
ば、浦島申しけるは、此所に浦島のゆくへは候はぬかと言ひければ、翁申すやう、いか
なる人にて候へば、浦島の行方をば御尋ね候ふやらん、不思議にこそ候へ、その浦島と
やらんは、はや七百年以前の事と申し傳へ候ふと申しければ、太郎大きに驚き、こはい
かなる事ぞとて、そのいはれをありのまよに語りければ、翁も不思議のおもひをなし、
涙を流し申しけるは、あれに見えて候ふふるき塚、ふるき石塔こそ、その人の廟所と申
し傳へてさふらへとて、指をさして教へける。

太郎は泣くく、草ふかく露しけき野邊をわけ、ふるき塚にまるり涙をながし、かくな
ん、

かりそめに出でにし跡を來てみれば虎ふす野邊となるぞかなしき
さて浦島太郎は一本の松の木陰にたちより、呆れはててぞるたりける。太郎思ふやう、龜

が與へしかたみの箱、あひかまへて明けさせ給ふと言ひけれども、今は何かせん、あ
けて見ばやと思ひ、見るこそ悔しかりけれ。此箱をあけて見れば、中より紫の雲三筋の
ほりけり。是をみれば二十四五のよはひも忽ち變りはてにける。

扱浦島は鶴になりて、虚空に飛びのほりける折、此浦島が年を龜がはからひとして、箱
の中にたよみ入れにけり、さてこそ七百年の齡を保ちけれ。明けて見るなとありしを
明けにけるこそ由なけれ。

君にあふ夜は浦島が玉手箱あけて悔しきわが涙かな

と歌にもよまれてこそ候へ。生あるもの、いづれも情を知らぬといふことなし。いはん
や人間の身として、恩をみて恩を知らぬは、木石にたとへたり。情ふかき夫婦は二世の
契と申すが、寔にあり難き事どもかな。浦島は鶴になり、蓬萊の山にあひをなす。龜は
甲に三せきのいわるをそなへ、萬代を経しとなり。扱こそめでたきためしにも鶴龜をこ
そ申し候へ。只人には情あれ、情のある人は行末めでたき由申し傳へたり。其のち浦島
太郎は丹後の國に浦島の明神と顯はれ、衆生濟度し給へり。龜も同じ所に神とあらはれ、
夫婦の明神となり給ふ。めでたかりけるためしなり。

あひをなす一愛
をなすか
三せきのいわる
一未詳

横
笛
草
紙

御
伽
草
紙

二
八
四

横笛草紙

中ごろの事にや、建禮門院の御時、刈藻かるも横笛よこぶえとて、二人の女房侍りけり。刈藻は平家
のとき、越前の前司もりつぐと最愛して下り給へり。今一人の横笛が行くへを尋ぬるに、
まことにあはれなる事どもなり。そのかたち、容顔美麗にしていつくしく、霞に匂ふ春
の花、風にみだると青柳のいとたをやかに、秋の月に異ならず。彼の頃都に聞え給ひし
浄海入道どのにうへこす人ぞなかりける。津の國兵庫に都を立て、後の世までのかたみ
と思召し、築島をぞつかれたる、殊に末代まで絶えずとかや。其御子小松殿の御うちに、
三條の齋藤、瀧口時頼たきぐちときよりとて、花やかなる男子おのこあり。小松殿の御つかひに女院の御所へ参り
つと、からがきの内へ入り、面廊めんらうにやすらひ、物申さんと窺ひたる所に、横笛櫻重ねの薄
衣に紅の袴のそばをとり、身を押しつけて出でたる形、をんけんとして楊貴妃李夫人も、
是にはいかで優るべきとぞ覺えける。さて瀧口文とり出だし、とく御返事御申しさふら

からがき唐垣
面廊―座敷へ行
く所の廊下

へとて、やがて懸想詞けしやうこじはをぞかけにける。

秋の田のかりそめぶしのみなりとも君が枕を見るよしもがな

横笛顔うちあかめてぞ受取り参らせける、御返事をばよの人してぞ出だしける。瀧口御所よりかへりて、心そらにあこがれて、寝もせず、起きもせず、いづれをか夢とも思ひ分けたるかたもなし。いかにと問へども言はずして、只寄り臥して見えければ、ある時乳母枕めのさにそひ給ひ、御心のやうを懇に御物語候へ、つやくさやうに只ならぬ御煩ひと見まゐらせてさふらふ、御心を残さず御物語さふらへと申しければ、瀧口打ちとけのたまふは、いつぞや女院によういんの御所へ御使に参り候ひし時、横笛とやらんを一目みしより、かた時も忘るとひまもなく、つゝ思ひはうづみ火の、けぶりは胸にせきあへず、いとど思ひはます鏡、かき曇りたるばかりなりと、懇に語りければ、その御事にてさふらはと、やすき御事にて候ふぞ、御文あそばし候へ、女院の御所へ常々みづからこそ参り候へ、御機嫌よき時に申さんとて、世にたのもしく申し侍りければ、瀧口あまりの嬉しさに、急ぎ起きあひ、紅くれなるの短冊櫻たみつけたるを引き重ね、墨すりながし筆をそめ、心のうちを書きつけ、ひき結びてぞ出だしける。めのと文給はりて、女院の御所へぞ参りける。瀧口

たみつけたる
彩色したる

立石一庭の置石

が心のうち譬へんかたぞ無かりける。めのと横笛にあひて、しばしは何となき物語などして、泉殿いづみどのの立石たていしの陰かげにて、おもしろき文をひろひ侍りしが、御身はいまだ若くましませども、源氏、狭衣、古今、萬葉、伊勢物語などあそばし給へば、言ことばの葉はの品をば知らせ給ふべし、あそばしわけて御聞せさふらへと云ひければ、横笛わがみの上とは知らずして、文こまぐと見給へば、筆のたてやうなど、由ある御文と見え侍りける。歌を見給へば、身はうき雲のごとくなり、梅の立枝たちえの鶯は、岸うつ波のふせいして、野中の清水、谷のうもれ木と書きとどめ、

人はいさ思ひもよらじ我戀のしたにこがれて燃ゆる心も
君ゆるゑに流す涙の露ほどもわれを思はど嬉しからまし

横笛申しけるは、葛の下葉とは、われ爰にありながら、千々ちぢぢに心のかよふ事なり、身はうき雲のやうぞとは、天あまのよそなる君故に、心は空にあこがる事なり、梅の立枝の鶯は、聲ふりたてて鳴くばかりの事なり、岸うつ波のふせいとは、心を碎くらん、野中の清水とは、人に問はれずひとりすむ事なり、埋火とは、こがれて物思ふの心なりとぞ語り給ひける。めのと此由聞き給ひて申しけるは、今は何をか隠し参らせん、横笛殿へ此

ふみたがへ踏
みに文をかく

文参りて候ふぞや、御返事とりて得させよと申す人の候ふなり、されば人間の習ひは、一樹のかけ一河のながれを汲む事も、他生の縁と申すなり、ひと村雨のあまやどり、いづれもこの世ならぬ縁とこそ聞き傳へ候へ、いつぞや小松殿の御使に参り給ひし瀧口殿の、君を一目見参らせ候ふより、御面影の忘れがたくて、遂に息の通ふばかりにて候へば、人をば人こそ助けさふらへ、されば小野の小町は、人の思ひのするとほり、後には浅ましき身となりたる由うけ給はる、殊更わりなきは此戀の道とこそ申し侍れ、中川の逢瀬はしらせ給はずとも、一筆はやすき御事なれば、御返事あそばし給へかした、こまごまと申し侍りければ、横笛思ひよらずとて、みやまぎのふみたがへたるにやとて、埋火の下にこがると聞くからに消えなん後ぞさびしからまし

とあそばし、引き結びて、よに恥しけに出だしたる有様、誠にうつくしさ何にたとへん方もなし。殿の戀ひけるもことわりとこそ思ひけれ。御返事取りて歸りけり。さて瀧口今やくと胸打ちさわぎ待ち給ふ心の中ぞ哀なる。さる程に乳母ひそかに立ちより、かの文取り出だして奉る。瀧口是を見て、うれしさは何に譬へんかたもなし。その後たびく文どもありて、あふせの中となり給ふ。小笹のな

あくり候へ誤
謬あるべし意味
通ぜず

けんねん一念の妄
想も五百生の間
其報を受く況や
思念著する時
は無量の長時
互りて其報を受

かの一節も契りそむれば、ある時は里へ出で、忍びて通ふ時もあり。又風の心ちといひなして、忍びくに通はれける。比翼連理の契をこめ、ことかりそめとは思へども、年來年月かさなりける。さる程に父のもちより此事を聞きて、瀧口を召してのたまふやう、汝をばいかなる人の聲にもなし、互にたよりとも成るならば、見る目も心やすかるべきに、世になし者にあひなれ、身をいたづらになす事こそ口惜しけれ、やがておくり候へと、たびたび教訓しけれども、用ひず通ひ給へれば、重ねて申されけるやうは、さのみ聞かれ給はずば、恨み申すべしとて、不興の使ありければ、瀧口此由聞くよりも、つくづく物を案ずるに、此世ばかりの夢ぞかし、かよる思ひをする事よ、東方朔が九千歳、西王母が一萬歳も、名のみ残りて跡もなし、浮世を物にたとふれば、岸の額の根なし草、入江の水に捨小舟、波にひかれて行くへなく、花のうへなる露よりも、あやふき人間の知らずむこそ拙けれ、大梵王の樂も、思へば夢のうちぞかし、か程かりなるあだし世に、思ふ人になぐさみてこそ、思ひ出とは成るべけれ、又いかに榮ふるとも、思はぬものはいかにせん、親の命を背かんと罪深かるべし、女の心をやぶれば、一念五百生けんねん無量劫の罪たるべし、是を菩提の心と思ひつゝ、殊更その夜は靜に横笛に打ちむかひ、いつ

へいしやう一平
生かそふるてそび
えての衍か

よりも陸じけなる風情にて、名残をしさはいかばかり。いたはしや横笛が、われが思ひ立つ事を、露ほども知るならば、いかに悲むべき物と、横笛が心のうち思ひそめつる始より、こよひの今に至るまで、思ひつゞけてよもすがら、包むとすれど涙川、袖のしがらみ堰きかねて、千夜を一夜とちぎる身の、たれにとてかは、鶏にはせうの夜深きに音をば鳴きぬらん、へいしやうのやもめ鳥のうかれ聲、耳にそふるて、夜もほのくくと明けければ、何となく出で立ちて、笛をばとり忘れたる風情にて、枕に置きて出でけるが、又立ち歸り一目見て、又よといひし言の葉は、何となくいひしかど、それが限の言葉なり。其後横笛、けふも過ぎ明日あすも空しく待ちかねて、暮るれば門かぢに立ち出でて、ふけゆく月ももろとも、只すごくとひとりゐるの、うらみの數ぞつもりける。扱も瀧口墨染に身をかへて、年はつもりて十九と申すに、嵯峨の奥に聞えたる、往生院と申すに閉ぢこもり、行ひすましてゐたりけり。瀧口が心のうち褒めぬ人こそなかりける。たまくと言こととふ物とては、嶺みねに木づたふ猿さるのこゑ、松の嵐、後枕にきけば鹿のこゑ、夜寒に弱る蟲の音も、笈の水の絶えくゝに、かけても習はぬ煙にそめなし、うき世の事を觀じつゝ、いと哀ぞ増りける。

何とたど笈の水の絶えくゝにおとづれきては袖ぬらすらん

と口ずさみて、よるひるの勤ひまなくこそ聞えける。さても横笛がかよる事をば夢にも知らず、空しき夜半よはのひとり寝も、思ひそめし初めより、野の末、山の奥、千尋の底に至るまで、かはらじとこそ契りしに、我ならず、いかなる人にあひ馴れて、いつしかすさみ給ふらん、うらめしやとて思ひしづみし所に、爰に人の申すやう、ちかき頃物の哀をとどめしは、三條齋藤左衛門の子息瀧口殿こそ、親の不興をかうぶりて遁世しけるが、行方ゆがたしらすと言ひければ、此由横笛聞きつけて、あな淺ましや、是は夢かやうつよかと、委しくこれを尋ぬるに、嵯峨の奥とやらんにおはしますと言ひければ、淺ましや、みづからがそれをば夢にも知らずして、恨み申すぞ悲しけれ、かくとだにも知りたらば、野のすゑ、山の奥なりとも、おなじ道に入るならば、蓮はらすの縁えんとなりて、さこそは嬉しからましと、天にあこがれ地にふし給ひしその風情、譬へんかたも無かりけり、餘りのおもひに堪へかねて、むざんや横笛、御所を忍び出で給ひ、あこがれ行く程に、乾いぬのかたと聞くなれば、内野に迷ひ出でて、南を遙にながむれば、内裏のあととおほしくて、羅城門は荒れはてて、礎いしずらばかりぞ残りける。又鳥羽院の西へ行き、春夏過ぎて秋の山、むらだ

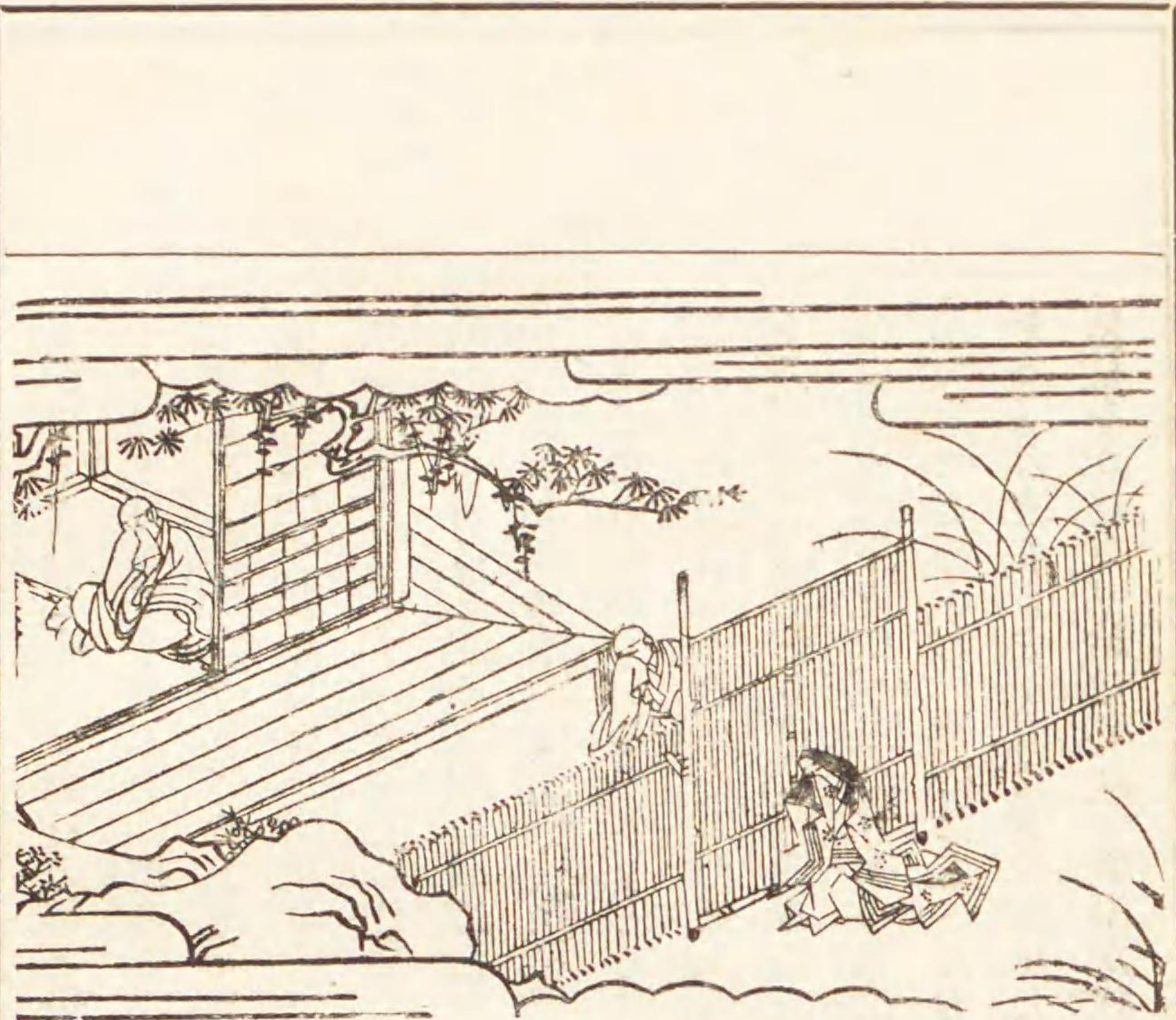
春を忘れぬ梅の花
道真吹く風
梅の花あるじ
なしとて春を忘
るな
三三三
とくせとなせ
(戸無瀬)の行か
ぎんの聲
琴の
聲の行か

たどろ／＼と
たどり
行か

つ松に吹く風も心細くぞ覺えける。北を遙にながむれば、春を忘れぬ梅の花、あるじ忘れぬ匂にて、思ひやられて玉銚の、道さだかに見えねども、ならびの里にかよりつよ、染殿の後御山莊ほうる院をさし過ぎて、つり殿三三三まんの嵐の、おのづからぎんの聲をしらべ、谷の水音すさまじく、とくせの瀧のながれも、筏をくだす大井川、るぜきの水を詠めつよ、かき集めたる藻鹽草、やるかたなきの餘りに、かくぞ詠じける。

せきあへぬ涙の川の早き瀬にあふより外のしがらみぞなき

といふ古歌を思ひ出でられける。たどろ／＼と行く程に、嵯峨の道をば知らずして北山に迷ひける。所々に立つけぶり、する消えはてて跡もなし。行きかふ人は絶えはてて、人を咎むる里の犬、聲澄む程に成りしかば、やう／＼迷ひ行く程に、法輪寺の橋うち渡り、其夜は虚空藏に参り通夜を申して、夜もすがら申すやうこそ哀なり。ねがはくば御佛納受まし／＼とて、夫婦の道をかなしみて、野にふし山に住むまでも、翼をかさね、契をなすとかや承り候へば、衆生を助けましまさば、飽かで別れし瀧口を、一目みせてたび給へと涙をながし、夜もすがら少しまどろむ所に、八十ばかりの老僧、墨染の衣に香の袈裟をかけさせ給ひしが、横笛が伏したる枕にたちより、北の方往生院にさふらへど、



横笛草紙

今生の對面は思ひもよらぬ事と、懇ろにのたまひ、かき消すやうに失せたまふ。夢打ちさめて横笛は、涙をながし申すやう、もとよりも叶はぬ事は是非もなし、さりながら叶はぬ事を叶へさせ給ふこそ、神や佛の誓なりと、泣くより外の事はなし。今ははや頼みもつきし事なれど、夜もほの／＼と明けければ、虚空藏をふし拜み、たどりたどりと行くほどに、道行く人にあひ給ひ、往生院とやらんはいづくの方と問ひければ、是より乾のかたに見えて、住みあらしたる寺あり、草茫茫と露ふかすと、こまやかにこそ教へけれ。往生院と聞くからに、さきへとばかり急ぎけり。やう／＼尋ね行く程に、教へのごとく、住みあらしたる寺あり。あたりをめぐりやすらひ、便

もがなと思ひし所に、瀧口の聲と覺しくて、かくこそ詠じ給ひける。

ひとりねて今宵もあけぬ今こんとたのまばこそは待ちもうらみんと詠じて、鉦打ち鳴らし、やゝありて法華經の提婆品を高聲に讀み給へば、瀧口と聞くか
らに、やがて消え入るばかりに思ひしかど、しばし心をとりなほし、よろ／＼と歩みよ
り、柴の扉をほと／＼と叩きければ、内より下の僧をいだし、いづくよりと問ひければ、横
笛と申す者にて候ふ、瀧口殿に物申さんと申す。横笛と聞くよりも、胸打ちさわぎ、障
子のひまより見給へば、裾は露、袖は涙にしをれつゝ、誠に尋ねわびたると打見えて、柴
の戸に立ちそひて、しづ／＼としたる有様なり。いにしへの有様になほ勝りてぞ覺えけ
る。見れば目もくれ、心も消え入るばかりなり。いづれを夢とも思ひわかず、又思ふや
うは、此上ははしり出で、變る姿を一目みせばやとは思へども、心に心を引きとどめ、逢
はぬ恨みは中々に、二たび物を思はせん、むざんや、横笛が三年ばかりの情を忍びて、
尋ねきたる心ざし、何にたとへん方もなく、袂を顔におしあてて、泣くより外の事ぞな
き。下の僧申すやう、此寺へは女人のまるらぬ所なり、そのうへ瀧口とやらんは、聞き
もならはぬ人ぞかし、はやく／＼歸り給へとて、柴の編戸をおし立てて、其後音もせざり

神鳴も思ふ中云
云一古今「天の
原ふみとゞるか
し鳴る神も思ふ
中をばさくるも
のかは」

けり。横笛是を見給ひて、情なの有様や、昔にかはらで今も契らんといはどこそ、變り
し姿只一目みせさせ給へと、時雨にぬれぬ松だにも、又色かはる事もあり、火の中水の
底までも變らじとこそ思ひしに、早くも變る心かな、ありし情をかけよと言はどこそ、
みづからも共に様をかへ、おなじ庵室にすまひして、御身は花を摘むならば、みづから
は水をむすび、一蓮の縁とならばやと思ひ、是まで尋ねてまゐり、夫妻は二世の契と
聞きしかど、今生の對面だに叶ふまじきか、あさましや、親の不興をかうぶりて、かやう
にならせ給へば、みづからを深く恨みさせ給ふもことわりなり、思へば又みづからは、
御身のゑに深き思ひにしづみ、たがひに思ひ深かるべしと、涙をながし申すやう、さて
もいにしへは雲をうごかす神鳴も、思ふ中をばよもさけじと、契りつる言の葉は、今の
ごとくに忘れず、睦言の袖のうつり香は、今もかはらず匂へども、いつのまにかは變り
はて、うたての瀧口やとて、聲もをします泣きければ、瀧口是を見て、あまり歎くもい
たはし、せめては聲なりとも聞かせばやと、思ひてかくなん、
あづさ弓そるをうらみと思ふなよまことの道に入るぞうれしき
とありければ、瀧口が聲と聞くよりも、あまりの嬉しさに、横笛とりあへず、

梓弓そるを何しにうらむべき引きとむべき道にあらねばと、泣くく打ちながめ、悶えこがれて泣きるたり。

今は頼みも盡きはてて、かくてことに在るべき身ならねば、泣くく迷ひ行くほどに、又立ちかへり恨しげに見て、扱も瀧口なさけなく、みづからを何になれとて、かほどに捨てはてけるぞと、うたてやと思へば、いとどあとへひく心地して、いそぐ心はさよがにの、絲より細きわが身かな、蛇の貝の片思ひ、人はかほどにつれなきを思ふも苦し、とにかくにつれなき命あればこそ、飽かぬ別れも戀しけれと、只一すぢに思ひきり、大井川の汀なる岩間づたひの細路を三町ばかり行きすぎて、千鳥が淵といふ所に、うへなる衣を木の枝にかけ、踏み馴らしたる草履をば岩の上にぬぎすてて、嵐の山のおと、友よぶ千鳥横笛が、いまを最後の泣く聲は、いづれともなき哀かな。むざんや、横笛西にむかひて手をあはせ、南無西方彌陀如來、あかで別れし瀧口と、同じ臺に迎へさせ給へと、是を最期の詞にて、終に身をこそ投げにける。惜しかるべきよはひかな、年十七と申すに、終に空しくなりにけり。かよりける所に、つま木とる山人、川向ひにてあれよくとよばはれど、程遠ければ終にはかなくなりけり。かくて山人は、瀧口の庵室の前を

とほるとて、友人にかたるやう、近頃あはれなる事をこそ只今みて候へ、大井川へ十七八の女房の身を投げ給へるを、あれよくと言ひつれど、川よりこなたを通る事なれば、あはれさ申すばかりなしと、こまぐと語りければ、友人是をきよ、あはれなる事かなと、泪をながし通りける。瀧口是をきよつけて、胸うちさわぎ、もし横笛なるらんと、取る物も取りあへず、本尊首にかけ、しもの僧一人めしぐして、身の憂きかすは大井川、涙のみちはかき暮れて、いそぐとすれど程遠く、泣くくはしり行くほどに、法輪寺の橋になりしかば、峯の梢に薄衣かより、嵐にひらめけば、われを招ぐかと、おのづからいとどあはれぞ勝りつよ、やうく大井川につき、かなたこなたと尋ぬるに、川の末に流れとまりてありつるが、昔のかたちは失せはてて、空しき死骸をとりいだし、泣くよりほかの事はなし。さても今朝往生院にて、柴の編戸をへだてつよ、此人は外、われは内にて、悶えこがれしありさまを、今の姿にくらぶれば、物のかすにてかすならず。あだなるも、つれなきも命、うきに限らぬならひかや。いかなる過去の因果にて、かよる思ひをするやらん。瀧口あまりの悲しさに、膝のうへにかきのせて、無慚のものの有様や、かくあるべしと知りたらば、などかは見もし、見えざらん、さこそは草の陰にて恨めし

軒をてらざる
軒を照らさる
の意

とおほすらん、よし恨みとも思ふなよ、わづかの夢の世に、たれか永らへはつべきぞ、ことさら中にも若きが先立つあはれさよ、又かやうにならせ給ふも、此世ならぬ因果ぞとおほしめし、今こそうらみの淵に沈むとも、わが命のあらんかぎりは、後世をばとぶらひ申すべし、さらぬだに女人は五障三しよにえらばれて、罪ふかし、かたぶく日は中空にかへる事なし、人はさらに死して再びかへらず、さぞ苦みの思ひやられていたはしや、さてもいにしへの姿はつきはてて、軒をてらざる夕顔の花の色こそ悲しけれ。かくてあるべきにあらざれば、程近き鳥部野の邊にて、ゆふべの煙となしはてて、骨をばひろひ、もとの庵室にかへり、いよく道心おこしつと、なほくとぶらひ給ひけり。さるほどに都に此事かくれなし、小松殿も女院も、あはれと思しめし、やさしき者のふるまひや、人の契をなすならば、かやうにこそあるべけれとて、女院を初めまるらせ、聞く人々も袖をしほらぬものは無し。小松殿の御大臣、御所へ仰せられけるやうは、瀧口を召しだし、いかなる寺をも御造り候て、御とらせ候へとありければ、瀧口きよて、都近く住めばこそ、かやうの事をば聞き給へ、仰せなきその先にとて、横笛がためにとて、高野山に上りつと、案じすましてるたりけり。

酒 吞 童 子

酒 吞 童 子

むかし我朝の事なるに、天地開けしこのかたは神國といひながら、又は佛法盛さかんにて、人皇の始めより延喜の帝みかどに至るまで、王法ともに備はり、政事まつりごとすなほにして、民をも憐み給ふこと、堯舜の御代とても、是にはいかで勝るべき。然れども世の中に不思議の事の出できたり、丹波の國大江山には鬼神きじんの住みて、日暮るれば近國他國の者までも、數をしらず執りて行く。都のうちにてとる人は、みめよき女房の十七八を頭かしらとして、是をも數多とりて行く。いづれもあはれは劣らねども、こよにあはれをとどめしは、院に宮みやづき奉る池田の中納言にたかとして、御おほえめでたくし、寶は内に満ちくゝて、富貴ふつきの家にてましますが、ひとり姫を持ち給ふ。三十二相の形をうけ、美人の姫君を見聞く人、心をかけぬ者はなし。二人ふたりの親の御寵愛斜ならず。かほどにやさしき姫君を、或日の暮方のことなるに、行きかた知らず失せ給ふ。父くにたかを初めとし、北の御方の御歎き、

宮みやづきーかしづ
きの意

お乳や乳母めのとや女房たち、その外ありあふ者までも、上を下へとかへしけり。中納言は餘りのことの悲さに、左近きこんを召され、いかに左近、うけ給はれ、此程都に隠れなき、村岡のまさときとて、名譽の博士のありと聞く、つれて参れと仰せけるに、うけ給はると申して、つれて御所へぞまゐりける。いたはしや、父くにたかも御臺所みだいどころも、恥も人目も入らばこそ、博士に對面めされつゝ、いかにまさときうけ給はれ、それ人のならひにて、五人十人ある子さへ、いづれおろかは無きならひ、みづからは只ひとりの姫を、昨夕けつべのくれれほどに、行きがた知らず見失ふ、ことし十三寅の年、生れてよりもこのかたは、椽えんよ下へおるよさへ、お乳やめのとのつき添ひて、荒き風をもいとひしに、まよひ變化へんげの業ならば、みづからをも諸共に、などや連れては行かざりしと、袂たもとを顔におしあてて、トひ給へ、博士とて、料足萬正博士が前に積ませつゝ、姫ひめが行方ゆくへを知るならば、數の寶をえさすべし、よくくトひ給ふべし。もとより博士は名人にて、一つの巻物とりいだし、件の體ていを見渡し横手をちやうどうち、姫君ひめぎみの御行方おんゆくへは、丹波の國大江山の鬼神が業にて候ふなり、御命には子細なし、猶某が方便にて、延命と祈らん、何の疑ひ有るべきぞ、此卜形このうらかたをよく見るに、觀世音に御祈誓あり、誕生なりしその願ねがひいまだ成就せぬ御咎めと

まよひ―迷はかし神

見えてあり、觀音へ御まゐりあり、よきに御祈誓ましまさば、姫君ひめぎみ左右なく都にかへらせ給はんと、見透すやうに占ひて、博士はわが家やにかへりけり。中納言も御臺所も聞召し、これは夢かや現かやと歎かせ給ふ御有様、何に譬へんかたもなし。中納言殿はおつる涙の隙よりも、急ぎ内裏へ奏聞ありければ、帝叡覽みかみましくて、公卿大臣くわうしやうだいじん集りて、色々詮議ましくなり。その中に關白殿進み出でて、嵯峨の天皇の御代の時、是に似たりし事有りしに、弘法大師の封じこめ、國土をさつて子細なし、さりながら今こゝに賴光らいくわうを召されつゝ、鬼神うてよとの給はど、定光じやうくわう、季武すゑたけ、綱つな、金時きんとき、保昌ほしやうをはじめとし、此人々には鬼神も怖ぢをのよきて、恐れをなすとうけ給はる。此者共に仰せつけられ候へかし。帝みかみけにもと思召し、賴光らいくわうを召されける。賴光らいくわう勅ちゆうをうけ給はり、急ぎ參内仕りければ、帝叡覽みかみましくて、いかに賴光らいくわううけ給はれ、丹波の國大江山には鬼神が住みて仇をなす、わが國なれば卒土のうち、いづくに鬼神の住むべきぞ、況やまぢかきあたりにて、人を悩ますいはれなし、平けよとの宣旨なり。賴光らいくわう勅命ちゆうめいうけ給はり、天晴あつはれ大事の宣旨かな、鬼神は變化へんげの物なれば、討手向ふと知るならば、塵や木の葉と身を變じ、我等凡夫の眼まなこにて見つけん事は難かるべし、さりながら勅をばいかで背くべ

賴光―訓誘兩様なるは原本のままなり

き、急ぎわが家に歸りつゝ、人々を召しよせて、われらが力に叶ふまじ、佛神に祈をか
 け、神の力をたのむべし。尤も然るべしとて、頼光と保昌は八幡に社參ありければ、綱
 金時は住吉へ、定光と季武は熊野へ參籠仕り、さまざまの御立願。もとより佛法神國に
 て、神も納受ましゝて、いづれもあらたに御利生あり、喜びこれにしかじとて、皆々
 わが家に歸りつゝ、一つ所に集りて、色々詮議まちゝなり。

頼光仰せけるやうは、この度は人數多にて叶ふまじ、以上六人が山伏に様をかへ、山路に
 通ふ風情にて、丹波の國鬼が城へ尋ね行き、栖だにも知るならば、いかにも武略をめぐら
 して、討つべきことは易かるべし、面々笈を拵へて具足冑を入れ給へ、人々いかにとあり
 ければ、うけ給はると申して、面々笈を拵へける。まづ頼光の笈には、らんでん鎖と申
 して緋威の御鏡、同じ色の五枚冑に、獅子王とこそ申しける、ちすると申しと劍二尺一
 寸候ひしを、笈の中にぞ入れ給ふ。保昌は紫をどしの腹巻に、同じ毛の冑を添へ、岩切
 と申して二尺ありける小薙刀、二重に金を延べつけて、三束あまり振ぢ切りて、笈の中
 へぞ入れ給ふ。綱は萌黃の腹巻に同じけの冑をそへ、鬼切と云ふ太刀を笈の中にぞ入れ
 給ふ。定光と季武、金時も、思ひゝの腹巻におなじけの冑をそへ、いづれも劣らぬ劍

らんでん鎖一未
 詳

つけだけ一附木
 あまがみ一雨を
 防ぐ油紙

破旬一魔の王の
 名、殺者と譯す

覺束なし一原本
 無腦の字をあて
 たり

を笈の中にぞ入れにける。さよへと名づけて酒を持ち、火打、つけだけ、あまがみを笈の
 うへに取りつけて、思ひゝのうち刀、兜巾、鈴懸、法螺の貝、金剛杖をつきつれて、日本
 國の神佛に深く祈誓を申しつゝ、都を出でて丹波の國へと急がせ給ふ。此人々の有様、い
 かなる天魔破旬も恐れをなすべきと覺えたり。いそがせ給へば、程もなく丹波の國に聞
 えたる大江山にぞつき給ふ。柴刈り人に行き逢うて、頼光仰せけるやうは、いかに山人、
 此國の千丈嶽はいづくぞや、鬼の岩屋を懇に教へてたべとぞ仰せける。山人この由承
 り、此峰をあなたへ越えさせ給ひつゝ、又谷峰のあなたこそ、鬼の栖と申して、人間更
 に行くことなしと語りけり。頼光聞召し、さらば此峰越えやとて、谷よ峰よと分け上り、
 とある岩穴見給へば、柴の庵の其中に翁三人ありけるを、頼光此由御覽じて、いかなる
 人にてましますぞ、覺束なしと仰せける。翁答へてせ仰ける、我々はまよひ變化の物に
 てなし、一人は津の國のかげの郡の者にてあり、一人は紀の國のおとなし里の者にてあ
 り、今一人は京近き山城の者にてあり、此山のあなたなる酒呑童子といふ鬼に、妻子を
 とられ無念さに、その敵をも討たため、この頃こゝに來りたり、客僧たちをよく見る
 に、常の人にてましますさず、勅説を蒙りて、酒呑童子を亡ほせとの御使と見えてあり、

先達一纏導

此三人の翁こそ妻子をとられて候へば、是非先達を申すべし、笈をもおろし心とけ、疲
 れをやすめ給ふべし、客僧達とぞ申されける。頼光此由聞召し、仰せの如く我々は山路
 に踏み迷ひくたびれて候へば、さらば疲れを休めんと、笈どもをおろし置き、さよへの
 酒をとり出だし、三人の人々に御酒きこしめせとて參らせける。翁仰せけるやうは、い
 かにもして忍び入らせ給ふべし、かの鬼常に酒をのむ、その名をよそへて酒呑童子と名
 付けたり、酒をもち酔ひて臥したる時は、前後もしらず候ふなり、此三人の翁こそこゝに
 不思議の酒をもつ、その名をじんべんきどくしゆといひ、神の方便鬼の毒酒と讀む文字
 ぞかし、この酒鬼が呑むならば、飛行自在の力も失せ、切るともつくとも知るまじき、
 御身たちが此酒を飲めば、かへつて藥となる、さてこそじんべんきどく酒とは、後の世
 までも申すべし、なほく奇特を見すべしとて、星冑をとり出だし、御身は是を著て、
 鬼神が首を切り給へ、何の子細もあるまじきと、件の酒を相添へて、頼光にぞ下されけ
 る。六人の人々は此由を御覽じて、さては三社の御神のこれまで現じましますかと、
 感涙肝に銘じつゝ、かたじけなしとも中々に言葉にもいひがたし。その時翁は岩屋を立
 ち出で、なほく先達申さんと、千丈嶽を登りつゝ、暗き岩穴十丈ばかりくどり出で、

じんべんきどくしゆ一神變奇特を神使鬼毒ともどりたるなり

みつぐべし助カする意

細谷川に出で給ひ、翁仰せけるやうは、此河上を上らせ給ひて御覽ぜよ、十七八なる上藤
 のおはすべし、くはしく逢ひて問ひ給へ、鬼神の討つべきその時は、なほくわれらも
 みつぐべし、住吉、八幡、熊野の神これまで現じ來るとて、かき消すやうに失せ給ふ。
 六人の人々は此由を見給ひて、三社の神の歸らせ給ふ御あとを伏し拜み給ひつゝ、教へ
 にまかせて河上をのほらせ給ひて見給へば、をしへの如く十七八の上藤の、血のつきた
 るものを洗ふとて、涙と共にまします、頼光此由御覽じて、いかなるものぞと問はせ
 給へば、姫君此由聞召し、さん候ふ、みづからは都の者にて候ふが、ある夜鬼神につか
 まれて、是までまるりて候ふが、戀しきふたりの父母や、お乳やめのとに逢ひもせで、
 かく淺ましき姿をば、あはれと思召せやとて、只さめんと泣き給ふ。おつる涙のひま
 よりも、あら淺ましや、此所は鬼の岩屋と申して、人間更に来る事なし、客僧等は是ま
 で來らせ給ふぞや、いかにもしてみづからを都へ歸してたび給へと、仰せもあへず只さ
 めんと泣き給ふ。頼光此由聞召し、御身は都にて誰の御子と問はせ給へば、さん候ふ、
 みづからは花園の中納言のひとり姫にて有りけるが、われらばかりに限らず、十餘人お
 はします、此程池田の中納言にたかの姫君も、捕られてこれにまします、愛してお



きて其後は、身のうちより血を搾り、酒となづけて血をば呑み、肴と名づけてしむらなを、剡ぎ喰はるゝ悲みを、側にて見るもあはれなり、堀河の中納言の姫君も、今朝血を搾られ給ひしぞや、そのかたびらをわれゝが、洗ふことこそ悲しけれ、まことに物憂き事ぞとて、さめざめと泣き給へば、鬼を欺く人々も、けにことわりとて、共に涙にむせび給ふ。頼光仰せけるやうは、鬼をたやすく平け、御身達を悉く都へ返さん其爲に、是まで尋ね参りたり、鬼の栖を懇にかたらせ給へと有りければ、姫君此山聞召し、是は夢かや現かや、其義ならば語り申さんと、此河上をのほらせ給ひて御覽せよ、くろがねの築地を築き、くろがねの門をたて、口には

四節一佛教にて
結夏、解夏、冬至、
元旦をいふ

らう一廊か

愚人夏の蟲云々
一語

鬼が集りて番をしてこそ居るべけれ、いかにもして門より内へ忍び入りて御覽せよ、瑠璃の宮殿玉をたれ、藁を竝べて建て置きたり、四節の四季をまなびつゝ、鐵の御所と名づけて、くろがねにて館をたて、よるになればその内にて、われらを集めて愛せさせ、足手をさすらせ、起き臥し申すが、らうの口には眷族どもにほしくま童子、熊童子、虎熊童子、かね童子、四天王と名づけて番をさせておきける、彼ら四人の力の程は、いか程とも譬へん方なしと聞く、酒呑童子がその姿、色うす赤くせい高く、髪はかぶろにおし亂し、晝の間は人なれども、夜にもなれば恐しき、そのたけ一丈餘にして、譬へていはん方もなし、かの鬼常に酒を呑む、ゑひて伏したる時なれば、わが身の失するも知らぬなり、いかにもして忍び入り、酒呑童子に酒をもち、ゑひて臥したる所を見て、思ひのまよにうち給へ、鬼神は天命つきはてて、つひには討たれ申すべし、いかにも才覺おはしませ、客僧たちとぞ仰せける。さて六人の人々は、姫君の教へにまかせて、河上をのほらせ給へば、程もなく鐵の門につく。番の鬼どもこれを見て、こは何者ぞめづらしや、此ほど人を喰はずして、人を戀ひける折ふしに、愚人夏の蟲、飛んで火に入るとは、今こそ思ひ知られたり、いざや引き裂きくはんとて、われもくゝと勇みける。その中に鬼ひと

せきがん一石殿
か

ごき、ぜんき、お
つき一後鬼、前
鬼、悪鬼か

り申しけるは、あわてて事を仕損ずな、かくめづらしき肴をば、わたくしにては叶ふまじ、上へことわり、御意次第に引きさき食はんとぞ申しける。けに尤もとて、それより奥をさしてまゐりつゝ、此由かくといひければ、童子此由聞くよりも、こは不思議なる次第かな、何さま對面申すべし、こなたへ請じ申せとありければ、六人の人々を椽の上にご請じける。其後醒き風吹き來り、雷電いなづま頻にして、前後を忘するその中に、色うす赤くせい高く、髪はかぶろにおし亂し、大格子のおり物に、紅の袴を著て、鐵杖を杖につき、あたりを睨んで立つたるは、身の毛もよだつばかりなり。童子申しけるやう、わが住む山は常ならず、せきがん峨々と聳えつゝ、谷深くして道もなし、天をかける翅、地を走る獸まで、道が無ければ來る事なし、況や面々人として、天をかけりて來るかや、語れ、聞かんと申しける。

頼光は聞召し、われらが行の習ひにて、役の行者と申せし人、路無き山をふみわけて、ごき、ぜんき、あつきとて鬼神のありしに行きあうて、呪文を授け餌食を與へ、今に絶えせぬ年々に餌食をあたへ憐むなり、此客僧も流を汲む、本國は出羽の羽黒の者なりしが、大峯山に年ごもり、やうく春にもなりければ、都一見そのために、ゆふべ夜を

もたせの一持參
したる

こめ立ち出づるが、せんのだうより踏み迷ひ、道あるやうに心えて、これまで來りて候ふなり。童子の御目にかゝる事、ひとへに役の行者の御引合せ、何より以て嬉しう候ふ、一樹の蔭一河の流を汲む事も、皆これ他生の縁と聞く、御宿を少しかし給へ、御酒をもたせて候へば、恐れながら童子へも御しゆ一つ申さん、我等も是にて御酒給はり、終夜酒盛せんとぞ申されける。童子は此由聞くよりも、さては苦しうなき人かと、椽より上へ呼びあけて、猶も心を知らんため、童子申されけるやうは、もたせの御しゆのありと聞く、われらも又客僧達にも御しゆ一つ申さん、それくと有りければ、うけ給はると申して、酒と名づけて血を搾り、鉢子に入れて盃そへ、童子が前にぞ置きにける。童子盃とりあけて、頼光にこそさしにけれ。頼光盃とりあけて、これもさらりと乾されけり。酒呑童子が是を見て、その盃を次へといふ。うけ給はるとて綱にさす。綱も盃一つうけ、さらりとこそは乾しにける。童子申しけるやうは、肴は無きかとありければ、うけ給はると申して、今切りたるとおほしくて、肘と股とを板にする、童子が前に置きにける。童子此由見るよりも、それこしらへて參らせよ。うけ給はるとて立つ所を、頼光は御覽じて、某こしらへ給はらんと、腰の差添するりとぬき、截四五寸おし切りて、舌打ちし

くろく空と食ふ
とにかく

鬼神に横道なし
一語

てこそまゐりけれ。綱は此由見るよりも、御心ざしのありがたさを、某も給はらんと、
 これも四五寸おし切りて、うまさうにこそ食はれける。童子此由みるよりも、客僧達は
 いかなる山に住み馴れて、かくめづらしき酒肴をまゐる事こそ不思議なれ。頼光は聞召
 し、御不審は御ことわりなり、われらが行のならひにて、慈悲とて給はる物あれば、た
 とひ心にうけずとも、いやといふ事更になし、殊にかやうの酒肴をくうに浮みしいはれ
 あり、討つも討たるよも夢の中、即神即佛是なるゆゑ、くうに二つの味ひなし、われら
 もともに浮ぶなり、あらかたじけなと禮すれば、鬼神に横道なきとかや、童子も却りて
 頼光に、禮拜するこそ嬉しけれ。童子申されけるやうは、心に染まぬ酒肴を參らせける
 こそ悲しけれ、餘の客僧へは無益とて、心とけてぞ見えにける。其時頼光座敷を立ち、
 件の酒をとり出だし、これは又都よりの持參の酒にて候へば、恐れながら童子へも御
 しゆ一つまゐらせん、御こゝろみの爲にとて、頼光一つさらりとほし、酒呑童子にさ
 れける。童子盃うけとり、これもさらりと乾されたり。けにも神便ありがたや、不思議
 の酒の事なれば、その味甘露の如くにて、心も詞もおよばれず。斜ならず喜びて、わ
 が最愛の女あり、よび出だして吞ませんとて、くにたかの姫君と、花園の姫君を呼び出

わがたつ袖一新
古今傳教、比叡
山の中堂建立の
とき「阿耨多羅
三藐三菩提の佛
たちわが立つ袖
に冥加あらせた
まへし

まの前一目の前

大悪人一大勇士
の意

だし、座敷におく。頼光此由御覽じて、これは又都よりの上臈たちに參らせんと、お酌
 にこそは立たれける。童子あまりの嬉しさに、ゑひほれ申しけるやうは、それがしが古
 をかたりて聞かせ申すべし、本國は越後の者、山寺そだちの兒なりしが、法師に妬ある
 により、數多の法師を刺殺し、その夜に比叡の山につき、我が住む山ぞと思ひしに、傳
 教といふ法師、佛たちをかたらひて、わがたつ袖とて追ひ出だす、力及ばず山をいで、
 又此峰に住みしとき、弘法大師といふえせもの封じて、こゝをも追ひいだせば力およば
 ぬ處に、今はさやうの法師もなし、高野の山に入定す、今又こゝに立ち歸り、何の子細
 も候はず、都よりもわがほしき上臈達を召しよせて、思ひのまゝに召しつかひ、座敷の
 體を御覽ぜよ、瑠璃の宮殿玉をたれ、薨をならべ立ておきて、萬木千草まの前に、春か
 と思へば夏もあり、秋かと思へば冬もあり、かゝる座敷のその内に、鐵の御所とて、く
 ろがねにて館をたて、よるにもなればその内にて女房たちを集めおき、足手をさすらせ
 起き臥し申すが、いかなる諸天王の身なりとも、これにはいかで勝るべき、されども心
 にかゝるは、都の中に隠れなき頼光と申して、大悪人のつはものなり、力は日本になら
 びなし、又頼光が郎黨に、定光、季武、金時、綱、保昌、いづれも文武二道のつはもの

なり、これら六人の者どもこそ心にかゝり候ふなり、それをいかにと申すに、過ぎつる春の事なるに、某が召しつかふ茨木童子といふ鬼を、都へ使にのほせしとき、七條の堀河にて彼の綱に渡りあふ、茨木、やがて心得て、女の姿に様をかへ、綱があたり立ちよ、髻むづと執り、つかんで來んとせしところを、綱此よし見るよりも、三尺五寸するりと抜き、茨木がかた腕を水もたまらず打ちおとす、やうく武略をめぐらして、かひなを取りかへし、今は子細も候はず、彼奴ばらがむつかしさに、われは都に行くことなし。其後酒呑童子は頼光の御姿を目をも放さず打ち詠め、さても不思議の人々や、御身が眼をよく見るに、頼光にておはします、さてその次は茨木が肘を切りし綱にてあり、この四人の人々は、定光、季武、公時や、保昌とこそ覺えたり、われらが見る目は違ふまじ、いぶしう候ふ、お立ちあれ、これにありあふ鬼どもよ、心ゆるして怪我するな、われらもまかり立つぞとて、色をかへてぞひしめきける。頼光此由御覽じて、こよを陳じ損ずるならば、事の大事と思しめし、元より文武二道の人なれば、少しも騒がぬけしきにて、からくと打ちわらひ、さても嬉しの仰せかな、日本一のつはものに山伏共が似たるとや、その頼光も、季武も、名を聞くだにも初めにて、まして目に見る事はなし、

いぶしう一ぶ
せくの意か
陳じ損ずる一辯
解しぞこなふ

はんげのもん
半偈の文

鳩の秤一帝釋
が釋迦を試みん
とて毗首羯磨を
は鳩に毗首羯磨
は鳩に毗首羯磨
は鳩に毗首羯磨
の追ひに鳩が釋
腋下に鳩が釋迦

只今仰せを能く聞けば、惡逆無道の人ときく、あら勿體なや、あさましや、さやうの人には似るもいや、われらが行のならひととして、物の命を助けんため、山路を家とする事も、餓ゑたる虎狼に身をあたへ、有情非情を救はんため、釋迦牟尼如來の古はしうふうと名をつけて、諸國を修行に出で給ふ、或時山路を通らせ給へば、深き谷の底よりも何者なるとは知らねども、諸行無常と唱へければ、谷に下りて御覽するに、九足八面の鬼神とて、かしらは八つに足九つ、さも恐しき鬼にぞある、しうふう彼に近づきて、只今唱へしはんげのもん、われに授けよかすとある、鬼神答へて云ふやうは、授けんことは易けれど、饑にのぞみて力なし、人の身をだに服するならば、唱へんところ申しければ、しうふう此由聞召し、それこそやすき事なるべし、残りの文を唱ふるならば、汝が餌食に某成らんと仰せければ、鬼神斜によるこび、残りし文をぞ唱へける。是生滅法生滅滅已寂滅爲樂と唱へければ、しうふう是をさづかりて、あらありがたやと禮しつゝ、鬼神が口に入らせ給へば、則ち菩薩と現れ、鬼神はすなはち毗盧遮那佛、しうふうは釋迦佛なり、又ある時はこれやこの、鳩の秤に身をかけしも、皆これ生けるを助けんため、是にありあふ山伏も同じ行にて候へば、文を一つさづけつゝ、早く命をめさるべし、露

たるを返せといひければ釋迦は鳩の代にものがかげし事をいふ本地忘れず一本性忘れずの意
つはい強いか

ちり程も惜しからじと、さも有りさうにの給へば、童子はこれにたばかられ、おもての色をなほしつよ、仰せを聞けばありがたや、彼の奴原が是まではよも來らじとは思へども、常に心にかよるゆるゑ、ゑひても本地忘れずとて、御持參の酒にゑひ、只繰言とおほしめせ、赤きは酒の咎ぞかし、鬼とな思しめされそよ、われもそなたの御姿打ち見にはおそろしけれど、馴れてつほいは山伏と、歌ひ奏でて心うちとけ、さしうけさしうけ呑む程に、これぞ神使鬼毒の酒なれば、五臟六腑にしみわたり、心も姿もうち亂れ、いかにありあふ鬼どもよ、かくめづらしき御しゆ一つ御前にて下されて、客僧達を慰めよ、一さし舞へとぞ仰せける。うけ給はると起つところを、頼光此由御覽じて、まづ御しゆ一つ申さんとて、並び居たりし鬼どもに件の酒を盛りたまへば、五臟六腑にしみわたり、前後もさらに辨へず。されどもその中に、いしくま童子はずんと立つて舞うたりける。都よりいかなる人の迷ひ來て、酒肴のかざしとはなる、おもしろやと、おし返し二三べんこそは奏でける。此心を能く聞けば、是にありける山伏どもを、酒や肴になすべしとの歌の心と覺えたり。やがて頼光お酌にこそは立たれける。童子がうけたる盃を、綱は此由見るよりも、ずんと立つてぞ舞うたりける。年をへし鬼の岩屋に春の來て、風やさそひ

代官一名代

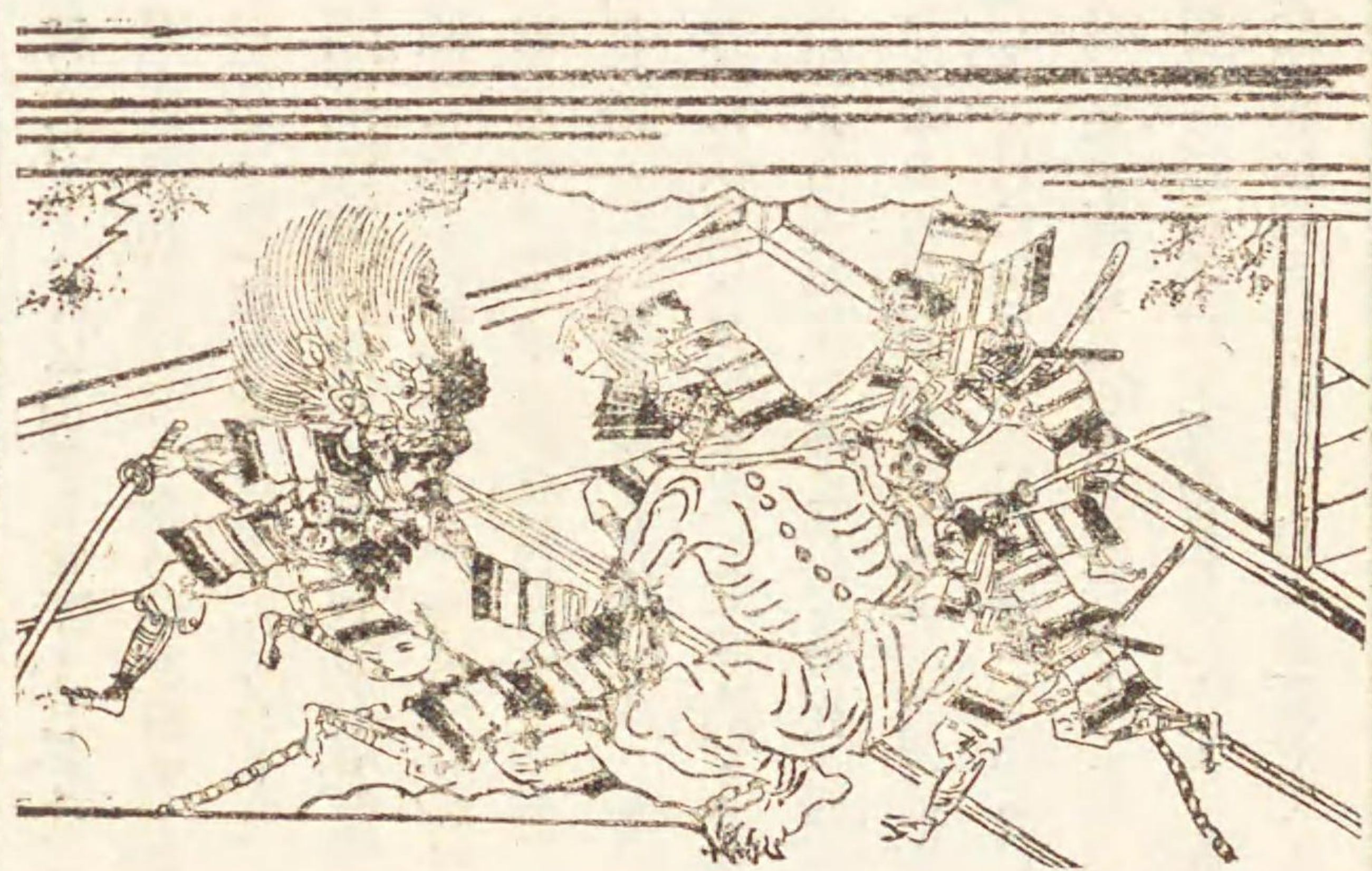
て花を散らさん、おもしろやと、これも又おし返し二三べんこそ舞うたりける。此歌の心もち、これにありあふ鬼どもを、嵐に花の散る如くになすべしとの歌の心を、鬼は少しも聞き知らず、あらおもしろやと感じつよ、次第々々にゑひほれて、童子申されけるやうは、いかにありあふ鬼どもよ、客僧たちをよきに慰め申すべし、それがしが代官には二人の姫を残し置く、それに姑くおやすみあれ、明日對面申すべしとて、童子は奥にぞ入りにける。残る鬼ども童子の歸らせ給ふを見て、此處や彼處に臥したるは、さながら死人の如くなり。頼光此由御覽じて、二人の姫君を近づけて、御身たちは都にては誰の姫にてましますぞ。さん候ふ、みづからは池田の中納言にたかのひとり姫にてありけるが、近き程にとられ來て、戀しき二人の父母や、お乳やめのもとに逢ひもせで、かく淺ましき姿をば、あはれと思召せやとて、只さめくと泣き給ふ。今一人の姫君はと問はせ給へば、さん候ふ、みづからは吉田の宰相のおと姫にてさふらひしが、中々命の消えやらで、恨しさよとかきくどき、二人の姫君諸共に、聲もをします消え入るやうに泣き給ふ。頼光此由聞しめし、道理なり、さりながら鬼を今夜平けて御身たちを都へ御とも申しつよ、戀しきふたりの父母に見參させ申すべし、鬼の臥所をわれくに導き給へ

とありければ、姫君たちは聞召し、是は夢かやうつよかやと、其儀にてあるならば、鬼の臥所をわれくがよきに案内申すべし、御用意あれとありければ、頼光斜に思召し、其儀にて候はど、面々物具し給へとて、まづ傍にぞ忍ばれける。頼光の出でたちには、らんでん鎖と申して、緋おどしの鎧を召し、三社の神の給ひし星冑に、同じけの獅子王の御冑おしかさねて召されつよ、ちすると申せしつるぎを持ち、南無や八幡大菩薩と、心のうちに祈念して進み出で給ふ。残る五人の人々も、思ひくゝの鎧を著、いづれも劣らぬつるぎを持ち、女房たちを先にたて、心靜に忍び行く。廣き座敷をさしすぎて、石橋をうち渡り、内の體を見給へば、皆々酒にゑひふして、たぞと咎むる鬼もなし。乗り越えく見給へば、廣き座敷のその中に、くろがねにて館をたて、同じ扉に鐵の太きくわんぬきさし立てて、凡夫の力に中々内へ入るべきやうはなし。廊の隙より打見れば、四方に燈火高くたて、鐵杖逆鋒立て竝べ、童子が姿を見てあれば、宵の形とかはりはて、そのたけ二丈あまりにして、髪は赤く、倒に髪の間より角生ひて、鬚も眉毛も繁り合ひ、足手は熊の如くにて、四方へ足手をうち投げてふしたる姿を見る時は、身の毛もよだつばかりなり。ありがたや、三神あらはれ給ひつよ、六人の者どもに能くくこれまで

あこゑもほご
ゑの誤脱か
刀はつるぎ一刀
は利刀なりとの
意か

もうつー追ひつ

参りたり、さりながら心やすく思ふべし、鬼の足手をわれくが鎖にてつなぎつよ、四方の柱に結びつけて、働く氣色はあるまじきぞ、頼光は首を切れ、残る五人の者どもは、あとやさきに立ちまはり、すんくゝに切りすてよ、子細はあらじとのたまひて、門の扉をおし開き、かき消すやうに失せ給ふ。さては三社の神達の、これまで現れ給ふかと、感涙肝に銘じつよ、たのもしく思ひつよ、教へにまかせて、頼光は頭の方に立ちまはり、ちするをするりと抜き給ひて、南無や三社の御神、力を合せてたび給へと、三度禮して切り給へば、鬼神眼を見開きて、なさけなしとよ、客僧達、いつはりなしと聞きつるに、鬼神に横道なき物をと、起きあがらんとせしかども、足手は鎖につながれて、起くべき様のあらざれば、おこゑをあけて叫ぶ聲、雷電いかづち天地も響くばかりなり。もとよりも兵共、刀はつるぎ、太刀ばやにすんくゝに切り給へば、首は天にぞ舞ひ上る。頼光を目にかけて、只一嚙にとねらひしが、星冑に恐れをなし、其身に子細はなかりけり。足手胷まで切り、大庭さして出で給ふ。數多の鬼の中に茨木童子と名のりて、主を討つ奴原に手竝の程を見せんとて、面もふらずかよりける。綱は此由見るよりも、手なみの程は知りつらん、目に物見せてくれんとて、おうつ、まくりつ、暫しが程戦ひけれ



ども、更に勝負は見えざりけり。おし竝べてむ
ずと組み、うへを下へともて返す。綱が力は三
百人、茨木力や強かりけん、綱を取つておし伏
する。頼光此由御覽じて、走り掛つて茨木が細
首ちうにうち落せば、いしくま童子、かね童子、
其外門を固めたる十人あまりの鬼どもが、此由
を見るよりも、今は童子もまします、いづく
を住所となすべきぞ、鬼の岩屋も崩れよと、を
めき叫んでかよりける。六人の人々は、此由を
見給ひて、やさしのやつばらや、手なみの程を
見せんとて、習ひ給ひし兵法をとり出ださせ給
ひて、あなたこなたへ追ひつめて、數多の鬼ど
も悉く平けて、姑く息をぞつがれける。頼光仰
せけるやうは、いかに女房たち、早々出でさせ

給ふべし、今は子細も候ふまじと仰せければ、此聲を聞くよりも、捕られてまします女
房たち、囚屋のうちより轉び落ち、頼光を目にかけて、これは夢かや現かや、われをも
助けてたび給へと、われもわれもと手を合せて歎き悲む有様を、物によく々々譬ふれば、
罪深き罪人が獄卒の手に渡り、無間地獄に落されしを、地藏菩薩の錫杖にて、をんかあ
かみせんさいそはかと救ひ取らせ給ひしも、かくやと思ひ知られたり。

其時六人の人々は、姫君を先になて、奥の體を見給へば、宮殿樓閣玉をたれ、四節の四
季をまなびつと、薨を竝べて立てたるは、心も言もおよばれず。また傍を見給へば、死
骨白骨生しき人、或は人を鮮にして目もあてられぬ其中に、十七八の上臈の片腕おとし
股そがれ、いまだ命は消えやらで、泣き悲みてましますを、頼光御覽じて、あの姫君は
都にて誰の姫君にてましますぞ。姫君たちは聞召し、さん候ふ、あれこそは堀河の姫君
にて候ふとて、急ぎそばに走り寄りて、いかに姫君、いたはしや、みづからどもは客
僧たちの、鬼悉く平けて都へつれて歸らせ給ふが、御身一人残し置き歸るべきかや、悲
しやな、かく恐しき地獄にも、御身に心の引かされて、跡に心の残るぞと、髪搔き撫で
て、何事にては御心に思しめさるゝ事あらば、われ々に語らせ給へ、都へ上りて候は

ば、父母によきに届けて参らすべし、姫君いかにとありければ、此由を聞しめし、羨しの人々や、かく淺ましき露の身の、早くもさきに消えもせで、かやうの姿を人々に見せまゐらす恥しさよ、都に上らせ給ひつよ、父母の此事をしろしめされてあるならば、わが身の事を中々に歎き給はん悲しさよ、記念は思ひの種なれど、姫がかたみとの給ひて、わが黒髪を切りてたべ、又此小袖はみづからが、最後の時まで著たる小袖との給ひて、その黒髪をおし包み、母上さまに参らせて、後世をばとうてたび給へと、よくく届けてたび給へ、いかにあれなる客僧達、歸らせ給はぬそのさきに、みづからにはとどめをさして給はれとて、消え入るやうに泣き給ふ。頼光此由聞召し、けに道理なり、ことわりなり、さりながら都に上りて候はど、父母に此事をよきに案内申しつよ、明日にも成るならば、迎ひの人を下すべし、暇申してさらばとて、物憂き洞を立ち出でて、谷嶺過ぎて急がせ給へば、程もなく大江山の麓なるしもむらの在所につく。頼光仰せけるは、いかに所の者どもよ、急ぎ傳馬を觸れさせて、女房たちを都へ送るべし、いかにくとありければ、うけ給はると申すとき、其頃丹波の國司をば大宮の大臣殿とぞ申しけるが、此由を聞召し、さてもめでたき次第とて、急ぎ雜餉かまへまるらせけり。そのひまに馬

乗物にて、人々を都へ送り給ひけり。都には此事を聞くよりも、頼光の御上りを見物せんとて、ざよめき渡りてひかへたり。

その中に姫を取られし池田の中納言夫婦の人も出で給ひ、いづくまでも逢ひ次第と、迎ひに出でさせ給ひしが、頼光を見つけつよ、すはや是へとの給へば、はや姫君も御覽じて、母上さまとて泣き給ふ。母うへ此由御覽じて、するくと走り寄り、姫君にとり付きて、是は夢かや現かと、消え入るやうに泣き給へば、中納言も聞しめし、一度別れしわが姫に、二たび逢ふこそ嬉しけれと、急ぎ宿所に歸らせ給ふ。頼光は参内あり、帝叡覽ましくとて、御感は申すばかりなし。御褒美限りなかりける。それよりも國土安全長久に、治まる御代とぞなりにける。彼の頼光の御手柄、ためしすくなき弓取とて、上人より下萬民に至るまで、感ぜぬものはなかりける。

書林

大坂心齋橋順慶町

澁川清右衛門

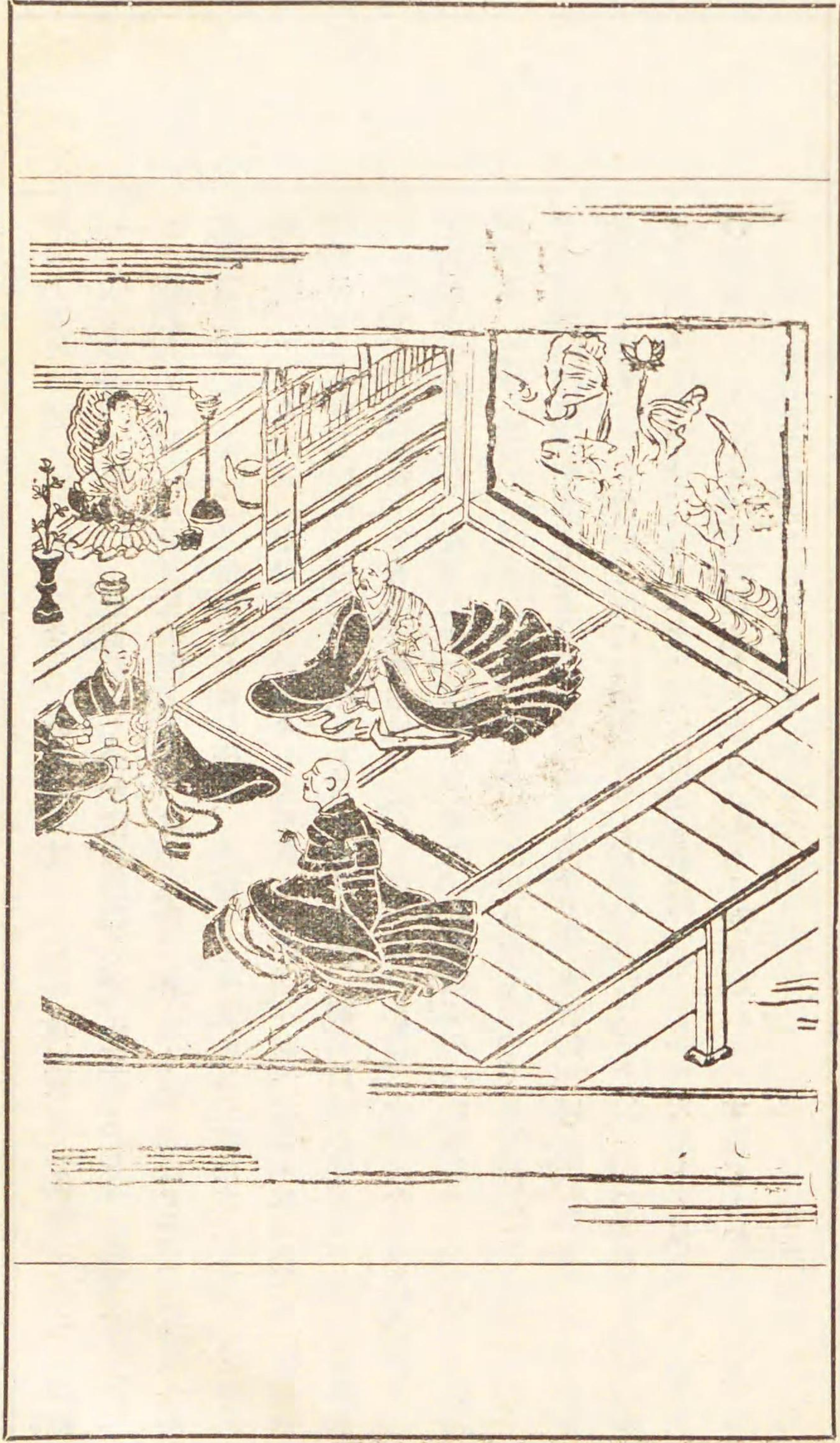
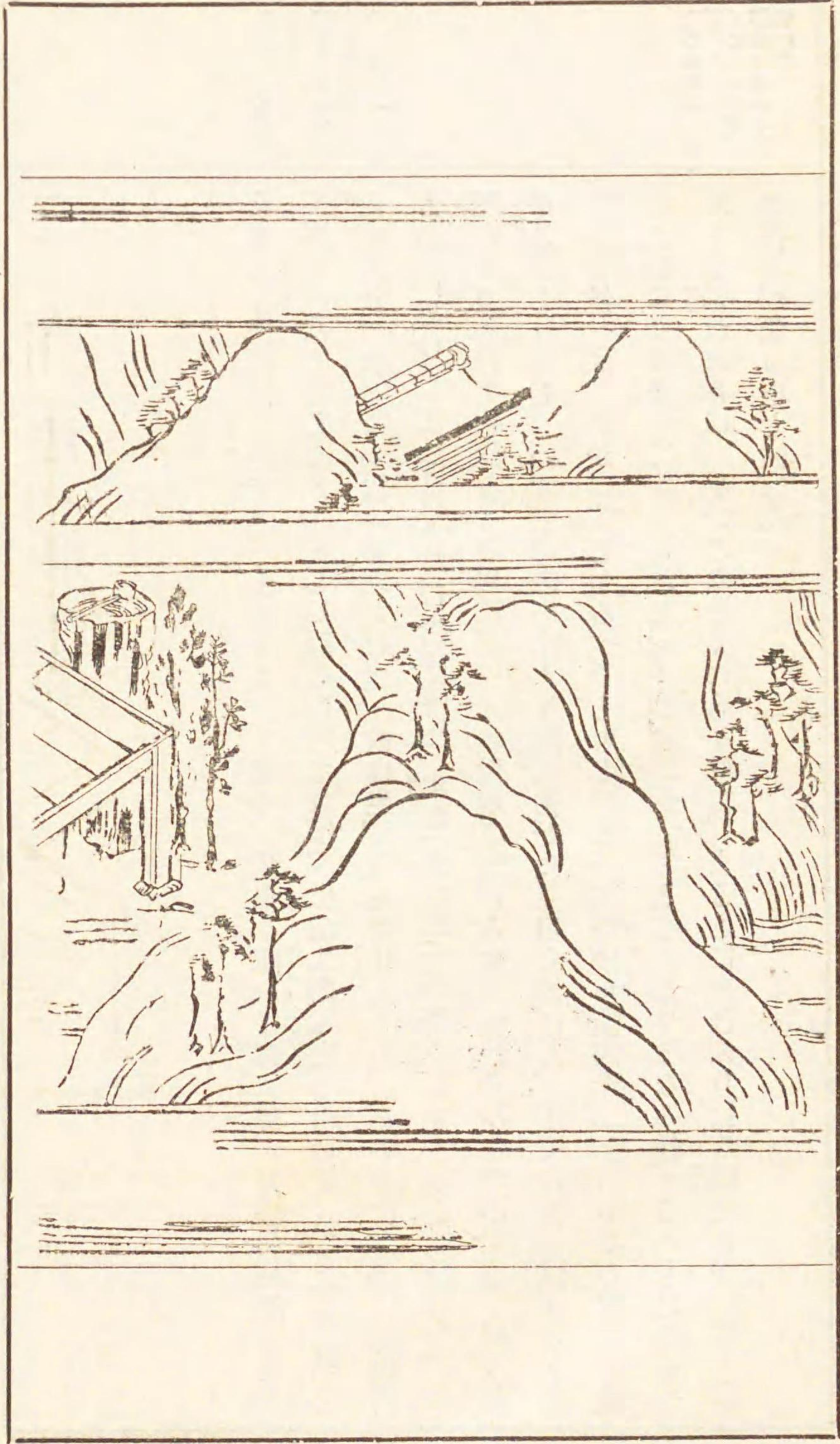
三人法師

三人法師上

王城—一本帝城
とあり
三會のあかつき
—彌勒菩薩出世
の時をいふ

をひろなる—未
くわら—掛羅、
禪僧の用ふる袈
裟の名

そもく、高野山と申すは、王城をさつて遠く、舊里を離れて無人聲、八葉の峰峨々として高し、八の谷しんくとして靜なる所なれば、弘法大師入定し給ひて、世尊の出世、三會のあかつきを待ち給ふ靈地なれば、或は坐禪入定の床もあり、あるひは念佛三昧の所もあり、思ひく、に浮世を厭ひ給ふ處に、半出家の僧三人、所々にすまひし給ひしが、一所によりあひて物語をする程に、一人の僧申されけるは、われらみな半出家也、何ゆゑに遁世しけるぞ、いざ坐禪のめんく、懺悔物がたり申し候はん、懺悔に罪を滅すると申す事の候へば、何かは苦しかるべきと申しける。其中に年頃四十二三計りなる僧の、難行苦行に身は瘦せて衰へたれども、かねふかくとじんじやうなる僧、ころものこよやかしこ破れたるに、をひろなるくわらかけて、まことに思ひ入りたる體なるが、さらば愚僧まづ語り申し候はん。



京中の事にて候へば、定めてきこしめしても候ひつらん、尊氏將軍の御時、それがしは糟谷の四郎左衛門と申して、近習にめしつかはれ候ひしが、十三のとしより御所へまゐり、靈佛靈社の御とも、月見花見の御ともに、はづれ申す事なく候ふほどに、二條殿へ御成候ひし程に、をりふし傍輩ども會合仕り、身がもとへ使を二三度たて、おそしと申し候ふほどに、それに心をひき候ひてよりも、御どもの過ぎ候へかすと存じ候て、御座敷の體をのぞき見し所に、御酒二三獻目とおほえ候ふ時、御引出物と見えて、廣蓋に御小袖をおきて、女房たちのもちて御出候ひしが、御年はいまだ二十にはならせ給ひ候はじと見えさせ給ひしが、ねりぬきのはだ小袖に、紅花綠葉のいかさねに、くれなるの袴をふみ、たけなる髪をゆりかけて、何と申すばかりなくうつくしく御わたり候ひしが、ものに譬へば楊貴妃、漢の李夫人、我朝のそとほり姫、小野の小町、染殿のきさき、女御更衣と申すとも、いかでかこれには勝るべき、あはれ人間に生まれれば、かやうなる人に詞をまじへ、枕を並べばや、せめて今一たび出でさせ給へかし、一目なりとも見參らせんと思ひ染めしより、心うく胸のけぶりとなり、心あこがれ忘れんとすれどもわすられず、更にうつともなき戀となりぬ。

いたはり一所勞病氣
昔ならば戀云々
一戀情を卑みし
時世を見るべし

さる程に將軍も還御なりぬ、わが身も宿所にかへり候ふ。さてそののち上臈のおもかけ忘れがたく候て、食事をたやし打ち臥して、四五日出仕をも申さず候ふほどに、御所様より、何とて此程はかすやはまるらぬぞと御尋ね候ふに、違例のよし申して候へば、やがて藥師を召されて、療治をもせよと仰せられ候ふ程に、くすしわが宿へ參りぬ。起き直り烏帽子直垂うちかぶり候て、對面つかまつり候へば、脈をしばらく取りて、もとの座敷へなほり、申すやうは、あら不思議や、べちに本病とはおほえ候はず、人を怨みさせ給ふやらん、または大事の御訴訟を御もち候ふかと申しけり。其時さらぬ體にもてなし、われら幼少に候ひし時、かやうのいたはりをして候ひしが、養生つかまつり候て、十四五日にてなほり候ひし程に、其日かすを待ち候ふべし、何の大事をもち候ふべきと申して候へば、くすし御前へまゐり申しけるは、さすがわづらひとは存じ候はず、身に大事をもちたる人にて候ふか、けにや昔ならば戀とも申すべきいたはりにて候ふと申し上げければ、將軍仰せけるやうは、今なればとて戀といふ事のあるまじきにてもなし、かすやが心のうちを問はせばやと仰せ出されける。佐々木三郎左衛門こそ、深き知音にて候へと申し上げければ、佐々木を召されて仰せ付けられけるは、かすやが方へゆき、看病

心ふかしー用心
深し
給はりー一本下
されとあり

をもせさせ、心の内をも尋ね候へと御詫なれば、佐々木まるり、まづ身をうらみ候ひしやうは、傍輩多きその中に、御邊とそれがしは深き契約申し候て、兄弟の如くに候ひつるに、などや是ほどの御いたはりばうけたまはり候はぬと、色々に怨み候ひし間、それがしが返事には、さしていたはりなく候ふ程に、一人もちて候ふ老母にさへ知らせず候ふ、御うらみは御ことわりにて候ふ、その上大事候はど、これより申すべく候ふ、事々しく候ふに御かへり候へ、身こそ候ふらめ、御所中の事は不思議なる事も候てはと、かさねて申し候ひしかども、看病すべきよし申し候て、四五日打添ひて、わが心の内を問ひ候ひしに、しばらくは包みしかども、あまり心ふかしく思ひ候て、ありのまよに語り候へば、佐々木此よしを聞き候て、さては御分は戀をしけるものを、あら易き事やとて、さらぬやうにて座敷をたち、やがて御所へ参り、此よしを申上げけり。さては易き事よと仰せありて、かたじけなくも御所様御文をあそばして、佐々木を御つかひにて、二條殿へ参らせられける、御返事には、をのへと申す女房にてわたり候ふ程に、地下へくだすまじきにて候ふ、その人をこなたへ給はり候ふべきよしあそばされ候ひし文の御返事を、我らが宿へ給はり候ふ、御所様の御恩報じ申すべきやうもなし。これにつきてもあぢき

御ちうさくー御
中始か

けつころー結構
にて用意するこ
と
けてうー嚴重に
ていかめしくの
意

女房又ー女房ま
だの衍か

なき世かな、たとへをのへ殿に逢ひたてまつり候ふとも、たゞ一夜の夢のちぎりなるべし、是こそ遁世する所と存じ候ひしが、又打返し思ひ候ふ事は、糟谷こそ二條殿の女房たちを戀ひ申し、將軍の御ちうさくにて有りけるが、臆してあひ申さで遁世したるなどと言はれん事、生涯の恥と存じて、せめて一夜なりとも逢ひ申し、そののちはともかくもと存じ候て、ある夜おもひ立ち、さしてけつころうするとはおほえず候ひしかども、けてうに出立ちて、若黨三人めし具して、案内者をもつて、夜ふけがたに二條殿の御所へ参りて候へば、きようがる座敷を屏風唐繪にてかざり、同じ程の女房達四五人、花やかにいでたせ給ひて有りし所へ入りぬ。さておのく酒二三獻すぎ候て後は、茶香のあそびさまさまに候ひしなり。只一目見申せしことなれば、何れがをのへ殿にて御わたり候ふやらん、いづれもくうつくしく御入り候ふ程に、迷惑仕り候ふ所に、きこしめしたる御盃を持ちながら、我身が候ひし所ちかぐとさし寄せ給ひて、人一人へだて候て御思ひざし候ふ時こそ、是が尾上殿よと心得て、御さかづき給はり候ふ。さて夜も明けがたになりしかば、八聲のとりも告げわたり。寺々の鐘もきぬぐのわかれをもよほし、行くへ久しく契りおき、女房又夜ふかきにかへり給ふ。ねみだれ髪のみまよりも、花やかなるかほば

せ、緑のまゆすみ、丹花たんくわの脣、まことにむつまじき御姿にて、椽えんへ立ちいでさせたまひ、一首かくこそあそばし候ひしぞや。

ならばすよたまに逢ひぬる人ゆゑにけさは置きつる袖の白露かへし

こひえては逢ふ夜の袖の白露を君がかたみに包みてぞ置く

さて其のちは御所へも参り候ふ、又身が宿へも忍びてときく御入り候ひし事なれば、定めて御ひろうにもあるらんとて、將軍より近江の國に千石千貫の所をまるらせられ候ひしなり。次にわれらは北野の天神を信じ申し候て、毎月廿四日に参籠さんろう仕り候ひしが、此女房ゆゑに懈怠けだ申し候ふ程に、をりふし頃は十二月廿四日の夜にて候ふ程に、歳末と申し、此程の懈怠けだをも懺悔ざんげ申さんがために参りて、夜のふくるまで念誦ねんじゆ申し候ひし處に、あるかたはらに、あらいたはしや、何れの人にて御わたりあるやらんと申すを、あやしと聞き、よくく尋ね候へば、都近くなるところに、年十七八ほどの女房をころし、衣裳いしやうを剥ぎとりたると申す程に、あまりに怪しく思ひ、取るものも取り敢へず走り行きて見候へば、少しもたがはせ給はず、かの女房にて候ふあひだ、夢うつともおほえず、あまつさへ

御ひろう御披露

髪をだにも切りて候ふ程に、ともかくも申すばかりなく呆あきれはて候ひし也。いかなる罪の報ぢがいにや、かゝる憂きめを見る事の悲しさよ、逢ふを嬉しと思ひしも、今はかへりてうらみなり、さきだち行きし人ゆゑに、なにしに心を盡しつらん、我ゆゑに君もいまだ廿にも足らずして、女房の身として、邪見のつるぎのさきにかゝり給ふ事よと思ひし、その時わが身が心のうちをば思しめしやらせ給へ、いかなる鬼神おにかみ、乃至五百騎三百騎が中へわつて入り、心ばかりのはたらき、棄つるいのち露ちり程も惜しからず候ひつれども、知らねば力およばず、やがて其夜に髻むすこをきりて僧になり、この御山にはや廿年ばかり、その女房の菩提ぼだいをとぶらひ候ふなりと語りければ、二人の僧、墨染の袖をぬらしけり。又一人の僧、年五十ばかりになりけるが、たけは六尺ばかりにて、くびの骨ぬけ出でて、おとがひそり、頬骨ほほほねあれ、唇あつく目鼻大きに、色くろく、きはめて骨ほねがちなるが、やぶれたるぬの衣ころもに、おなじくくわらふところにおし入れて、大きな数珠じゆずをつまぐりて申すやう、此次このつぎをばそれがし語り申さんといふ。さらばとくく語り給へといひける。不思議やな、その上臈ろうをばそれがしが殺しまるらせしといふ。はんかい聞きてきつとるなほり、色かはりて思ひきりたる體ていなり。その時入道僧申すやう、しばらく御し

はんかい一かす
谷を半谷と誤書
しそれをはんが
いと讀みたるに
や